

一般国道9号（青谷・羽合道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 VI

鳥取県気高郡青谷町

青谷上寺地遺跡2




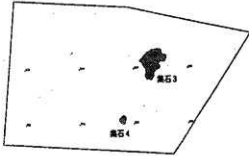
2000

財団法人 鳥取県教育文化財団

建設省 鳥取工事事務所

正 誤 表

お手数ですが、以下のとおり訂正のうえ、ご活用下さい。

66ページ 第97図	
誤	正
	
71ページ 第106図	
誤	正
	



3区SD27、SA11検出状況（北東から）

巻頭図版 2



3区SD27、SA11検出状況（北から）



3区SD27護岸施設（北西から）



3区S D28、36、37検出状況（北から）



3区S D28杭列（南西から）

巻頭図版 4



1区SD11木器溜検出状況（北から）



1区SD11矢板列検出状況（北から）



1区S D33木器溜検出状況（南東から）



1区S D33完掘状況（南東から）



3区S A15~17検出状況（西から）



3区漂着人骨1検出状況（東から）



3区 S K201検出状況（北東から）



3区 S K201検出状況・近接（北から）



3区卜骨集積遺構1検出状況(南東から)



3区S K287遺物出土状況(北西から)

一般国道9号（青谷・羽合道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書VI

鳥取県気高郡青谷町

青谷上寺地遺跡2

2000

財団法人 鳥取県教育文化財団
建設省 鳥取工事事務所

序 文

一般国道9号は、京都市を起点として福知山市及び兵庫県但馬地方を經由し、蒲生峠から山陰地方へ入り、日本海に沿って鳥取・島根両県を西走し、下関市に至る延長約674kmの主要幹線道路であり、西日本の産業・経済活動の大動脈として大きな役割を果たしています。

このうち建設省鳥取工事事務所では、岩美郡岩美町（鳥取・兵庫県境）から気高郡青谷町までの約48.5kmを管理しており、広域交流を進める道づくり、暮らしを豊かにする道づくり等各種の道路整備事業を実施しています。その一つに環日本海交流の基幹軸の一環を担う高規格幹線道路（自動車専用道路）の一部となる青谷羽合道路のうち、青谷工区の整備を鋭意進めているところです。

このルート上には、多数の周知の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁へ通知した結果、事前に発掘調査の実施と記録保存を行うこととなりました。

このうち、平成10年度から平成11年度にかけて、「青谷上寺地遺跡」について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査委託契約を締結し、鳥取県教育委員会の指導のもと発掘調査が行われました。

本書はこの調査結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめられたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深めるために寄与し、また教育及び学術研究のために広く活用されることを望みますとともに、建設省としても、道路事業の実施にあたっては文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることに対して皆様ご理解いただけることを期待するものであります。

終わりに、事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集に至るまでご尽力いただいた鳥取県教育委員会、及び財団法人鳥取県教育文化財団の関係各位に対し心から感謝申し上げます。

平成12年3月

建設省中国地方建設局

鳥取工事事務所長 中 島 英一郎

例 言

1. 本報告書は平成10年度から11年度にかけて行った「一般国道9号改築工事(青谷・羽合道路)に伴う埋蔵文化財発掘調査」による、埋蔵文化財発掘調査記録のうち、調査区1区から3区までの遺構に関する報告である。1区から3区の遺物及び4区、5区に関する報告は次年度刊行予定である。
2. 本発掘調査は、建設省の委託を受け、財団法人鳥取県教育文化財団が実施した。
3. 本発掘調査は、下記の遺跡を対象として実施された。
青谷上寺地遺跡(鳥取県気高郡青谷町大字青谷字上寺地ほか所在)
4. 本報告書は、並行して行われた「一般県道青谷停車場手線地方特定道路整備事業」に係る青谷上寺地遺跡発掘調査報告書と体裁の一致を図っている。
5. 本発掘調査に至る経緯及び発掘調査の経過については、一般県道青谷停車場手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ「青谷上寺地遺跡Ⅰ」にまとめられている。
6. 本発掘調査の実施にあたっては、遺構、遺物に関する指導を(財)ユネスコ・アジア文化センター文化財保護協力事務所工藤善通先生、大阪府立弥生文化博物館金岡勉先生、京都国立博物館藤波洋三先生、芦屋市教育委員会森岡秀人先生、名古屋大学渡辺誠先生、愛媛大学下條信行先生、村上恭通先生に、堆積物に関する現地指導を放送大学赤木三郎先生に、人骨等の取り上げ、鑑定を鳥取大学井上貴央先生に、木製品の樹種鑑定を鳥取大学古川郁夫先生に、木製構造物の年齢年代測定を奈良国立文化財研究所光谷拓実先生にそれぞれお願いした。また佐賀大学和佐野喜久生先生には、炭化米について本報告書に御寄稿いただいた。明記して深甚の謝意を表します。
7. 本発掘調査の実施にあたっては、土壌分析、珪素分析及び木製品の保存処理の一部をそれぞれ専門業者に、現地における基準点測量、遺構の写真測量、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を業者に委託した。
8. 本報告書の作成は調査員の協議に基づいて行い、編集は北浦が行った。
本報告書に掲載した図面、図版は、調査員が作成した。遺物の実測、図面の浄書は、鳥取県埋蔵文化財センターで行った。
9. 本報告に関わる記録類及び出土遺物は、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
10. 現地調査及び報告書の作成に当たっては、上記の先生方のほかに、多くの方々からのご指導、ご助言、ご支援をいただいた。明記して深謝いたします(敬称略、順不同)。
松本岩雄 田中義昭 平野芳英 松井 章 深澤芳樹 和田晴吉 宮崎泰史 橋本裕行 永島利春 寺沢 薫
佐原 眞 岡村道雄 扇崎 由 西谷 正 比佐剛一郎 西尾克己 西本豊弘 白田義彦 林 日佐子
村田晃一 豆谷和之 廣瀬常雄 細川金也 重藤輝行 田中正弘 宮腰健司 野口哲也 原田 幹 楠 正勝
橋本正博 孫 明助 趙 現鏡 白石 純 藤田三郎 村上年生 青谷町 青谷町教育委員会
青谷町立青谷中学校 青谷町立あおや郷土館 奈良国立文化財研究所 鳥根県立八雲立つ風土記の丘
銅鐸博物館 (財)大阪府埋蔵文化財調査研究センター 大阪府立弥生文化博物館 田原本町教育委員会
愛知県教育委員会 (財)愛知県埋蔵文化財センター 基山町教育委員会 佐賀県教育委員会
福岡県埋蔵文化財センター 金沢市教育委員会 小松市教育委員会 京都国立博物館

凡 例

1. 本報告書における方位はすべて真北を示し、レベルは海拔高である。X=、Y=の数值は、国土地理院V系の座標値である。
2. 発掘調査時における遺構名は、報告書作成時において大幅に変更している。新旧の対照は、第1章に示した対照表を参照されたい。
3. 本報告書において、遺構名に略称を用いたものは次のとおりである。
SK:土坑、SD:溝状遺構、SA:穴列
遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外のものは断面白抜きで表した。
4. 本報告書における遺構番号は、一般県道青谷停車場手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ「青谷上寺地遺跡Ⅰ」からの通し番号である。
5. 遺物には原則的に遺跡名(略称K)Bと表示し、グリッド名、遺構名、取上番号、取上年月日を記入した。遺構名については、旧名を記入している。
6. 遺物の時期決定に際しては、下記の土器編年に依っている。
清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年-山陽・山陰編-』株式会社木耳社。
松井 潔 1997「東の土器、南の土器」『古代占備』第19集 古代占備研究会。

目 次

序文

例言、凡例

目次

第1章 調査の概要

第1節 はじめに	1
第2節 基本層序	2
第3節 遺構、遺物の概要	10
第4節 古環境と遺跡の変遷	12

第2章 弥生時代中期中葉～後葉の遺構

第1節 土坑	13
第2節 溝、杭列	23
第3節 ト骨集積遺構	30
第4節 漂着人骨	31

第3章 弥生時代後期初頭～後葉の遺構

第1節 土坑	33
第2節 溝	56

第4章 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構

第1節 土坑	65
第2節 溝、杭列	91
第3節 土器溜	99
第4節 集石	103

第5章 古墳時代以降の遺構

第1節 土坑	105
第2節 土器溜	109
第3節 集石	111

第6章 関連諸分野の成果

第1節 はじめに	113
第2節 青谷上寺地遺跡の炭化米特性と稲作起源	佐賀大学 和佐野喜久生 114
第3節 青谷上寺地遺跡におけるプラント・オパール分析	株式会社古環境研究所 124
第4節 青谷上寺地遺跡における花粉分析	株式会社古環境研究所 129
第5節 青谷上寺地遺跡における珪藻分析	株式会社古環境研究所 134

第7章 おわりに	139
----------	-----

抄録

図版

挿 図 目 次

第1図	青谷上寺地遺跡国道調査区配置図	2	第36図	弥生時代後期初頭～後葉2区遺構配置図	35
第2図	1区土層図(1)	2	第37図	S K 202及び出土遺物	36
第3図	1区土層図(2)	3	第38図	S K 203及び出土遺物	36
第4図	2区土層図(1)	4	第39図	S K 204及び出土遺物	36
第5図	2区土層図(2)	5	第40図	S K 205及び出土遺物	37
第6図	2区土層図(3)	6	第41図	S K 206及び出土遺物	37
第7図	3区土層図	7	第42図	S K 207	37
第8図	弥生時代中期中葉～後葉遺構分布図	8	第43図	S K 208及び出土遺物	39
第9図	弥生時代後期初頭～後葉遺構分布図	8	第44図	S K 209及び出土遺物	39
第10図	弥生時代後期末～古墳時代前期初頭 遺構分布図	9	第45図	S K 210及び出土遺物	39
第11図	古墳時代以降の遺構分布図	9	第46図	S K 211及び出土遺物	41
第12図	焼土66	10	第47図	S K 212及び出土遺物	41
第13図	弥生時代中期中葉～後葉3区遺構配置図	13	第48図	S K 213及び出土遺物	41
第14図	弥生時代中期中葉～後葉2区遺構配置図	14	第49図	S K 214及び出土遺物	42
第15図	S K 192及び出土遺物	16	第50図	S K 215及び出土遺物	42
第16図	S K 193及び出土遺物	16	第51図	S K 216	42
第17図	S K 194及び出土遺物	17	第52図	S K 217及び出土遺物	43
第18図	S K 195及び出土遺物	17	第53図	S K 218及び出土遺物	43
第19図	S K 196及び出土遺物	17	第54図	S K 219及び出土遺物	43
第20図	S K 197及び出土遺物	18	第55図	S K 220及び出土遺物	45
第21図	S K 198及び出土遺物	18	第56図	S K 221及び出土遺物	45
第22図	S K 199及び出土遺物	18	第57図	S K 222及び出土遺物	45
第23図	S K 200及び出土遺物	19	第58図	S K 223及び出土遺物	47
第24図	S K 201	20	第59図	S K 224及び出土遺物	47
第25図	S K 201上層図及び出土遺物	22	第60図	S K 225及び出土遺物	47
第26図	S A 8～10及び出土遺物	23	第61図	S K 226及び出土遺物	48
第27図	S D 27、S A 11木器溜検出状況	25	第62図	S K 227及び出土遺物	48
第28図	S D 27護岸施設、S A 11検出状況	26	第63図	S K 228及び出土遺物	48
第29図	S D 27護岸施設立面図	27	第64図	S K 229及び出土遺物	48
第30図	S D 27出土遺物(1)	28	第65図	S K 230及び出土遺物	48
第31図	S D 27出土遺物(2)	29	第66図	S K 231及び出土遺物	49
第32図	卜骨集積遺構1	30	第67図	S K 232及び出土遺物	49
第33図	漂着人骨1検出状況	31	第68図	S K 233	49
第34図	弥生時代後期初頭～後葉1区遺構配置図	34	第69図	S K 234	49
第35図	弥生時代後期初頭～後葉3区遺構配置図	34	第70図	S K 235	49
			第71図	S K 236	49

第72図	S K237	51	第108図	S K264及び出土遺物	72
第73図	S K238	51	第109図	S K265及び出土遺物	73
第74図	S K239	51	第110図	S K266及び出土遺物	73
第75図	S K240及び出土遺物	51	第111図	S K267及び出土遺物	74
第76図	S K241及び出土遺物	51	第112図	S K268及び出土遺物	74
第77図	S K242	51	第113図	S K269及び出土遺物	74
第78図	S K243	51	第114図	S K270及び出土遺物	75
第79図	S K244	54	第115図	S K271及び出土遺物	75
第80図	S K245	54	第116図	S K272及び出土遺物	77
第81図	S K246	54	第117図	S K273及び出土遺物	77
第82図	S K247	54	第118図	S K274及び出土遺物	79
第83図	S K248	54	第119図	S K275及び出土遺物	79
第84図	S K249	54	第120図	S K276及び出土遺物	80
第85図	S K250	54	第121図	S K277及び出土遺物	80
第86図	S K251	54	第122図	S K278及び出土遺物	80
第87図	S K252	54	第123図	S K279及び出土遺物	81
第88図	S K253	54	第124図	S K280及び出土遺物	81
第89図	S K254及び出土遺物	55	第125図	S K281及び出土遺物	81
第90図	S K255	55	第126図	S K282及び出土遺物	83
第91図	S K256及び出土遺物	55	第127図	S K283及び出土遺物	83
第92図	S D28~32及び出土遺物	57	第128図	S K284、285及び出土遺物	85
第93図	S D11木器溜検出状況	58	第129図	S K286及び出土遺物	85
第94図	S D11矢板列検出状況	59	第130図	S K287及び出土遺物	86
第95図	S D11断面図、土層図及び出土遺物	61	第131図	S K288及び出土遺物	87
第96図	S D33及び出土遺物	63	第132図	S K289及び出土遺物	87
第97図	弥生時代後期末～古墳時代前期初頭 1区遺構配置図	66	第133図	S K290及び出土遺物	87
第98図	弥生時代後期末～古墳時代前期初頭 3区遺構配置図①	66	第134図	S K291及び出土遺物	87
第99図	弥生時代後期末～古墳時代前期初頭 3区遺構配置図②	66	第135図	S K292	89
第100図	弥生時代後期末～古墳時代前期初頭 2区遺構配置図	67	第136図	S K293	90
第101図	S K257及び出土遺物	68	第137図	S K294	90
第102図	S K258及び出土遺物	68	第138図	S K295	90
第103図	S K259及び出土遺物	68	第139図	S K296	90
第104図	S K260及び出土遺物	69	第140図	S K297	90
第105図	S K261及び出土遺物	69	第141図	S K298及び出土遺物	90
第106図	S K262及び出土遺物	71	第142図	S K299	92
第107図	S K263及び出土遺物	71	第143図	S K300	92
				第144図	S K301	92
				第145図	S K302	92
				第146図	S K303	93
				第147図	S K304	93

第148図	S K305	93
第149図	S K306	93
第150図	S D34及び出土遺物	94
第151図	S D35	94
第152図	S A12~14	95
第153図	S D36、37、S A15~17	97
第154図	S D36、37、S A15~17断面図、土層図 及び出土遺物	98
第155図	土器溜7及び出土遺物	99
第156図	土器溜8及び出土遺物	100
第157図	集石2及び出土遺物	101
第158図	集石3	102
第159図	集石4	102
第160図	古墳時代以降1区遺構配置図	106
第161図	古墳時代以降3区遺構配置図	106
第162図	古墳時代以降2区遺構配置図	107
第163図	S K307及び出土遺物	108
第164図	S K308及び出土遺物	109
第165図	S K309及び出土遺物	109
第166図	S K310及び出土遺物	110
第167図	S K311及び出土遺物	110
第168図	土器溜9及び出土遺物	111

第169図	集石5及び出土遺物	112
第170図	国道調査区1~5区配置図	113
第171図	3、4区資料検出地点	113
第172図	青谷上寺地遺跡の所在地及び その周辺の地形図	115
第173図	青谷上寺地遺跡の炭化米粒長の頻度 分布図	117
第174図	比較基準遺跡の炭化米粒長・幅 平均値の分布	118
第175図	青谷上寺地及び比較遺跡の炭化米粒の 粒長・幅平均値(付・95%信頼区間)	118
第176図	青谷上寺地及び比較遺跡の炭化米粒の 平均値の分布(付・95%信頼区間)	122
第177図	5区プラント・オパール分析、花粉 分析サンプリング地点	124
第178図	A地点のプラント・オパール分析結果	126
第179図	B地点のプラント・オパール分析結果	127
第180図	C地点のプラント・オパール分析結果	127
第181図	青谷上寺地遺跡の花粉ダイアグラム	132
第182図	5区珪藻分析サンプリング地点	134
第183図	青谷上寺地遺跡の主要珪藻ダイアグラム	137

挿 表 目 次

表1	遺構新旧対照表	11
表2	青谷上寺地及び比較遺跡の炭化米粒特性 の平均値及び標準偏差	116
表3	青谷上寺地及び比較遺跡の炭化米粒厚 の頻度分布・平均値・標準偏差	120
表4	青谷上寺地及び比較遺跡の炭化米粒長/幅 の頻度分布・平均値・標準偏差	120
表5	青谷上寺地及び比較遺跡の炭化米粒の 粒型分布表	121

表6	青谷上寺地及び比較遺跡の炭化米粒特性 の平均値及び標準偏差	122
表7	青谷上寺地遺跡(5区)のプラント・ オパール分析結果	126
表8	青谷上寺地遺跡の花粉分析結果	131
表9	青谷上寺地遺跡の珪藻分析結果	131

図 版 目 次

- 図版 1 調査区遠景
調査区全景
- 図版 2 1区B13グリッド付近土層堆積状況
2区B18グリッド付近土層堆積状況
2区B22グリッド付近土層堆積状況
- 図版 3 3区北壁B25グリッド付近土層堆積状況
3区北壁B26グリッド付近土層堆積状況
3区北壁B26グリッド付近土層堆積状況
- 図版 4 S K193遺物出土状況
S K196遺物出土状況
S K196完掘状況
- 図版 5 S K200検出状況
S K200遺物出土状況
S K200遺物出土状況・分銅形土製品
- 図版 6 S K201遺物出土状況
S K201遺物出土状況
- 図版 7 S K201遺物出土状況・部分
S K201遺物出土状況・部分
- 図版 8 S D27、S A11検出状況
S D27、S A11検出状況
- 図版 9 S D27、S A11護岸施設・杭、板材使用
S D27護岸施設・礎敷き
- 図版10 S D27遺物出土状況・土器
S D27遺物出土状況・不明木製品
S D27遺物出土状況・琴板
- 図版11 S D27遺物出土状況・鉈
S D27遺物出土状況・骨針
S A 8、9 検出状況
- 図版12 卜骨集積遺構1 検出状況
漂着人骨検出状況
- 図版13 S K202遺物出土状況
S K205遺物出土状況
S K208遺物出土状況
- 図版14 S K213遺物出土状況
S K215遺物出土状況
S K217遺物出土状況
- 図版15 S K220遺物出土状況
S K220遺物出土状況・石鏃
S K224遺物出土状況
- 図版16 S K241遺物出土状況
S K241完掘状況
S K243遺物出土状況
- 図版17 S D28検出状況
S D28検出状況
S D28検出状況・近接
- 図版18 S D11木器溜検出状況
S D11木器溜検出状況
- 図版19 S D11矢筈列検出状況
S D11矢筈列検出状況
- 図版20 S D11土層堆積状況
S D11完掘状況
- 図版21 S D11遺物出土状況・人形木製品
S D11遺物出土状況・流水文刻板状木製品
S D11遺物出土状況・連続渦文刻板状木製品
- 図版22 S D11遺物出土状況・盾
S D11遺物出土状況・木製高環環部
S D11遺物出土状況・木製高環脚部
- 図版23 S D11遺物出土状況・田舟
S D11遺物出土状況・杵
S D11遺物出土状況・横槌
- 図版24 S D33木器溜検出状況
S D33木器溜検出状況
- 図版25 S D33木器溜検出状況
S D33完掘状況
- 図版26 焼土66検出状況
焼土67検出状況
焼土68検出状況
- 図版27 S K257土層堆積状況
S K257遺物出土状況
S K257遺物出土状況・近接

- 図版28 S K 258遺物出土状況
S K 260遺物出土状況
S K 260完掘状況
- 図版29 S K 262遺物出土状況
S K 264遺物出土状況
S K 264遺物出土状況
- 図版30 S K 266遺物出土状況
S K 268遺物出土状況
S K 270遺物出土状況
- 図版31 S K 272遺物出土状況
S K 274遺物出土状況
S K 276遺物出土状況
- 図版32 S K 275遺物出土状況
S K 275完掘状況
S K 278遺物出土状況
- 図版33 S K 279遺物出土状況
S K 281遺物出土状況
S K 282遺物出土状況
- 図版34 S K 283遺物出土状況
S K 284遺物出土状況
S K 285遺物出土状況
- 図版35 S K 286遺物出土状況
S K 287遺物出土状況
S K 287完掘状況
- 図版36 S K 288土層堆積状況
S K 288遺物出土状況
S K 295遺物出土状況
- 図版37 S K 298遺物出土状況
S K 302遺物出土状況
S K 305遺物出土状況
- 図版38 S A 12、13検出状況
S A 12付近遺物出土状況・槽
- 図版39 S D 36木器溜検出状況
S D 36遺物出土状況・銅鏃
S D 36遺物出土状況・木製容器
- 図版40 S A 15検出状況
S A 15検出状況

- 図版41 S A 15~17検出状況
S A 16検出状況
S A 16検出状況
- 図版42 S A 17検出状況
S A 17検出状況
S A 17検出状況
- 図版43 土器溜 7 検出状況
土器溜 8 検出状況
集石 2 検出状況
- 図版44 集石 3 検出状況
集石 3 検出状況
集石 4 検出状況
- 図版45 S K 307遺物出土状況
S K 307遺物出土状況・勾玉形土製品、土玉
S K 307遺物出土状況・勾玉形土製品
- 図版46 S K 308遺物出土状況
S K 309遺物出土状況
S K 310遺物出土状況
- 図版47 土器溜 9 検出状況
土器溜 9 検出状況
集石 5 検出状況
- 図版48 2区II層、銅鐸形土製品出土状況
2区V 2層、輪付土玉出土状況
1区II層、重圍文鏡出土状況
- 図版49 2区I層、鹿角製柄付鬘状鉄製品出土状況
3区I層、袋状鬘出土状況
3区III 1 S層、素環頭刀子出土状況
- 図版50 2区I層、鹿角製離頭銛出土状況
2区I層、猪牙製結合式釣針出土状況
2区I層、不明石製品出土状況
- 図版51 青谷上寺地遺跡の炭化米・粃粒写真(1)
- 図版52 青谷上寺地遺跡の炭化米・粃粒写真(2)
- 図版53 プラント・オパール顕微鏡写真(A地点2層)
プラント・オパール顕微鏡写真(B地点4層)
プラント・オパール顕微鏡写真(C地点4層)
- 図版54 プラント・オパール顕微鏡写真(B地点4層)
プラント・オパール顕微鏡写真(A地点2層)
プラント・オパール顕微鏡写真(B地点4層)
- 図版55 青谷上寺地遺跡の花粉・胎子遺体
- 図版56 青谷上寺地遺跡の珪藻

第1章 調査の概要

第1節 はじめに

本報告書では、1区から3区までの遺構を対象としており、遺物及び4、5区については、次年度の報告となる。発掘調査に至る経緯及び発掘調査の経過、位置と環境については、泉道調査区報告書『青谷上寺地遺跡1』に掲載されており、本報告書では割愛する。次章以降に1区～3区の遺構について概要を記述するが、遺物整理の途上であり、遺構の形状等事実記載に留めざるを得なかった。遺構の時期決定についても、土器の詳細な検討に至らない現状にあっては、凡例に示したとおり清水編年、松井編年に全面的に準拠することとした。このような前提にあって、本節では、本報告書の内容についての理解を少しでも容易にするため、泉道調査区を含めた遺跡の全体像を、まずは概観しておきたい。

青谷上寺地遺跡の泉道、国道両調査区は、青谷平野の中央部、日置川と勝部川の合流地点の南方に位置する。両調査区とも西から1～5区と呼称し、直線距離で泉道調査区270m、国道調査区290mの区間にわたる。現況は、国道3区が水田上に造成された宅地であり、それ以外は全て水田である。それぞれの調査区間は農業水路と農道によって、国道3～4区の間は町道によって区切られている。現況では、町道より西側の泉道調査区1～5区及び国道調査区1～3区側が標高2.3～2.6m、東側の国道調査区4～5区側が標高1.9～2.1mと、町道を境に西側がやや高位を示す。度重なる圃場整備や造成のために表土層（近、現代）は1～2mと厚く、表土層中には暗渠が横断に走る。全体に低湿な環境にあり、発掘時には調査区壁面から常時湧水がみられた。この表土層の厚みや低湿な環境が、遺構、遺物に幸いし、鉄製品や木製品、骨角器の遺存状態を極めて良好なものとした。

調査地においては、弥生時代前期頃までに微高地が出現し、微高地上に立地する泉道調査区5区においては、弥生時代前期末～中期初頭の段階の土坑や方形周溝状遺構などが検出されている。中期段階において遺構の分布域は拡大し、泉道調査区4区東半部や国道調査区2区西半部にまで遺構は広がりをみせる（第8図）。中期後葉段階に至ると、国道調査区3区に、微高地域の東側縁辺に沿う形で、護岸施設を伴う溝SD27が形成され、微高地と低地が区分されはじめる。弥生時代後期に至ると、SD27は埋没し、微高地の版図はさらに拡大し、土坑の分布は国道調査区3区にまで及ぶ（第9図）。後期後半段階には、微高地の西側と東側の縁辺に則して、矢板列を伴う溝が形成される。西側の溝は、泉道調査区4区から国道調査区1区にかけて伸びるSD11、東側の溝は国道調査区4区のSD38である。SD11は、泉道4区において祭祀場が設けられ、溝は微高地と低地を画する聖なる境界として意識されることとなる。弥生時代後期末から古墳時代前期初頭に至ると、東西の溝SD11、38は埋没し、溝の埋土上面にまで土坑や土器溜が形成されるが、さらにその外側にまで及ぶことはない（第10図）。古墳時代前期以降になると遺構の数は極端に減少し（第11図）、遺跡の終焉を思わせるほどとなる。以降遺跡は往時の盛期を取り戻すことはない。

このように青谷上寺地遺跡は微高地を中心に展開するが、遺物包含層も微高地部分を中心に濃密に形成される。矢板列を伴う東西の溝、SD11とSD38付近をボーダーラインとして、低地部分からの遺物の出土量は極端に少なくなる。低地部分では水田跡が確認されており、微高地西側の泉道調査区2区で畦畔が検出された水田跡は、弥生時代前期末にまで遡る可能性がある。微高地東側の国道調査区4、5区においては、弥生時代中期後葉以降に水田化しており、微高地の西側低地の開発は、東側低地に先んじている。

結局のところ国道、泉道両調査区は、南北に伸びる微高地を、東西方向に横断して延長した長大なトレンチのようである。このような調査区設定により、結果的に遺跡の履歴がより明確になり、さらに微高地域の特殊性が際立つものとなった。来年度泉道調査区はさらに東に伸び、国道調査区4区、5区の北側にさしかかる。微高地の有りが、さらに明らかになるものと思われる。

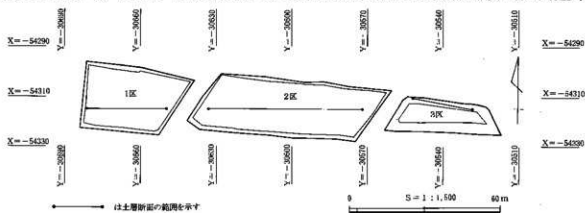
なお、調査において使用した調査区別は、国道、泉道両調査区全体を網羅する範囲に、国土座標に従い10m両

のグリッドを設定し、その南西隅を起点として北に向かいA、B、C…、東に向かい1、2、3…と番号を付した。それぞれ交点となる杭には、A1、B3などと名称を与え、グリッド名は南西隅の杭に従っている。ちなみに起点となるA1地点の国土座標第V系の座標値は、(X=-54330、Y=-30800)である。

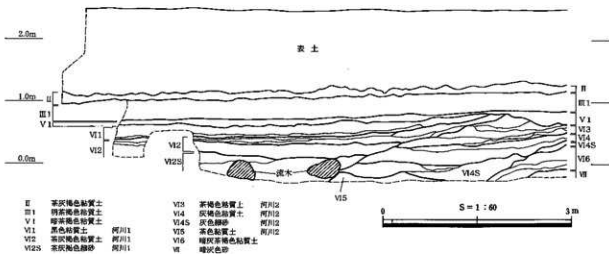
第2節 基本層序

本報告書に係る国道調査区1区～3区の基本層序について述べる。土層断面の観察地点は、1区及び2区については、東西軸のBラインとCラインの中間5mの地点にベルトを設定し、3区については調査区の北側壁面を利用した(第1図)。土層観察ラインは3区で若干方向性を崩すが、堆積状況は概ね把握されるものと考えられる。なお、土層番号として使用したI～VIIIは、土層相互の時間的な整合性を示すものであり、必ずしも同一層とは限らない。土質が特徴的で明確に区分される場合のみ、1、2…といった枝番号を付した。砂層については、末尾にSを付け、区別した。

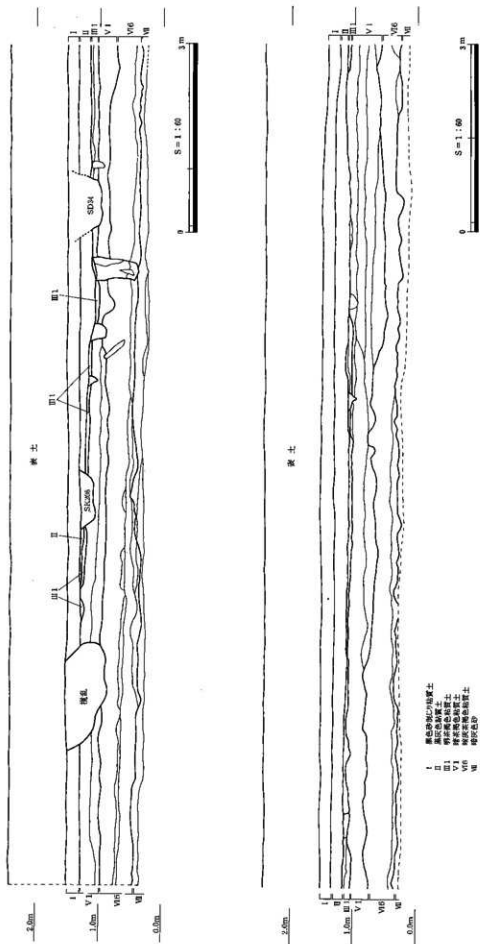
堆積状況は、微高地中心部と縁辺部では異なった様相を呈している。微高地中心部に相当する2区の表土下は、基本的に7層に区分される(第4～6図)。I層は黒色砂泥じり粘質土層で、弥生時代中期から奈良時代までの遺物を包含している。2区では一部攪乱域を除いて、全域に堆積している。II層は黒灰色粘質土層で、弥生時代



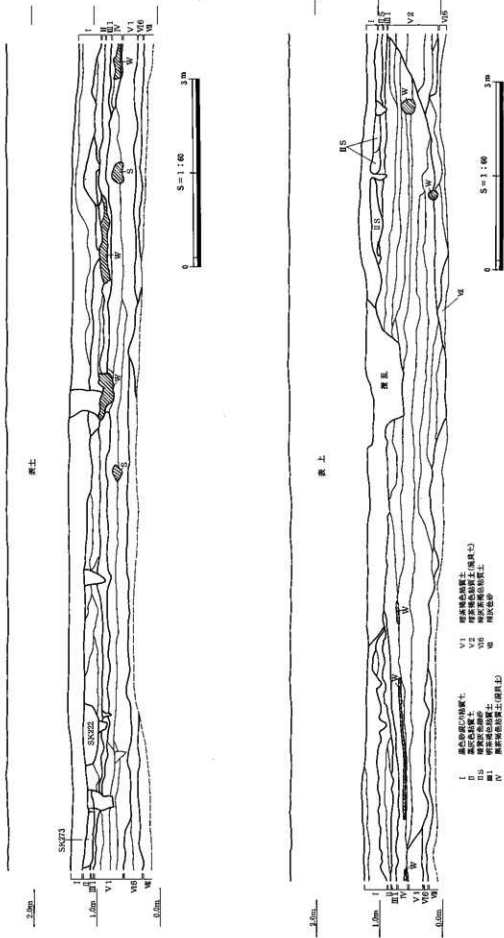
第1図 青谷上寺地遺跡国道調査区配置図



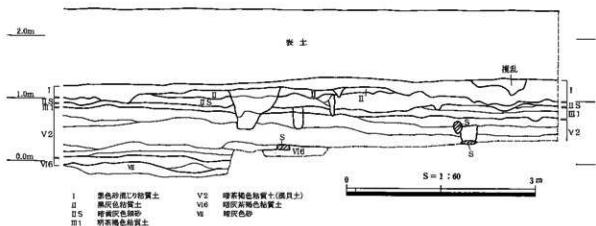
第2図 1区土層図(1)



第4図 2区土層図(1)



第5圖 2区土層圖(2)

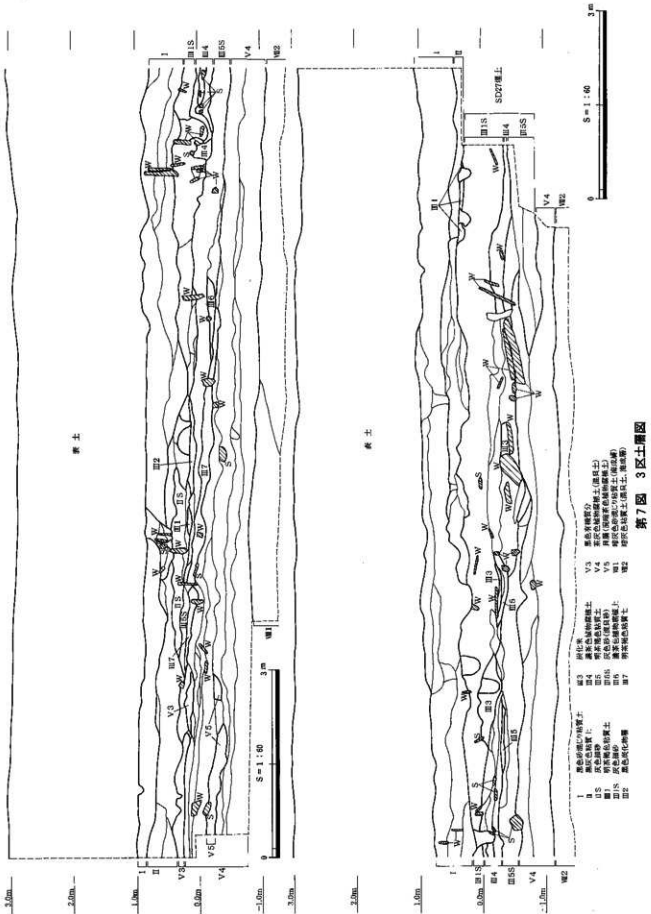


第6図 2区土層図(3)

中期～古墳時代前期初頭の遺物を包含している。I層の下層にあたる。東西両端部で途切れるものの、概ね2区全域に堆積するといつてよい。細分できなかったが、この層中に弥生時代中期から古墳時代前期初頭にかけての各時期の遺構面が存在するものと思われる。III層は明茶褐色粘質土層で、II層の下層にあたり、弥生時代中期後葉以前に堆積した層である。極めてきめの細かい土質であり、全く土壌化されていない。途中途切れるものの、2区のはほぼ全域に薄く堆積している。この層の上面は、II層中で検出出来なかった遺構の検出面となる。III層下層以下では遺構は検出されなくなる。IV層は黒茶褐色粘質土層で、2区の東寄り部分にみられる落ち込み地形部分に堆積したものである。III層の下層であり、弥生時代中期の遺物包含層である。ムラサキガイやマガキを主体とする混貝土層で、多量の木製品が出土している。V1層、V2層は暗茶褐色粘質土で、2区のはほぼ全域に堆積している。IV層の下層にあたる。IV層堆積部分を挟んで、東側がV2層で、混貝土層となる。弥生時代前期末から中期にかけての遺物包含層である。V1層、V2層の下層はVI6層の暗灰茶褐色粘質土で、これより下層は無遺物層である。さらにその下層はVII層の灰色砂層となる。VI6層、VII層ともに、2区全域に堆積している。

1区では(第2、3図)、I、II層相当層の土質が2区と異なる。I層は暗灰褐色粘質土、II層は茶灰褐色粘質土となるが、包含する遺物の時期的な対応関係は、2区と整合する。II層は1区全域に堆積するが、I層は1区の西側部分で途切れてしまう。矢板列を伴う溝SD11、33は、おそらくII層中から掘り込まれているものと思われるが、判別できなかった。III層はSD11より西側にのみ堆積しており、2区より堆積幅が厚い。III層下層のV1層は、2区と整合するものであるが、弥生時代前期後半～中期の遺物包含層であり、遺物の上限が2区より古く遡る。その下層からは無遺物層となる。V1層以下からは、遺構は検出されていない。VI6層、VII層は2区から続くもので、1区の西側にいたると、V1層とVI6層の間にVI1～VI5層の堆積がみられる。自然流路の堆積層であり、河川1と河川2が把握された。VI6層を大きく浸食するものと思われる。

3区の堆積状況は、1、2区と様相を異にする(第7図)。I、II層など上層部は、2区との整合性をみせるが、堆積レベルが0.5～1m低くなる。II層中からIII1S層上面にかけては、弥生時代後期以降の遺構面が存在する。II層下層には、ごく部分的に明茶褐色粘質土層であるIII1層の堆積が確認できるものの、主に砂層(II1S層、III1S層等)が堆積し、一部黒色炭化物層(III2層、V3層)も確認される。III1S層は弥生時代中期後葉の遺物を包含している。III1S層の下層には、濃茶色植物腐植土層であるIII4層が堆積しており、一時的に安定した状態が保たれたことが確認される。III1S層との間層には、多量の炭化米が層を形成しており、漂着した状況を示している。III4層の下層には、混貝土層の茶灰色植物腐植土層であるV4層が厚く堆積している。V4層は、沼沢地など湿地帯的な様相を示すものであるが、弥生時代中期後葉段階に、III5S層がこれを浸食し、のちに護岸施設を伴う溝SD27が整備される。V4層の堆積は、海成層であるVII1、VII2層の上層から始まる。弥生時代中期の遺物包含層ではあるが、堆積過程で貝層であるV5層の形成がみられ、これが弥生時代前期末から中



3区土層圖

記号表

■ 砂色土層埋土
■ 灰黄色粘質土
■ 灰色粘砂
■ IS 灰色砂土
■ IV 灰色粘砂土
■ 棕色粘砂土
■ 棕色粘質土
■ 棕色粘砂質土
■ 棕色粘砂土
■ 棕色粘質土

番号表

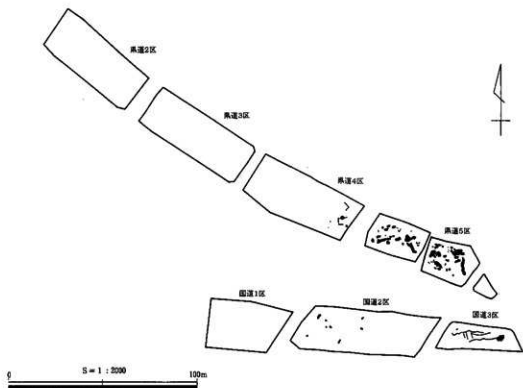
V3 黃色粘砂土
V4 灰色粘砂土
I 砂色土層埋土(埋土土層)
II 灰色粘砂土(埋土土層)
III 棕色粘砂土(埋土土層)
IV 棕色粘質土(埋土土層)
V 棕色粘砂土(埋土土層)
W 棕色粘砂土(埋土土層)

番号表

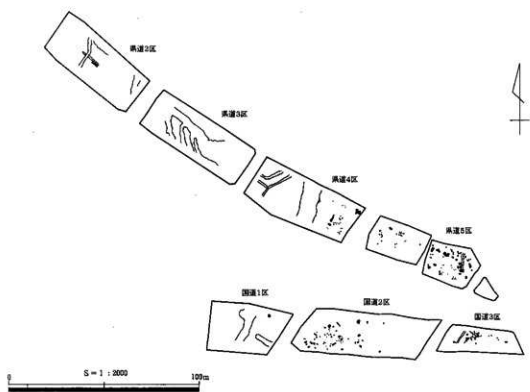
I 砂色土層埋土
IS 灰色粘砂土
IV 灰色粘砂土
W 棕色粘砂土

番号表

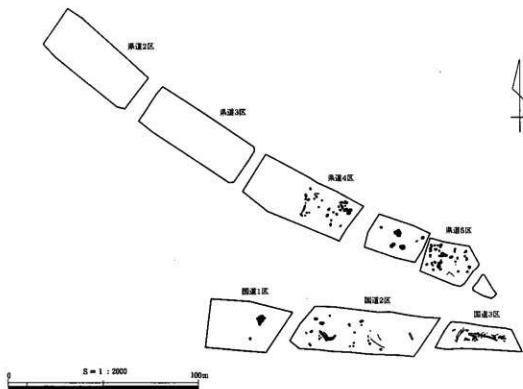
SDOF埋土



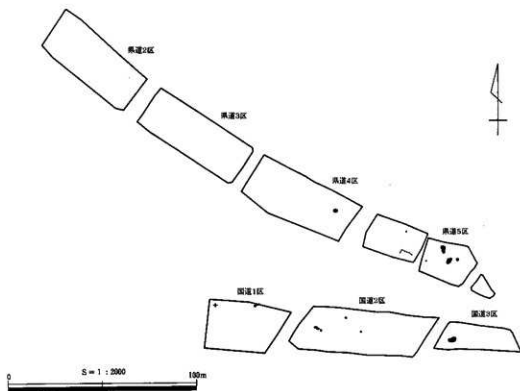
第8図 弥生時代中期中葉～後葉遺構分布図



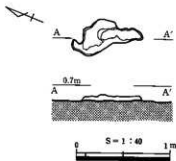
第9図 弥生時代後期初頭～後葉遺構分布図



第10図 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭遺構分布図



第11図 古墳時代以降の遺構分布図



第12図 焼土66

期初頭に比定される県道調査区5区の貝塚に連なるものと思われることからV4層形成の開始は少なくとも弥生時代前期末以前にまで遡るものといえる。

弥生時代中期の遺物の出土レベルが、2区で標高0m付近までであるのに対し、3区では-1m付近まで下がることから、3区下層段階では2区と3区の間で地形が変換し、低地化していることが窺える。1、2区でみられた最下層のⅧ層は3区にはみられず、この砂層の堆積が微高地形成の要因である可能性もある。その後、Ⅲ1S層など厚い砂層の堆積によって3区は微高地化し、弥生時代後期以降、土坑の分布域に取り込まれたものと考えられる。

最後に、県道調査区の堆積状況との整合性について触れておく。I層、II層は県道調査区まで広がっており、それぞれ同土色名の①層、②層に対応する。Ⅲ層は県道調査区にはほとんど存在せず、IV層、V1層は③層灰褐色粘

質土に、V2層、V4層は④層淡茶色粘質土から⑦層褐色粘質土の範疇に相当する。VI層は無遺物層であるが、④～⑦層の範疇に含まれるであろう。Ⅶ層は、⑧層緑灰色砂質土に対応するものである（県道調査区報告書「青谷上寺地遺跡1」第3章 調査の概要 参照）。

第3節 遺構、遺物の概要

国道調査区1区～3区で検出された遺構は、土坑120基、溝12条、杭列10条、土器溜3基、集石4基、焼土7基、ト骨集積遺構1基であり、ほかに着着人骨1体、ビット多数が検出されている。土坑は、各時期を通じて微高地にあたる2区の西半部に集中し、溝は微高地縁辺部にあたる1区や3区に構築される傾向にある。県道調査区も含めた遺構、遺物の概要については、県道調査区報告書「青谷上寺地遺跡1」に掲載されており、本節では国道調査区の遺構分布状況についてごく概略を述べるに留める。なお、本報告書においては、検出された遺構を県道調査区報告書「青谷上寺地遺跡1」と共通する4つの時期区分にまとめて報告している。弥生時代中期葉～後葉、弥生時代後期初頭～後葉、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭、古墳時代以降とはいうものの、前期初頭を含まないことをお断りしておく。

県道調査区にみられる弥生時代前期末～中期初頭の遺構は、国道調査区では検出されていない。弥生時代中期中葉～後葉においては、2区西半部に土坑の集中がみられ、3区では微高地縁辺に沿って大型板材を用いる護岸施設を伴うSD27が検出された。またト骨集積遺構やイノシシの頭骨や穿孔のあるト顎骨を伴う土坑SK201など、祭祀的色彩の窺われる遺構も検出されている。弥生時代後期初頭～後葉においては、3区のSD27が埋没し、土坑の分布域が3区にまで及ぶ。全体的に土坑の数が増加する。1区では、欠板列を伴う溝SD11、SD33が築かれ、微高地西側が低地と画される。弥生時代後期末～古墳時代前期初頭に至ると、2区西半部における土坑の数が減少する。一方3区では、杭列や溝が築かれたのちに埋没し、その上面に土坑等遺構が集積的に形成される。1区では、SD11、33が埋没し、その上層に集石2基が形成され、さらに古墳時代前期に至ると、土器溜が形成される。

最後に、弥生時代後期～古墳時代前期初頭にかけて形成される焼土について触れておく。焼土は、不整形で多様な平面形を呈し、大きさに規格外がみられない。七坑を伴わず、地表面に形成された赤色硬化面であり、時に灰や炭化物の集積として検出される。第12図は焼土66で、弥生時代後期初頭～後葉段階に相当する。不整形な形状を呈し、長軸75cm、短軸50cmを測り、灰分が5cm程度の厚みで遺存している。混入の土器細片が検出されるほかは、遺物は出土しない。焼土の本来的な目的は明らかではないが、成分分析を行っているので参照されたい。（白石純「青谷上寺地遺跡出土土器の付着物、焼土の分析」『青谷上寺地遺跡1』第9章第5節）

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
S K192	S K 5	S K245	S K15	S K298	S K114
S K193	S K43	S K246	S K63	S K299	S K119
S K194	S K46	S K247	S K67	S K300	S K122
S K195	S K59	S K248	S K69	S K301	S K132
S K196	S K70	S K249	S K73	S K302	S K124
S K197	S K89	S K250	S K24	S K303	S K126
S K198	S K93	S K251	S K62	S K304	S K135
S K199	S K95	S K252	S K76	S K305	S K138
S K200	S D 2	S K253	S K80	S K306	S K145
S K201	S K154	S K254	S K54	S K307	S K 3
S K202	S K21	S K255	S K83	S K308	S K47
S K203	S K88	S K256	S D 6	S K309	S K44
S K204	S K90	S K257	S K 7	S K310	S K85
S K205	S K 4	S K258	S K34	S K311	S K92
S K206	S K10	S K259	S K74	S D11	木器溜 1
S K207	S K84	S K260	S K35	S D27	S D25
S K208	S K11	S K261	S K88	S D28	S D13
S K209	S K22	S K262	S K 2	S D29	S D18
S K210	S K23	S K263	S K 6	S D30	S D15
S K211	S K25	S K264	S K17	S D31	S D14
S K212	S K26	S K265	S K 8	S D32	S D22
S K213	S K28	S K266	S K19	S D33	木器溜 2
S K214	S K29	S K267	S K20	S D34	S D 4
S K215	S K32	S K268	S K27	S D35	S D 5
S K216	S K57	S K269	S K33	S D36	S D11
S K217	S K37	S K270	S K40	S D37	S D12
S K218	S K41	S K271	S K42	S A 8	S D27
S K219	S K61	S K272	S K51	S A 9	S D27
S K220	S K50	S K273	S K56	S A10	S D28
S K221	S K53	S K274	S K68	S A11	S D25
S K222	S K55	S K275	S K75	S A12	2区杭列
S K223	S K58	S K276	S K78	S A13	2区杭列
S K224	S K65	S K277	S K112	S A14	2区杭列
S K225	S K71	S K278	S K115	S A15	S D16
S K226	S K72	S K279	S K116	S A16	S D20
S K227	S K77	S K280	S K123	S A17	S D21
S K228	S K81	S K281	S K125	土器溜 7	S K136
S K229	S K86	S K282	S K127	土器溜 8	S K103
S K230	S K87	S K283	S K128	土器溜 9	土器溜 1
S K231	S K91	S K284	S K130	集石 2	SD11上層集石
S K232	S D 3	S K285	S K129	集石 3	集石 1
S K233	S K121	S K286	S K131	集石 4	集石 2
S K234	S K142	S K287	S K133	集石 5	集石 3
S K235	S K139	S K288	S K137	焼土66	焼土 5
S K236	S K143	S K289	S K140	焼土67	焼土 6
S K237	S K144	S K290	S K141	焼土68	焼土 7
S K238	S K150	S K291	S K146	焼土69	焼土 1
S K239	S K149	S K292	S K66	焼土70	焼土 2
S K240	S K148	S K293	S K52	焼土71	焼土 3
S K241	S K147	S K294	S K64	焼土72	焼土 4
S K242	S K153	S K295	S K111	卜骨集積遺構 1	S K155
S K243	S K151	S K296	S K113	漂着人骨 1	S K156
S K244	S K14	S K297	S K118		

表 1 遺構新旧対照表

第4節 古環境と遺跡の変遷

今回の調査にあたっては、調査地内各地点から採取した土壌について、自然科学的な分析を行っている。その結果については、県道、国道両調査報告書の巻末に詳細が掲載されているので参照頂くとして、本節においては、その成果と発掘調査の内容との整合を試み、遺跡をとりまく環境の変遷と遺跡の推移の対応について概観する。なお花粉分析を、微高地部分にあたる県道調査区5区と西側低地にあたる県道調査区3区、東側低地にあたる国道調査区5区で行い、プラント・オパール分析を、西側低地にあたる県道調査区2区、3区、東側低地にあたる国道調査区5区で行った。また、標高-2.5mまで達する土層断面を観察し得た5区では、珪藻分析を行っている。

遺構形成前の青谷上寺地遺跡は、縄文時代晩期の土器の包含が確認されている。縄文時代相当層として土壌採取されたのは、微高地上の県道調査区5区と東側低地にあたる国道調査区5区からである。国道調査区5区では、検出された珪藻遺骸の種類構成によって、縄文期に3期の環境変遷が推定された。土壌採取最下層にあたるI帯では、採取地点が当時河口域にあたり、潮間帯の最上部の環境が考えられている。II帯では、河川の流入する沼沢地の環境へと変化した。潮の干満の影響を強く受けたことが推察されている。III帯では、海水の影響を強く受ける干潟の環境へと変遷が推察され、縄文期の国道調査区5区は、海水の影響を少なからず受ける水域の環境であったことが推定された。一方、微高地にあたる県道調査区5区においては樹木花粉が多く検出され、周囲にスギ林、カンシンの分布が推定される結果となった。また、イネ科とヨモギ属の草本の生育が推定されており、県道調査区5区付近まで、水域が及んでいなかったことが推察され、微高地の出現の萌芽は、縄文期にまで遡ることが推定される。

弥生時代前期末～中期初頭に至ると、県道調査区2区において水田が形成されることとなる。このことと呼応するように、県道調査区5区においても、弥生時代前期末～中期前葉相当層では、イネ科花粉の検出量が増加することが確認されている。またカンシンの減少や、やや乾燥した人為的な環境を好むヨモギ属などの草本の生育など、遺構群の出現に伴う環境変化が読み取れる結果を得た。東側低地の国道調査区5区においては、弥生時代中期相当層において、下層から上層へと向けて、周辺地域におけるカンシンの減少、スギ林の拡大が読み取れ、気候の冷涼化、湿潤化の進行が推測されている。わずかにイネのプラント・オパールが検出されたものの水田と認定できるほどの検出量にはなく、国道調査区5区では低湿な環境にはあったものの、水田開発には至っていない。西側低地の水田開発が東側低地に先じるのは、東側低地が長らく沼沢地等の水域にあったことが原因であろう。なお、鞭虫卵の検出をみており、近隣の遺跡地からの汚染と考えられ、遺跡の規模の拡大が影響したものと推察される。

弥生時代後期に至ると、西側低地にあたる県道調査区2区や東側低地の国道調査区5区において、濃密なイネのプラント・オパールが検出され、この期に至って、東西両低地が水田化することが推察された。県道調査区3区では、イネ科花粉の増加に対し、周辺地域におけるスギ林の減少が確認でき、水田開発の影響が見て取れる。

以上のような古環境の変遷は、遺構の分布状況など遺跡の時間的推移と矛盾するものではない。というよりもむしろ、人為環境の変遷が自然環境に影響を及ぼした結果といえる。弥生時代中期後葉段階にあたるSD27の大型板材使用の護岸施設や、後期後葉段階のSD11、SD38の矢板列などは、大型土木工事に伴うスギ材の大量消費を想定させ、スギ林の伐採が、水田開発のみならず用材供給という主体的な目的性をもつものであったともいえる。しかし、スギ林の分布域の縮小という現象は、弥生時代後期の段階に如実に現れ、治山治水等に少なからぬ影響を与えたことは想像に難くない。古墳時代以降における遺跡衰退の一因をなすものであった可能性も否定できない。

第2章 弥生時代中期中葉～後葉の遺構

第1節 土坑

SK192 (第15図)

国道2区B17グリッドSE区に位置する。長軸71cm、短軸60cmを測る土坑である。検出面の平面形は北東隅が突出する不整な隅丸方形を呈し、底面の平面形は北側と南側から内側にくびれる形態である。西側は柱穴状のピットによって切られている。断面形は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは6.0cmを測る。埋土は2層に分層され、黒灰褐色粘質土と明茶褐色粘質土が堆積している。中央や西よりの底面より0.5～3cm浮いた状態で、壘の口縁部から肩部にかけて(1)が、2片に分かれた状態で出土している。(1)は、口縁端部を上方につまみあげ、繰り上げ口縁とし、2条の凹線を施している。胴部外面は粗いハケ調整、内面はナデ調整である。

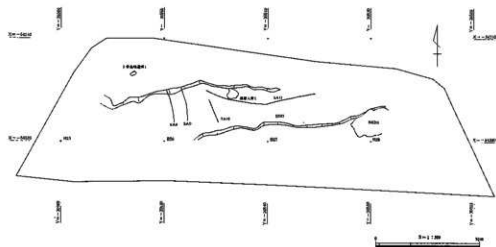
SK193 (第16図・図版5)

国道2区B20グリッドNE区に位置する。東西1.11m、南北99cmを測り、検出面、底面の平面形がともに、北側に内側に湾曲した不整形の土坑である。断面形は逆台形状を呈し、底面は中央部に向けてかすかに傾斜する。検出面からの深さは12cmを測る。埋土は黒灰褐色土1層で、砂を僅かに含む。北東部底面には15cm程程度の角礫が置かれ、これを覆うように壘または壘と思われる胴部から底部にかけての部位2個体分(2、3)が破砕された状態で出土した。底面より4～6cm浮いた状態となる。これより約20cm離れた南側の地点では底面より1cm浮いた状態で、鹿角製の弧状加工品(4)が出土している。遺物は土坑内東側部分に片寄る傾向にある。

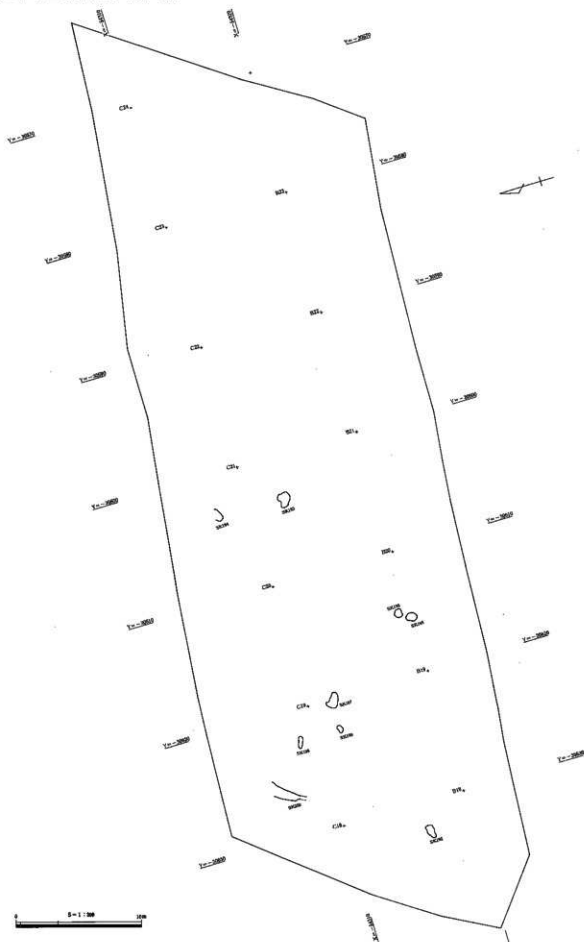
(1)は、埋土中より出土した壘である。口縁部から肩部にかけての破片で、内傾する複合口縁をなす。口縁部に2条の凹線が走り、胴部外面にハケ調整、内面ナデ調整を施し、肩部内面に指押さえがみられる。(2)は、胴部最大径部分よりやや下位から底部にかけての部位で、径9cmの平底を呈する。外面は細かいハケ調整後部分的にナデ消し、底部近くに縦方向の工具痕があり、内面は縦方向のケズリを施す。

SK194 (第17図)

国道2区C20グリッドSE区に位置する。北側は調査に伴う排水溝に切られ、長径残存86cm、短径66cmを測る土坑である。検出面・底面ともに楕円形を指向すると思われる。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦で、検出面からの深さは14.5cmを測る。埋土は微量な混入物の差によって3層に細分できたが、暗灰褐色粘質土を基本とする。細分層は中央にくぼむ断面形を呈し、①層と③層の分層ラインに則して加工板材を検出したが、この



第13図 弥生時代中期中葉～後葉3区遺構配置図



第14図 弥生時代中期中葉～後葉2区遺構配置図

くぼみが作為的なものか否かは判断できなかった。中央やや西よりの埋土上層から高環と思われる胴部片(1)が出土している。

(1)は、底部端部を上方に突き出し、ヘラ状工具による刻みを連続して施している。凹縁は走らず、ヨコナデによる稜線が巡る。体部は外面縦方向のミガキ調整で、裾部で横方向のミガキ調整となる。内面粗いケズリ調整で、底部内面は一定の幅でヨコナデが巡る。

SK195 (第18図)

国道2区A19グリッドNW区からB19グリッドSW区にかけて位置する。長径87cm、短径65cmを測り、検出面・底面ともに不整な楕円形状を呈する土坑である。断面形は変則的な逆台形状を呈し、検出面からの深さは、5.2cmを測る。底面は多少凹凸がある。埋土は2層に分層できたが、暗灰茶褐色粘質土を基本とする。南東側の下端線寄りの底面直上から甕の口縁部(1)が出土し、これより約30cm離れた南西側下端線寄りの底面直上から出土した胴部の破片がこれに接合する。

(1)は、内傾して上下に拡張する繰り上げ口縁に2条の凹縁が巡る。胴部は最大径付近まで遺存し、外面は縦方向のハケ調整、内面は右下がりの斜方向のハケ調整後、左下がりの斜方向のミガキ調整を施す。ミガキは上位ほど密である。

SK196 (第19図・図版5)

国道2区B19グリッドSW区からSE区にかけて位置する。西側空白部は、後世のピット状の落ち込みにより、攪乱されている。長径65cm、短径62cmを測り、検出面、底面ともに不整な円形状を呈する土坑である。断面形は本来逆台形状と思われ、検出面からの深さは、6.8cmを測る。底面は北から南に向かって傾斜する。遺物は、北東側部分に片寄り気味だが、南西側部分にもやや拡散し、いずれも底面直上から出土する。ほぼ1個体分の甕(1)とともに、イヌの骨(2~4)が集積されている。(2)は頭骨で、(1)の甕に近接しており、口吻が南東方向を向く。(3)も頭骨で、口吻が北東方向を向いて(2)と近接する。(4)は下顎骨で、(2)の頭骨と同一個体のものである。このほかに四肢骨や椎骨などが検出されているが、いずれにも解体痕は観察されない。2頭分のイヌの全身骨角が揃わないが、おそらく西側空白部の攪乱部によって損なわれているものと思われ、本来は2頭分のイヌの埋葬土坑であると考えられる。2頭は中型犬で、ほぼ同じ年齢を示す。

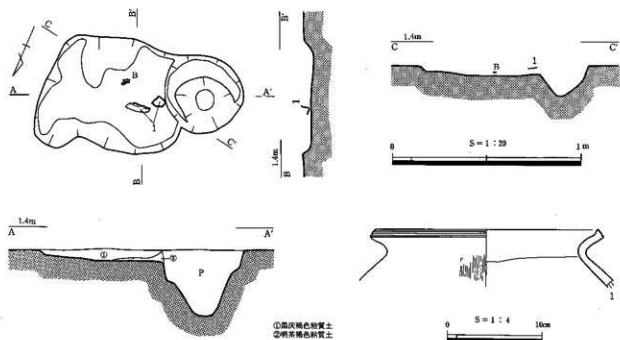
(1)は、口縁端部を上方に突き上げた繰り上げ口縁で、内傾する口縁端面に凹縁は巡らず、ヨコナデが施されている。胴部は最大径が中位より上方にある倒卵形を呈し、底部は径6.4cmの平底である。口縁部及び胴部中位には煤が付着し、胴部内面から底部にも有機質分の付着がみられる。調整は、胴部外面が縦方向のハケ調整後胴部にのみ疎らなミガキ調整、内面は縦方向のケズリ調整が最大径付近まで施され、それより上位は斜位のハケ調整である。

SK197 (第20図)

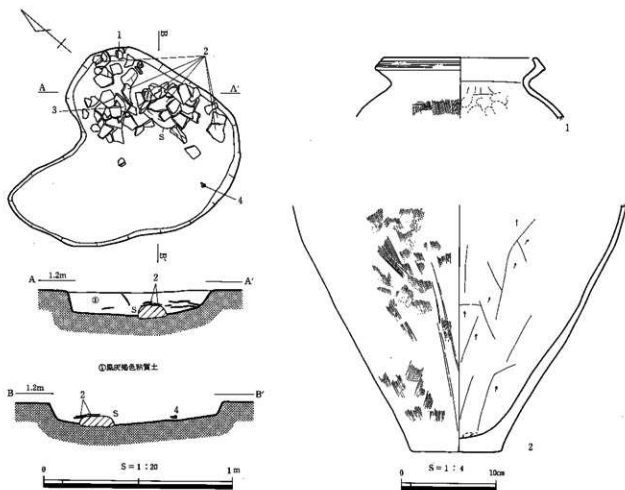
国道2区B18グリッドNE区からB19グリッドNW区にかけて位置する。長径62cm、短径33cmを測る土坑である。検出面は北側と西側が突出した不整な楕円形状であり、底面も不整な楕円形状を呈する。北西側に不整形なテラス状の段がある。底面中央部が直径約18cmの円形状にわずかに窪み、断面形は概ね浅い逆台形状を呈し、中央部分がさらに逆台形状にくぼむ。検出面からの深さは、30cmを測り、中央部はさらに10cm深くなる。埋土は2層に分層できたが、暗灰茶褐色粘質土を基本とする。①層中には炭化物が混じる。埋土中より甕(1)と土玉(2)1点が出上している。(1)は甕と思われる口縁部片で、口縁端部を上下に肥厚させ、口縁端面を作り出す繰り上げ口縁である。3条の凹縁が巡る。

SK198 (第21図)

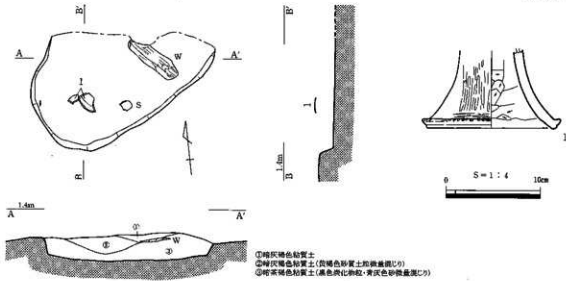
国道2区C18グリッドSE区に位置する。長径92cm、短径28cmを測り、検出面、底面ともに不整な長楕円形を呈す土坑である。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは10cmを測る。埋土は1層で暗灰色粘質土である。埋土中より高環か器台と思われる胴部片(1)が出土している。底部端部を上下に肥厚させて端面を作り出し、2条の凹縁を巡らせている。体部外面は縦方向のハケ調整、内面はナデ調整である。外面に赤色染している。



第15図 SK192及び出土遺物



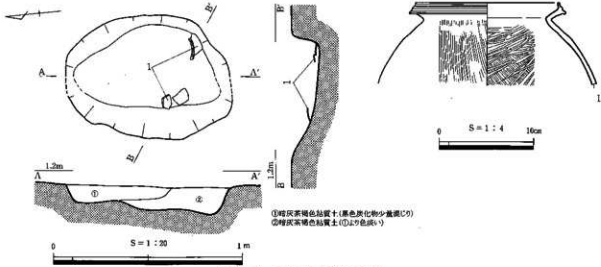
第16図 SK193及び出土遺物



①暗灰褐色粘質土
 ②暗灰褐色粘質土(黄褐色砂質土の混雜層に於)
 ③暗灰褐色粘質土(黒色炭化物に染染・黄褐色砂質土に混雜層に於)

S = 1 : 20
 0 1m

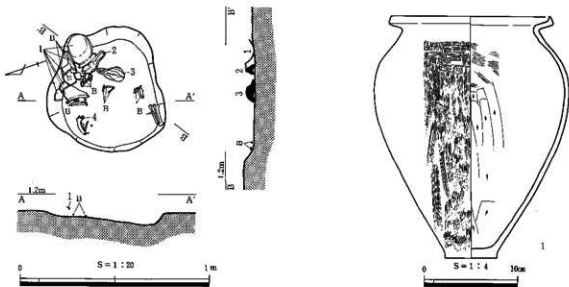
第17図 SK 194及び出土遺物



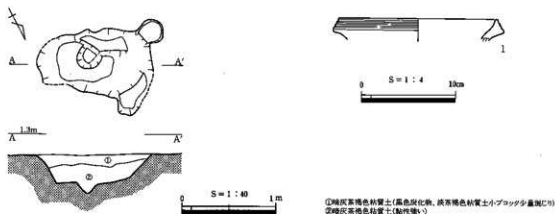
①暗灰赤褐色粘質土(黒色炭化物と少量混じり)
 ②暗灰赤褐色粘質土(①より色浅い)

S = 1 : 20
 0 1m

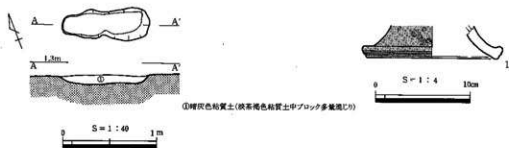
第18図 SK 196及び出土遺物



第19図 SK 196及び出土遺物



第20図 SK197及び出土遺物



第21図 SK198及び出土遺物



第22図 SK199及び出土遺物

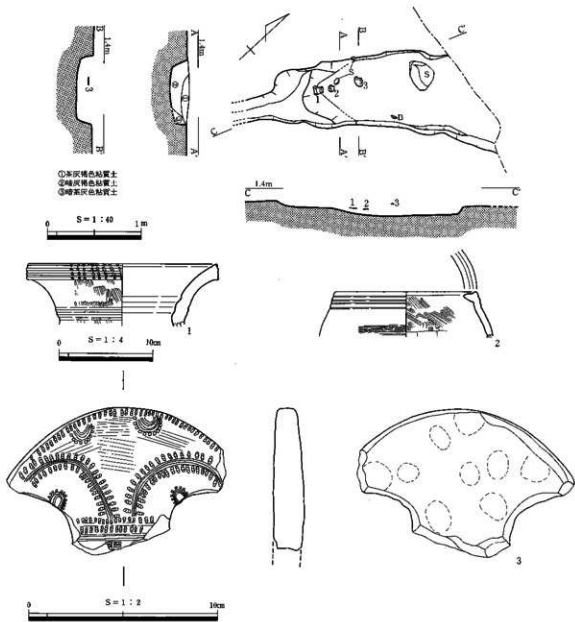
SK199 (第22図)

国道2区B18グリッドNE区に位置する。長径66cm、短径36cmを測り、検出面、底面ともに不整な楕円形状を呈する土坑である。断面形は逆台形状に近く、底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは13cmを測る。埋土は1層で暗灰茶褐色粘質土である。南東側の埋土上層からは、長さ24cmの角材が検出されており、中央やや北東側の埋土上層より獲の口縁部片(1)が出土している。端面が内傾する縞り上げ口縁で、3条の凹線が巡る。

SK200 (第23図・図版4)

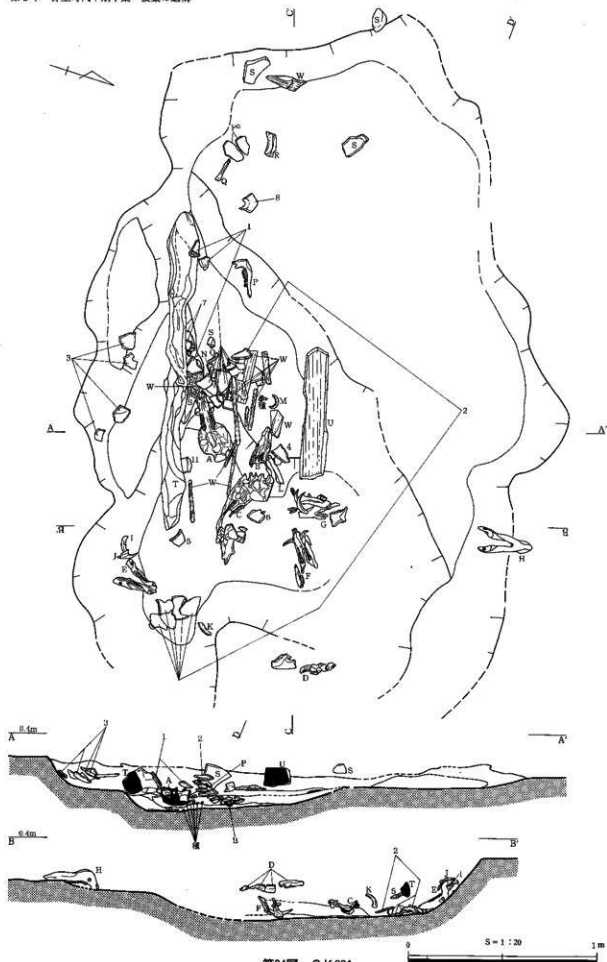
国道2区C18グリッドSW区に位置する。北東側は調査に伴う排水溝によって切れ、南西側はSK264によって切られる。長軸残存2.50m、短軸71cmを測る土坑である。南西部分は幅23cmにすぎず、全体的に溝状である。断面形は逆台形状を呈すが、南西寄りの部分で段差がつき、南へ向けて浅くなる。検出面からの深さは20cmを測る。埋土は3層に分層されるが、灰褐色を基本とする粘質土であり、SK264との切り合いは明瞭である。北西地点からは底面から浮いた状態で長さ16cm、幅12cm程度の角礫が検出され、中央部の埋土中程より壺の口頸部(1)と無頸壺の口縁部(2)及び破損した分銅形土製品(3)1点が出土している。

(1)は、器壁が厚く、大型の器形となるであろう壺で、外反する口縁端部を上下に若干肥厚させ、口縁端面



第23図 SK 200及び出土遺物

を拡張している。そのため、口縁端面にはほぼ直立するが、上位で僅かに内傾する形状となる。3条の凹線が回り、その上からヘラ状工具による刻みが施されている。頸部外面には、口縁部直下よりミガキ調整が施され、その上に3条の凹線が巡る。内面は口縁部以下ナデ調整である。(2)は、内傾する体部の端部内側に粘土紐を貼り付け、上面に1条の凹線を巡らす無頸壺である。口縁部下に3条の凹線が回り、胴部外面に横方向のハケ調整が施されている。内面は口縁部下斜位のハケ調整で、胴部最大径付近からケズリ調整となる。(3)は、約2分の1を欠く銅形土製品である。約4分の1ほどの円弧から急激にすぼまるくびれ部を呈し、成形時の指押さえが観察される。ハケ調整の上から施文され、文様は櫛状工具による沈線文と刺突文によって構成されている。沈線文は3条を1単位としており、くびれ部に平行に引く以外は、弧状に施している。刺突文は1個の場合もあるが、連続する3個を基本としており、側縁部や沈線文に即して施され、くびれ部以外は円弧状の配列となる。結果的に人面のような意匠となっている。施文は片面のみで、裏面や側面にはなく、穿孔もみられない。赤彩も観察されない。



第24図 SK201

SK201 (第24、25図・図版6、7)

国道3区B27グリッドSE区からB28グリッドSW区にかけて位置する。調査区の南東隅にあたり、下層のSD27南東部の岸辺部分を掘り窪めている。排水溝で切られているため全貌は把握できないが、さらに東側に続くものと思われる。外形ラインが蛇行しており、極めて不整な楕円形状を呈する。西側には長径2.55m、短径1.25mの範囲で、半円形に近い形状のテラス部分があり、南側にも半月形状の小テラスが2ヶ所設けられている。これらのテラスの間隙にも1段低い三角形のテラスがあり、東側から突出するテラスとの間が深くなって、いびつな三角形の底面をなしている。断面形は2段の皿状で、壁面の立ち上がりは緩やかな弧状を呈する。東西の検出長は3.55m、南北長は2.6mを測り、検出面からの深さは、最深部で34cm、西側のテラス部で11cmを測る。検出面の標高は0.17mから0.29mで南側が高く、底面最深部の標高は-0.05mである。埋土は6層に分層されるが、東側の深い部分が埋没後、③層の暗灰色粘質土層が全体を覆うように堆積し、下層の深み部分のため生じた③層上面の窪み部分に①、②層が堆積するという状況である。④、⑥層は混泥土層で、③、⑤層にも少量貝殻が混じる。本土坑内に貝塚が形成されたというよりも、本土坑のベース層である混泥土が周囲から流入したものである。

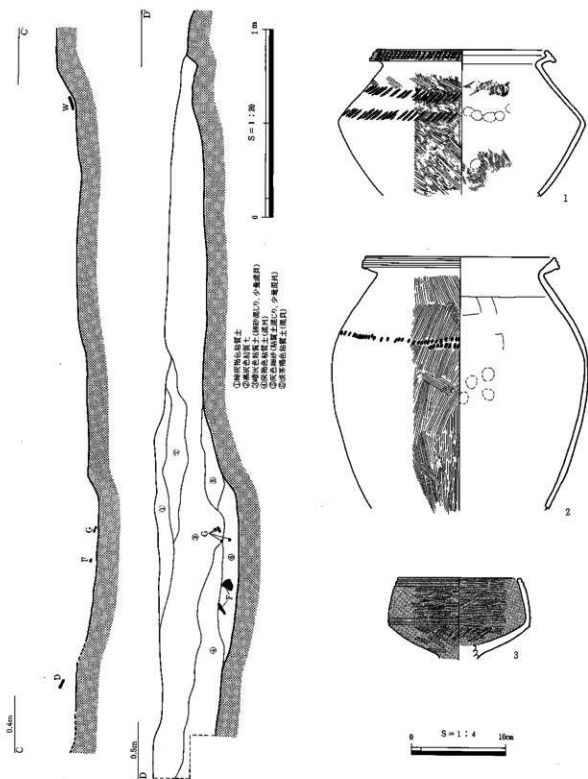
検出された遺物は、加工木及び自然木、礫、土器、獣骨、そして種子の5種に大別される。遺物の出土は、平行する自然木(T)と加工木(U)の間隙約60cmに集中し、さらに西側のテラス部分にも一部拡散するという概況であるが、遺物の種類によって特徴的な出土傾向を示す。自然木(T)は、長さ1.69m、径11cm程度を測り、土坑の長軸に平行して検出された。加工木(U)は、長さ70cm、幅13cm、厚さ9cmを測る角材で、両側面に浅い抉りを入れている。西側端は尖形をなす。加工木材片は概ね両者の間に集中し、長軸を東西方向に向けた状態で出土している。出土レベルは、いずれも底面より浮いている。(1)は有孔柱状の建築部材で、本土坑出土加工木中唯一器種が判明するものであり、自然木(T)の下位で検出された。

礫は、板石状の角礫3点が西側のテラス部分で検出され、いずれも混入の様相を呈する。自然木(T)の下位で検出されたものは破断面をもつ楕円形の礫で、他の礫とやや趣を異にする。

出土土器のうち、出土位置を捕捉できた個体は8点であるが、概ね3ヶ所に集約される。①赤色塗彩された高坏(3)が出土した自然木(T)の南側小テラス上、②壺(1)、甕(2)の破片、甕(7)が出土した(T)と(U)の間、③甕(2)が出土した東側部分である。出土レベルは、底面直上、またはやや浮いた位置にある。(1)は南西側にも拡散し、自然木(T)に寄り掛かるような位置で検出されており、また(2)は、破片が(1)の方まで散乱している。甕(4)~(6)、(8)も断片的な出土状況であり、完形になる個体がないことなどから、土器はプライマリーな状態で出土していないといえる。このほかに高坏(9)、土玉(10)などが埋土中から出土している。

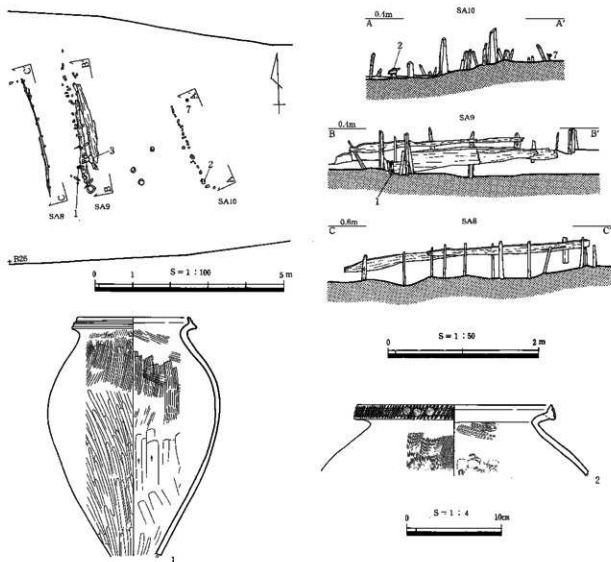
獣骨の出土は、土坑中央の深み部分に概ね集中しているが、西側のテラス部分や土坑の北側肩部分にも、一部拡散している。獣骨(A)~(D)は、イノシシの頭骨、(E)~(H)はイノシシの下顎骨で、うち(E)と(H)は下顎枝の咬筋窩付近が穿孔されている。(F)、(G)については、破損のため穿孔を確認できない。(I)、(K)、(M)は猪牙、(P)はシカの下顎骨で、(R)はシカの肩甲骨である。イノシシの頭骨は、西から東へ順に(A)→(D)と並び、(A)~(C)については頭頂部を下に向けている。下顎骨は南から北へ向けて順に(E)→(H)と並び、(H)のみ下顎枝を下に向け、土坑外にはみ出している。出土レベルがいずれも底面直上であり、意図的な配置がなされたものと看取される。獣骨についての詳細な分析については、次年度の報告書に委ねることとし、本土坑の性格について言及するのはこれを待ちたいが、出土骨種が限定され、四肢骨や肋骨がほとんど欠落することや、獣骨以外の遺物の出土状況にも作為的なものが窺われることから、単なる廃棄土坑とは認定し難い。なお、イノシシの頭骨(A)の西側、壺(1)の破片が集中する部分の南側にあたる底面上で、鏡の種類の種子20点が集中的に検出されたことは、極めて示唆的である。

(1)は、算盤玉形の割部を呈する甕で、脚台を伴う可能性もある。口縁部は端部を上下に拡張して繰り上げ口縁とし、端面に3条の凹線を巡らせる。凹線上をへら状工具によって連続的に刻み付け、押圧がやや弱いため



第25図 SK201土層図及び出土遺物

か、刻みが凹線部で途切れている。胴部外面はハケ調整をベースとし、下半部にミガキ調整を加えている。上半部にはヘラ状工具による2段の連続刺突が走り、この上位にやや粗く規則的な斜位のハケ調整痕が連続するが、文様か否か判断できない。胴部内面は頸部までハケ調整で、肩部付近に指頭圧痕が連続する。(2)は、口縁端部を三角形に肥厚させる甕で、端面に2条の凹線が走る。胴部外面はハケ調整で、肩部付近に棒状工具による連続刺突文が1周以上走る。胴部内面は肩部付近までケズリ調整され、その後ナデ調整されているが、あまり丁



第26図 SA8～10及び出土遺物

察ではなく、ケズリの単位が確認できるほどである。(3)は、高坏の坏部で、内外面ともに赤色塗彩されている。内傾気味に立ち上がる口縁部を有し、比較的深い坏部を呈する。内外面ともにハゲ調整をベースとし、その後ミガキ調整を加えている。外面には2条の凹線が2段巡っている。

第2節 溝、杭列

SA8～10 (第26図、図版11)

3区B26グリッドに位置する杭列である。ほぼ南北方向に3条の杭列が平行して直線的に延びる。以下、西側から順にSA8、9、10と呼称する。SA8～10はSD27の上層を直交方向に延びるかたちとなる。SA8の1m東にSA9、SA9の2.3m東にSA10が位置する。

SA8は長さ3.3m、SA9は長さ3.9m、SA10は長さ2.5mを測る。SA8、9の検出面の標高は北側で約0m、南側で-0.15m前後、杭の頂点の標高は0.3～0.4m、SA10の検出面の標高は北側で-0.17m、南側で-0.4m、杭の頂点の標高は最も高いところで0.28mである。SA8、9には横板が伴い、横板は杭の頂点より10～20cm低位に設置されている。横板の規模は幅10cm前後、長さ1m弱であり、杭、横板とも転用材が用いられている。SA10は杭列のみが検出されたが、本来横板が伴っていた可能性がある。

SA8～10は砂層と細砂混じり粘質土の互層状堆積の中から検出され、SD27の埋没途中または埋没後に構築されたものと考えられる。杭列周囲の埋土は同一で、土層断面からはこれらの杭列に溝が伴った形跡は確認できなかった。

SA9からは、東側の杭列の杭根元付近より甕(1)が出土している。口縁端部は上下にややつまみ出し、端面に凹線を巡らせる。外面は頸部から肩部にハケメ、胴部から底部にかけてヘラミガキが見られる。内面は胴部のほぼ中央より上半はハケメ、下半はヘラケズリ調整が施される。

SA10の遺物としては、杭列南端の杭の根元よりやや浮いた地点で、壺口縁(2)を検出している。肥厚した口縁端部は上にややつまみ出される。口縁端面は2条の凹線を巡らせたのち、ヘラ状工具で刻目を付け、円形浮文を3つ並べて配し装飾している。肩部外面は横方向のタタキ調整後にハケメを施しており、肩部内面にはハケメと指頭圧痕がみられる。

SD27、SA11(第27～31図、図版8～11)

3区を南西から北東にかけて縦断する溝状遺構である。溝の北岸約16m、南岸19mを検出した。検出幅は5.3mで、検出面からの深さは南西側の最深部で36cm、北東側の最深部で89cmを測る。検出面の標高は北岸、南岸ともほぼ0m前後、底面の標高は南西側で-0.35m前後、北東側で-0.8m前後であり、南西から北東に向かう流れが想定される。

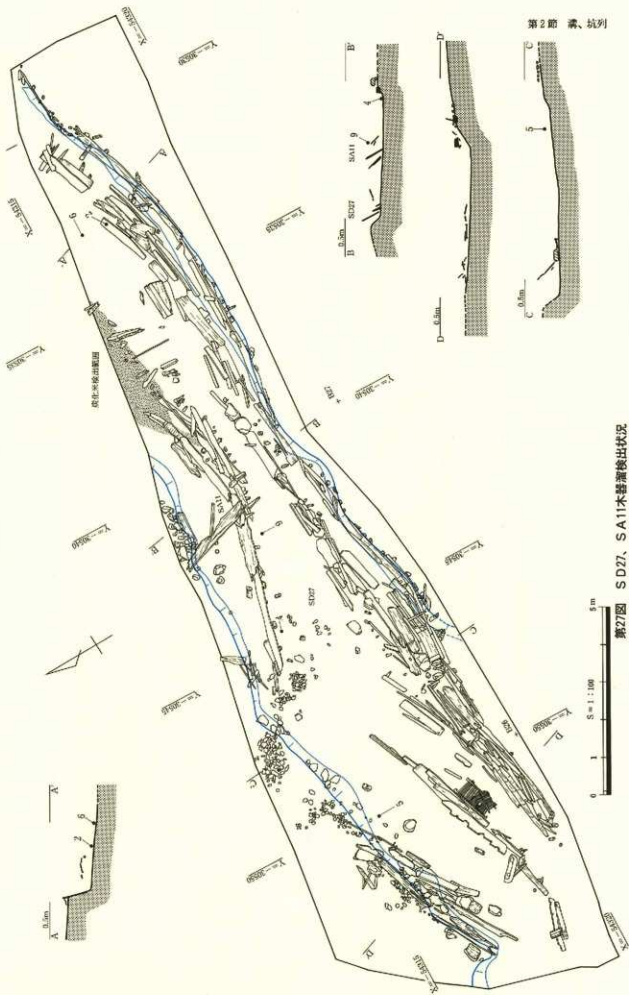
南岸の護岸施設は、板材を部分的に重ね合わせながら壁面に垂直に沿わせ、背後より板を杭で支える構造である。杭には5～8cm角の太めのスギ製角材が用いられており、内側からの圧力に板が耐えられるよう、板幅の倍近くの長さの杭が地面に垂直に打ち込まれる。壁面に沿わせる板には、長さ2～3.5m、幅20～60cm前後、厚さ1～2cm前後のスギ製板材が用いられている。比較的大型の板材が使われている東側では、杭の本数は板1枚に対し4、5本と少ないが、やや小振りの板材が使用される西側では杭が密に打たれている。護岸施設は、B26グリッドSW区で、南岸にはほぼ直交する長さ1mほどの杭列までを検出している。

北岸の護岸には小振りの自然礫が用いられる。礫の集中する部分は岸辺に3ヶ所認められ、溝の壁面よりも肩の上に顕著に遺存する。

B27グリッドでは、南岸と北岸の間、南岸の内側2mに、両岸のラインとほぼ平行して延びる1条の杭列SA11が位置し、杭列はB26、27グリッドの境界付近から西北へ向かって弓なりにカーブを描いて続き、北岸の手前で終息する。SA11は長さ約12m、杭検出面の標高は-0.5～-0.7m、杭の頂点の標高は0.2m前後である。杭列には長さ2m前後、幅25cm前後、厚さ1～2cm程度の横板が付随する。横板は杭の頂点より10～20cm程低位に設置され、板と板とは1m前後の重複部分をとりつつ横一列に繋げられる。横板、杭とも転用材が用いられているが、杭は角材のほか、先端にくびれのみられる加工木、焼けた痕跡の残る建築廃材、自然木なども利用されている。SA11の西北端では、杭列の途切れた部分を補うかのように、SA11の延長線上に礫が帯状に北岸の肩土まで敷き詰められている。なお、溝の内部には50cm前後の大きさの自然礫が点在しているが、これらが護岸より転落したものか、別の用途で溝内に入れられたものかは不明である。

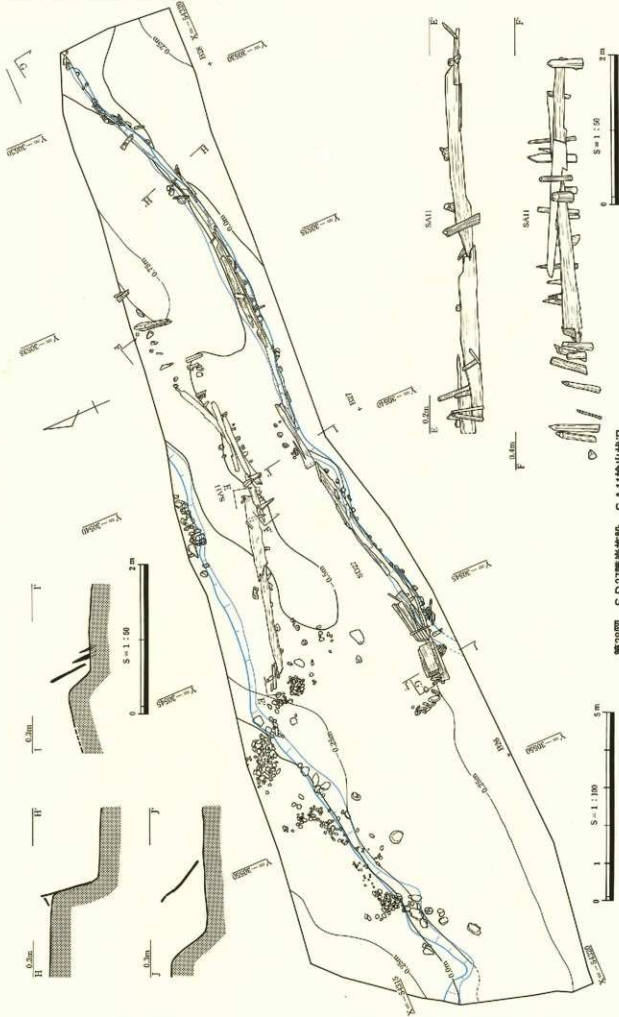
溝の埋土は、木器溜りを包含する濃茶色植物遺体混じり粘質土と暗灰色系の砂の互層状堆積からなる。各護岸施設の時期差、対応関係は上層断面の観察からは明らかに出来なかった。SA11の中央付近から北東側にかけては、大量の炭化米が16cmほどの厚みをもって堆積しており、炭化米に混じて籾物の小片も検出されている。

溝の埋土中からは大量の木器および流木を検出している。木器は溝全体に広がっているが、とりわけ両岸沿いには大型の建築部材、板材などが重なりあって濃密な木器溜りを形成している。建築部材に混じて木製高環、槽、アカトリ、田舟、鳥形木製品、縄巻などの多彩な木製品・植物質製品も出土した。遺構に伴う土器には壺、長頸壺、無頸壺、台付壺、甕、台付甕、高環、鉢、器台、水筭形土器などが挙げられる。壺(1)は口縁端部を断面三角形に肥厚させ、上方につまみ出し、端面に4条の凹線を巡らせる。頸部には5条の凹線、肩部には5条の沈線を巡らせ、肩部から胴部にかけてを3段の波状文で装飾している。内面頸部以下には指頭圧痕が顕著に見られる。(2)はSD27の東南側の木器溜り底面付近から出土した長頸壺である。やや開き気味に直立する口

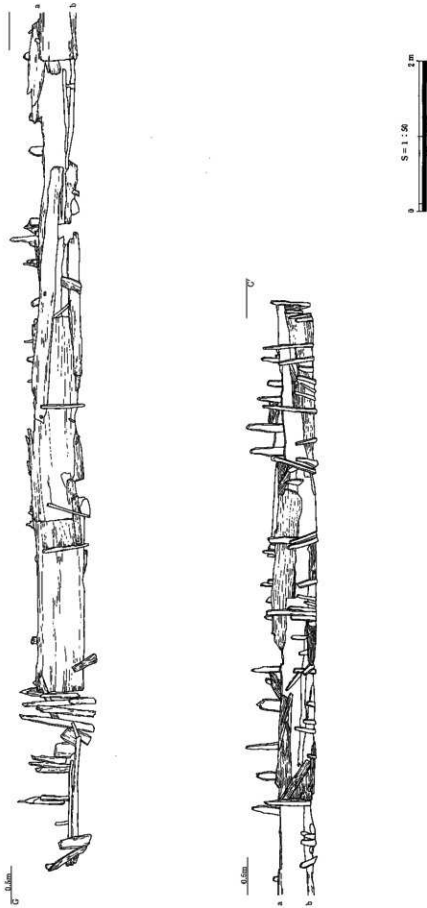


第2節 溝、坑列

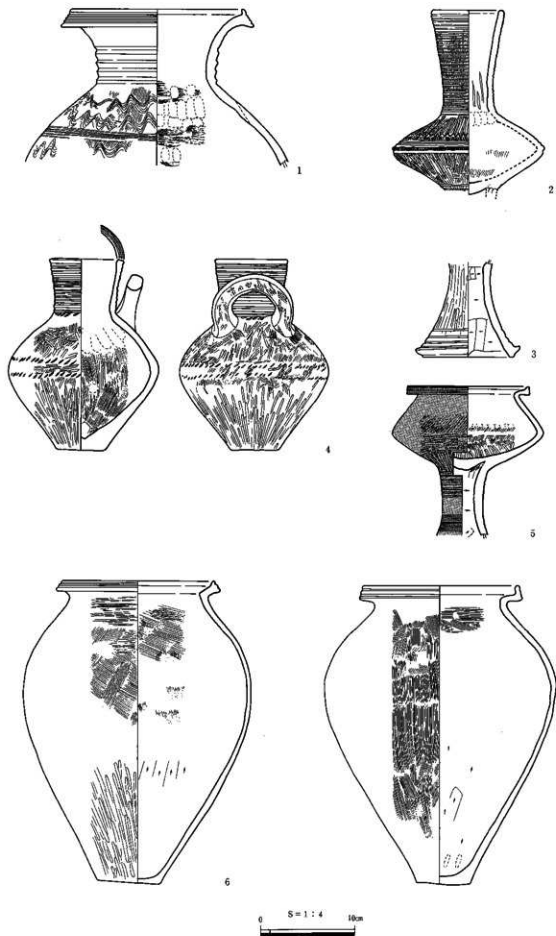
第27圖 S D27、SA11木器遺物出土状況



第28図 SD27臨岸施設、SA11検出状況

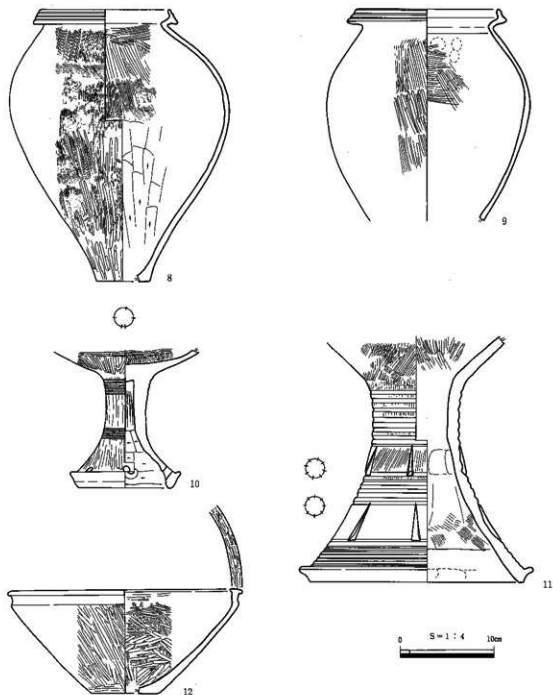


第29圖 S D27溝岸施設立面圖



第30図 S D27出土遺物 (1)

頸部には、ハケメ調整ののち31条の凹線を巡らせる。体部は算盤玉状の形態で、体部中央より上 $1/2$ を、細かい連続山形文、4条の凹線文、小さな半裁竹管状の工具による連続刺突文などで装飾する。体部は全体にヘラミガキが施されるが、下半にわずかにタタキ調整の痕跡が残る。口頸部内面下半には絞りと指頭圧痕がみられる。脚台がつくものと思われ、(3)のようなものが想定される。(3)は「ハ」の字状に開き、外面脚裾部に4条の凹線を施す。脚端部は内傾して面をなし、わずかに上方へつまみ出される。外面はヘラミガキ、内面はヘラズリ調整である。(4)は坑列の西側、溝の底面付近から検出された水差形土器である。やや開き気味に直立する口頸部及び口縁端部には凹線が走り、頸部から肩部への変換点及び体部中央付近にはヘラ状工具による連続刺突文が施される。把手は、頸部裾から肩部にかけて片側につけられる。外面はハケメ調整後ヘラミガキが施され、



第31図 SD27出土遺物(2)

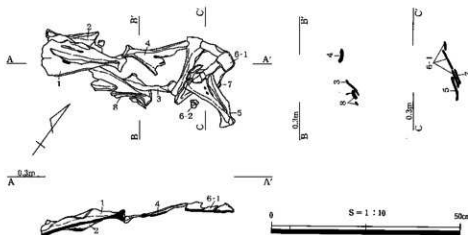
内面は肩部以下にハケメ、肩部と胴部の一部に指押さえが見られる。底部は平底である。(5)は溝の西側の埋土中より出土した台付壺である。ほぼ直立する短い複合口縁に算盤玉状の体部、凹線文で装飾された脚柱部がつき、外面は赤彩が施されている。口縁外面は2条の凹線が走り、体部上半はハケメ後ナデ、体部下半は横方向、体部裾は縦方向のヘラミガキがみられる。内面は体部中央よりやや上に指頭圧痕が見られ、底はハケメを施したのちヘラミガキで仕上げている。(6)、(7)、(8)、(9)は複合口縁の壺である。口縁形態は微妙に異なるものの、端面には2～3条の凹線が施され、外面は上部にハケメ、下部にヘラミガキ、内面は胴部中央以下にヘラケズリ、体部上半はハケメがみられる。また内面肩部から胴部に一部指頭圧痕が残るものもある。(10)は脚台である。脚は「ハ」の字状に広がり、脚端部は断面逆三角形に肥厚し上方につまみだされる。脚柱部には5～6条の凹線文帯が2段にわたって巡らされ、脚裾には円形の透し孔が5方向に開けられている。(11)は器台の脚部である。「ハ」の字状に広がる脚の端部は上方に拡張される。脚柱部から脚裾部にかけて5～6条の凹線文帯が3段走り、凹線文の間の空間には未貫通の三角形の透し孔が8方向に切られる。脚部内面は主にナデ調整がなされており、上向きに広がる体部下半の内面はヘラミガキが施されている。(12)は鉢である。口縁端部は水平方向にやや拡張され、端面には指頭圧痕後ヘラミガキ調整がみられる。底面は平底を呈する。内外面ともハケメを施したのちヘラミガキ調整を行なっている。

第3節 ト骨集積遺構

ト骨集積遺構1 (第32図・図版12)

国道3区B25グリッドNE区、調査区の北西隅に位置する。SD27北西部の岸辺下層にあたる。木製用材による護岸施設が付設されないSD27の北西河岸が、堆積埋没していく過程で形成された遺構である。植物腐植土混じりで混泥土である濃茶色粘質土の堆積層中で検出された。周辺を精査したが、土坑は確認されなかった。ト骨接地面の標高は、0.15～0.21mである。東西55cm、南北23cmの幅で検出され、長軸方向は北東-南西を指す。接地面は平坦ではなく、北東から南西に向けて、また北西から南東へ向けて傾斜し、それぞれ両端で6cmと4cmの比高差がある。遺構は、8点の肩甲骨によって構成され、その組成はイノシシ7点(1)～(7)、シカ1点(8)である。うち(7)は幼獣である。左右の構成は、(1)、(3)、(5)、(7)が右、他はすべて左である。完形に近い状態で遺存するのは(1)のみで、他は欠損部を有する。

(1)はイノシシの右肩甲骨で、肋骨面を下向きにしている。後縁と背縁の一部が欠損する。肩甲棘を一部削平しており、棘上窩と棘下窩にそれぞれ焼灼痕が認められる。(2)はイノシシの左肩甲骨で、肋骨面を上向きにしている。前縁から背縁にかけて、後縁から背縁にかけての部分、及び関節上結節を欠損する。肩甲棘を一部



第32図 ト骨集積遺跡1

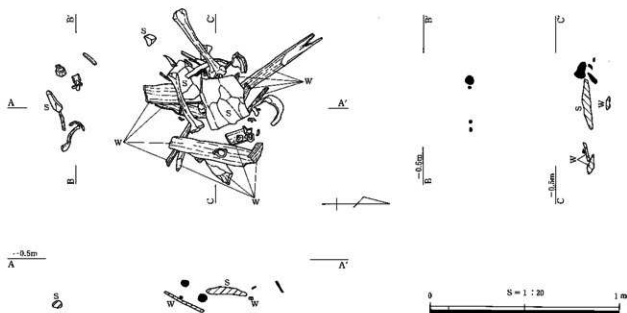
削平しており、棘下窩に焼灼痕が認められる。(3)はイノシシの右肩甲骨で、肋骨面を下向きにしている。背縁部から棘上窩、棘下窩にかけてを欠損する。焼灼痕はみられないが、肩甲棘を削平しており、欠損部に本来焼灼痕があったかもしれない。(4)はイノシシの左肩甲骨で、肋骨面を上向きにしている。前縁から背縁にかけてと一部肩甲棘を欠損する。肩甲棘は削平しておらず、棘下窩に焼灼痕が認められる。(5)はイノシシの右肩甲骨で、肋骨面を下向きにしている。背縁部から棘上窩にかけてを欠損する。肩甲棘を一部削平しており、棘下窩に焼灼痕が認められる。(6-1)はイノシシの左肩甲骨で、肋骨面を上向きにしている。関節上結節を欠くが、(6-2)と接合した。背縁部を一部欠損する。肩甲棘は削平しておらず、棘上窩部分の肋骨面側に焼灼痕が認められる。(7)はイノシシ幼獣の右肩甲骨で、肋骨面を下向きにしている。背縁側3分の2部分を大きく欠損する。焼灼痕は認められないが、肩甲棘の削平が確認できる。(8)はシカの左肩甲骨で、肋骨面を下向きにしている。背縁部を欠損する。肩甲棘を削平し、棘上窩、棘下窩に焼灼痕が認められる。

これらト骨は、イノシシの左右の肩甲骨を、関節上結節を逆向きにして肋骨面同士を合わせたものを1単位とし、これを3組東西方向に列状に配置している。ト骨の配置の規則性については、解剖学的検討の結果を待って、さらに詳細に検討するものとするが、従前の出土例のように廃棄されたものとは言い難い状況である。また土坑が確認されず、埋納されたものではないと判断される。人為的な配列と判断され、ト骨集積遺構とした。

第4節 漂着人骨

漂着人骨1 (第33図・図版12)

国道調査区3区B26SE区からNE区にかけての調査区ほぼ中央部に位置し、SD27の北西岸の下層にあたる。SD27埋土の最下層である灰色砂層より下層の、混貝土である茶灰色植物腐食上混じり粘質土中(3区土層図のV-4層)から検出された。周辺の精査を一応試みたが土坑は確認されず、出土層が湖沼堆積層とみられることから、埋葬遺構ではなく、湖沼内で漂着した遺体と判断される。人骨は標高-0.6~-0.8m、20cmの高低差の間で検出され、その範囲は南北1.17m、東西81cmを測る。特に北側に人骨は片寄り、南北60cm、東西81cmの範囲に集中する。そこから南に37cm離れた地点で、南北20cm、東西52cmの範囲で6点の骨の散乱がみられる。南側の人骨では、検出レベルがほぼ揃うものの、北側ではばらつきをみせる。検出範囲の長軸方向は、ほぼ南北軸に



第33図 漂着人骨1 検出状況

平行する。

遺構は、人骨が加工木や礫と攪拌されたかのような状態にある。北側の人骨群は、最下に上腕骨と肋骨の集積があり、その上に加工板材や平石2点が乗りかかる。平石の下部には、加工角材が北西方向から斜めに突き刺さった状態にある。平石や加工板材の上には、大腿骨2本や椎骨が乗った状態にあり、中央の平石の北側からは、頭骨が出土している。南側の人骨群は、肋骨や椎骨である。これらの人骨は熟年男性のものである。骨の解剖学的な位置関係に極端な矛盾はないものの、攪乱や欠落部位が生じており、人骨が漂着したものであるとする所見と齟齬をきたさない。伴に検出された板材や平石が意図的に置かれたものとは認め難く、湖沼中で漂着した遺体と混ざり合ったものと推察される。なお、人骨の解剖学的な検討の結果を待って、さらに詳細に検討するものとする。

第3章 弥生時代後期初頭～後葉の遺構

第1節 土 坑

SK202 (第37図・図版13)

国道2区C21グリッドSE区に位置する。南側は柱穴状のピットを切る。長径74cm、短径37cmを測る土坑である。検出面、底面ともに、北側が内側にやや湾曲する不整な楕円形状を呈す。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは24cm測る。埋土は2層に分層できたが、黒灰茶褐色土を主体とする。埋土中程から甕(1)が1点出土している。(1)は、口縁端部が上下に拡張され、端面が内傾し、6条の凹線が走る。内面は、頸部以下に単位の細かいケズリ調整がなされている。

SK203 (第38図)

国道2区C18グリッドNE区に位置する。長軸61cm、短軸55cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整な隅丸方形形状を呈す。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは25cmを測る。底面はほぼ平坦だが、南東側が若干傾斜する。埋土は1層で、炭化物を多量に含む暗灰茶褐色粘質土である。埋土中位で、土坑底面をほぼ覆うほどの加工板材が出土したが、これの上下で埋土は変わらない。板材は斜位で出土し、これの上位に接近して角材、紙石2点(2、3)が検出された。埋土中より甕の破片(1)が出土している。(1)は、口縁端部を三角形に肥厚させ、端面が凹面をなして1条の凹線が走る。本来多条のものが、ナデ消されたものか。内面は頸部以下がケズリ調整されている。

SK204 (第39図)

国道2区B19グリッドNW区に位置する。長径58cm、短径38cmの楕円形状部分に、長軸32cm、短軸28cmの隅丸方形部分が合体した鉤形をなす土坑である。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは17.5cmを測る。埋土は1層で、暗灰茶褐色粘質土である。埋土中から2個の角板材が立位または斜位で出土しており、それぞれ直交する位置関係にある。いずれも底面より浮いた状態である。また埋土中より甕(1)が出土している。(1)は、口縁端部を三角形に肥厚させ、口縁端面は内傾し、3条の凹線が走る。

SK205 (第40図・図版13)

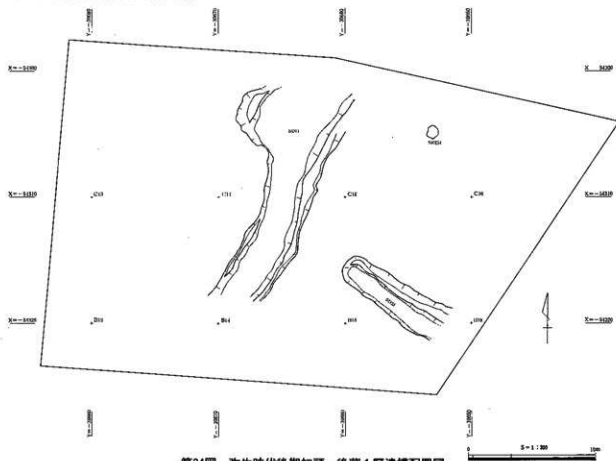
国道2区B17グリッドSE区に位置する。長径1.34m、短径89cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整な楕円形状を呈し、北東側底面が不整な楕円形状に落ち込む。断面形は不整な逆台形を呈し、検出面からの深さは21cmを測り、北東側底面はさらに7cm深まる。埋土は4層に分層できたが、黒灰色系の粘質土を基本とする。中央部底面直上から土器片が出土しているが、図化できたのは埋土中位から出土したものである。北西側からは2個体の小型の甕(1、2)が、南東側からは胴部から底部にかけての土器片(3)が出土している。このほか、土玉も1点(4)出土している。

(1)は、口縁部がやや外傾し、ヨコナデ調整のみで無施文である。端面上端部は丸く収め、下端部は下垂しない。胴部は最大径が中位より若干上であり、底部は僅かに上げ底の平底である。外面は、頸部が横方向の、胴部が斜位のミガキ調整で、口縁部内面はケズリ後ナデている。胴部内面はケズリ調整であるが、頸部付近でミガキ調整が加えられている。(2)は、胴部最大径がほぼ中位にあり、球形の胴部を呈する。口縁部は僅かに外傾し、ヨコナデ調整のみで凹線等走らない。端面上端部は丸く収め、下端部を下垂させる。底部は平底である。胴部外面は上半が横方向の、下半が斜位のミガキ調整で、内面は頸部以下ケズリ調整である。

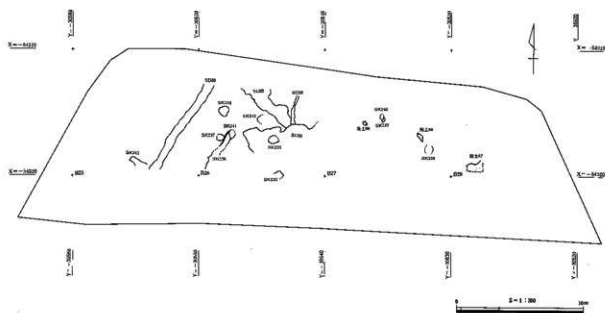
SK206 (第41図)

国道2区B18グリッドSW区からB18グリッドNW区にかけて位置する。北西側ではSK207を切っている。長径1.12m、短径86cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整な楕円形状を呈す。南西側の底面には、長径45cm、短径26cm、深さ12cmの浅い落ち込みがある。断面形は逆台形状で、南西側の落ち込みは弧状を描く。

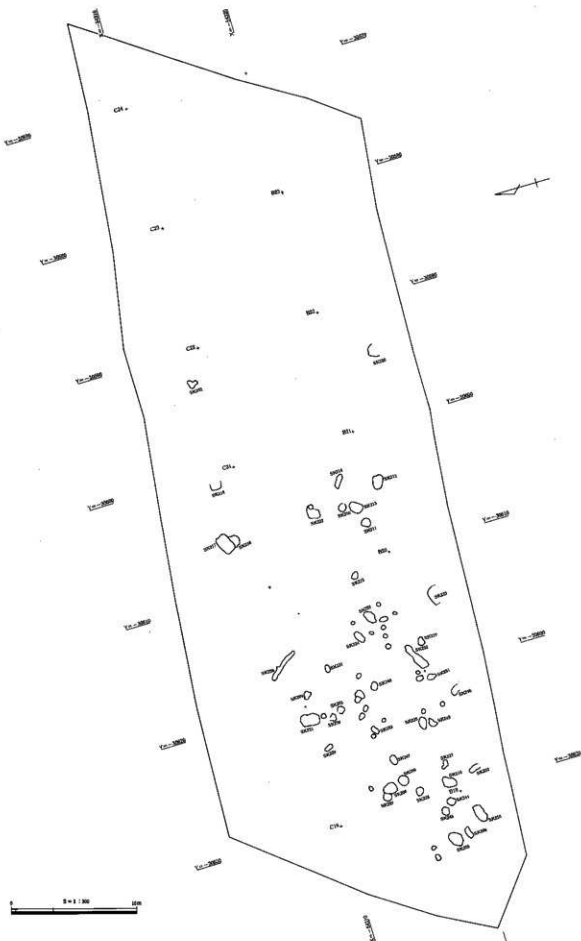
第3章 弥生時代後期初頭～後葉の遺構



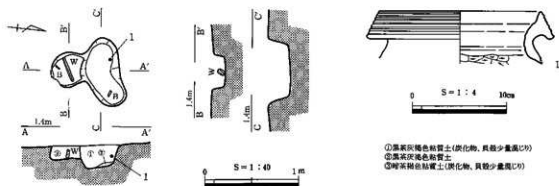
第34図 弥生時代後期初頭～後葉1区遺構配置図



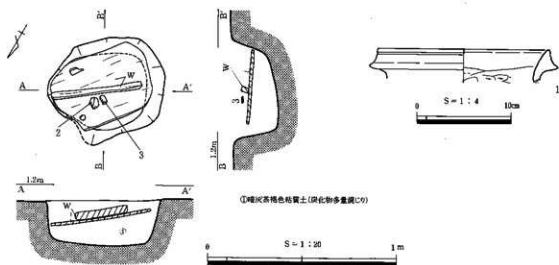
第35図 弥生時代後期初頭～後葉3区遺構配置図



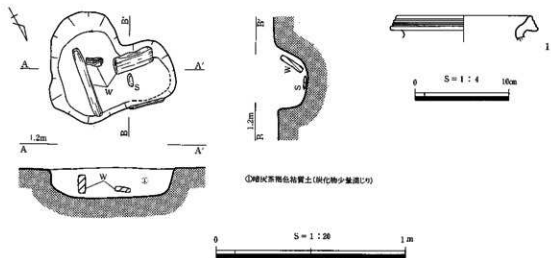
第36図 弥生時代後期初頭～後葉2区遺構配置図



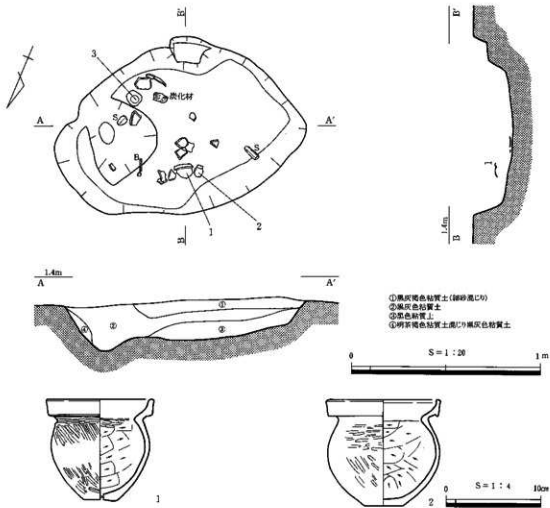
第37図 SK 202及び出土遺物



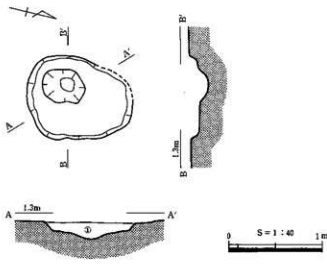
第38図 SK 203及び出土遺物



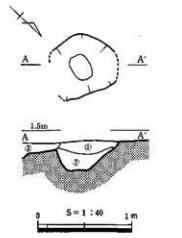
第39図 SK 204及び出土遺物



第40図 SK 205及び出土遺物



第41図 SK 206及び出土遺物



第42図 SK 207

検出面からの深さは10cmで、南西側でさらに12cm深まる。埋土は1層で、暗灰褐色粘質土である。埋土中より壺か甕と思われる口縁部片(1)が出土している。(1)は、直立気味の口縁部で、4条の擬凹線が巡る。端面上端は欠損しており、下端は下垂しない。頸部内面はケズリ調整である。

SK207 (第42図)

国道2区B18グリッドNW区からSW区にかけて位置する。東側はSK206に、北西側はピットによって切られており、検出面が長径推定72cm、短径64cmを測る不整な円形状の土坑である。底面は不整な楕円形状を呈し、長径26cm、短径19cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形を呈する。検出面からの深さは32cmを測る。埋土は暗茶灰褐色粘質土を基本とし、混入物の微妙な差異で2層に細分される。遺物は出土しなかった。

SK208 (第43図・図版13)

国道2区B17グリッドSE区に位置する。長軸81cm、短軸38cmを測る土坑である。検出面では隅丸長方形を呈し、底面は南内側の段のため鈎形状をなす。東西の断面の立ち上がりは東側で緩やかで、西側では段をなす。南北の断面形は逆台形状を呈する。検出面から底面までの深さは13cmで、西側の段までは5cmを測る。埋土は1層で、黒灰褐色粘質土である。南西隅の段の底面直上からは壺の口縁部(1)が、また北側中央部の底面直上より器台の受部(2)が出土している。

(1)は、直立気味の口縁で、5条の擬凹線が巡る。端面上端は丸く収め、下端をやや下垂させる。胴部外面には、縦方向のハケ調整後、横方向の疎らなミガキ調整が施されている。内面は、口縁部に横方向の細かいミガキ調整が施され、頸部以下はケズリ調整である。(2)は、外反する口縁部からさらにすままる筒部を呈し、口縁端面に多条の平行沈線が巡る。外面ミガキ調整で、筒部に2条の沈線を確認できる。内面全面ケズリ後ミガキ調整で、平滑な器面に整えている。

SK209 (第44図)

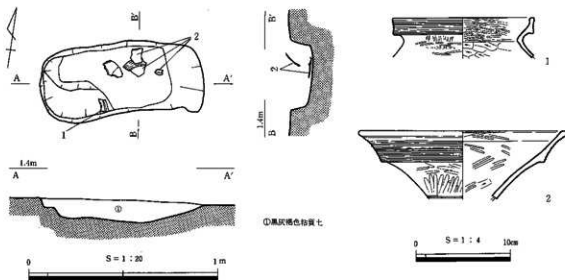
国道2区B18グリッドSW区に位置する。検出面、底面ともに円形状を呈す土坑である。検出面で径80cm程度を測り、底面では径76cm程度である。断面形は皿形状をなし、底面はくぼむ。検出面からの深さは12cmを測る。埋土は1層で、黒色粘質土である。埋土中より、壺の口縁部片(1)と土玉1点(2)が出土している。(1)は、直立する口縁部で、3条の凹線が巡る。端面上端は幅広で、下端は斜め下方に突出気味である。肩部外面にはミガキ調整が、内面には頸部以下にケズリ調整が施されている。

SK210 (第45図)

国道2区B18グリッドSW区に位置する。長軸1.19m、短軸79cmを測る土坑である。楕円形に半円形が合体したような検出面形で、北東側の半円形状部分は段になる。本体部分の底面形は、北側で湾曲する不整な楕円形状を呈する。断面形は皿状を呈し、北東側で検出面から9cmほどの段をなし、さらに8cmほど深まる。埋土は1層で、黒灰褐色粘質土である。南側の底面付近では、壺(1)が内面上向きの状態で出土している。(1)は、やや外反する口縁部で、構構き平行沈線が巡る。器壁の厚い口縁部で、端面上端を丸く収め、下端は斜め下方に僅かに突出する。外面は、肩部に貝殻敷線による押し引き沈線文が施され、胴部に横方向のミガキ調整が疎らに加えられる。内面は、頸部以下ケズリ調整である。

SK211 (第46図)

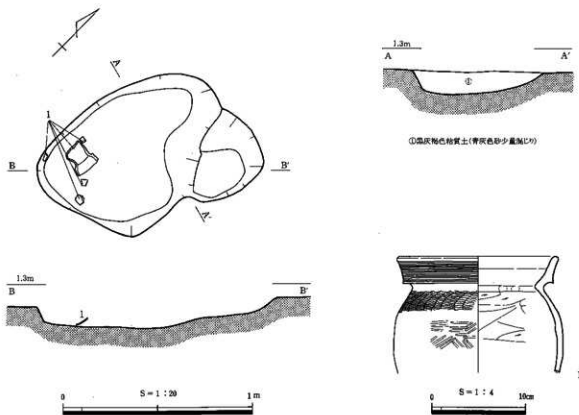
国道2区B20グリッドSW区に位置する。長径80cm、短径68cmを測る土坑である。検出面、底面ともにやや不整な円形状を呈す。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦面をなす。検出面からの深さは12cmを測る。埋土は黒褐色粘質土を基本とし、混入物の差異で2層に細分された。埋土中より壺(1)、土玉(2)のほか、動物の歯牙や植物の種が出土している。(1)は、直立する口縁部で、多条の擬凹線が巡る。端面が弧状に反るため、下端が横方向に突出するように見える。上端は丸く収めている。口縁部内面には、一部にミガキ調整がみられ、頸部内面には、横方向の緻密なミガキ調整が施されている。それ以下はケズリ調整である。



第43図 SK 208及び出土遺物



第44図 SK 209及び出土遺物



第45図 SK 210及び出土遺物

SK212 (第47図)

国道2区A20グリッドNE区に位置する。長軸1.15m、短軸77cmを測る土坑である。検出面形、底面形ともに側がややいびつな隅丸長方形を呈す。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは15cmを測る。埋土は3層に分層でき、最下層は灰褐色の砂が堆積する。遺物は、埋土中より甕(1)が出土しているほか、加工木片が底面直上から埋土上面にかけて重なりをみせながら検出された。特に意図的な配置は看取されない。(1)は、口縁部の外反する器形で、端面は無施文である。端面の上端は丸く収め、下端はやや下垂する。口縁部内面は緻密なミガキ調整で、頸部以下はケズリ調整である。

SK213 (第48図・図版14)

国道2区B20グリッドSW区に位置する。長径1.09m、短径78cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整な楕円形状を呈す。底面に2ヶ所の部分的な落ち込みがみられる。断面形は概ね逆台形状を呈する。検出面からの深さは最大21cmを測る。埋土は1層で、灰青色砂混じりの黒灰褐色粘質土である。西側寄り埋土中からは、加工木材、木材破片が散在した状態で検出された。また、南西側隅と北東側隅の埋土中より甕の口縁部(1、2)が、東側の埋土中より土玉1点(3)が出土している。

(1)は、外反する口縁部で、端面中程に櫛描き平行沈線が走る。端面は上端を丸く収め、下端は横方向に突出させる。肩部外面はハケ調整、内面は口頸部でミガキ調整、以下ケズリ調整の上からミガキ調整を施している。(2)は、外反する口縁部で、6条の擬凹線が走る。端面は弧状に反り、上端部は特に肥厚させて強調されており、横方向に突出する。下端部も斜め下方に突出している。肩部外面にハケ調整が施され、内面は頸部以下ケズリ調整である。

SK214 (第49図)

国道2区B20グリッドSE区に位置する。長軸1.1m、短軸39cmを測る不整な長方形形状を呈する土坑である。底面に複雑な段差があり、断面形はいびつである。検出面からは最深部で24cmを測る。埋土は3層に分層できるが、最下層が粘質土混じりの細砂層である。遺物は底面付近から出土するものが多いが、混入と思われる土器の細片、加工木の小片などである。北西側では下端線寄りの底面近くで甕の口縁部(1)が出土している。(1)は、外反する口縁部で、櫛描き平行沈線が施されている。端面は弧状に反り、上端は丸く収め、下端は斜め下方にやや突出させている。肩部外面にハケ調整が観察され、内面は、口頸部にミガキ調整、それ以下はケズリ調整である。

SK215 (第50図・図版14)

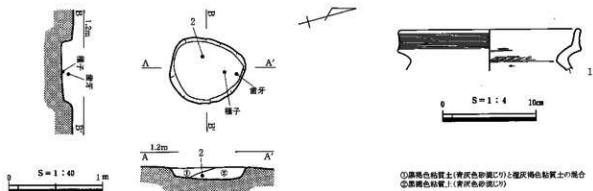
国道2区B19グリッドSE区に位置する。長径61cm、短径46cmを測る不整な楕円形状を呈する土坑である。南東側に小さな段をもつ。底面は中央部に向けやや下がるが、断面形は概ね逆台形を呈し、検出面からの深さは12.5cmを測る。埋土は1層で、黒褐色粘質土である。遺物は埋土中に拡散しており、混入と思われる土器の細片が多数出土している。北東側の壁面近くでは埋土中中程から甕の口縁部(1)が出土しており、また、中央やや東側の埋土上層より土玉1点(2)出土している。(1)は、外反する口縁部で、2単位の多条の擬凹線が終結する部分を観察できる。内面は口頸部にミガキ調整が施され、口縁部上端はヨコナダされている。

SK216 (第51図)

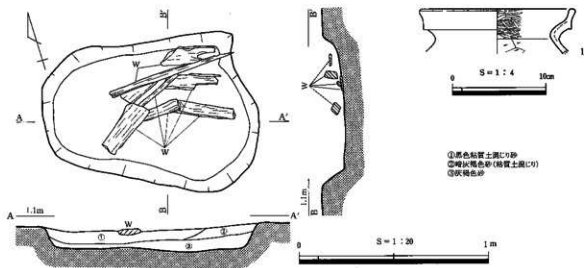
国道2区C20グリッドSW区に位置する。北側はSK217によって切られており、全体の形状は不明であるが、検出面、底面ともに楕円形を呈すると思われる。長軸87cm、短軸残存43cmを測る土坑である。断面形は逆台形状を呈すると思われる。検出面からの深さは14cmを測る。埋土は1層で、暗灰褐色土である。遺物は出土していない。

SK217 (第52図・図版14)

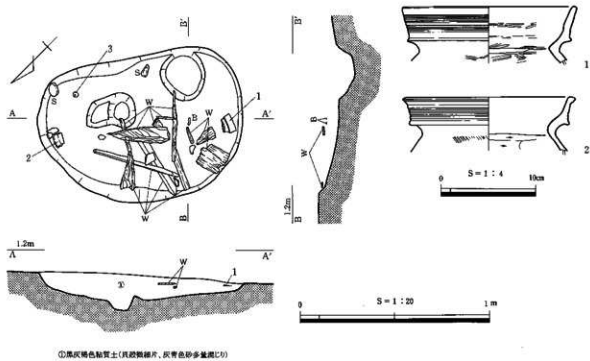
国道2区C20グリッドSW区からSE区にかけて位置する。南東側でSK216を切っている。長軸1.53m、短軸99cmを測る土坑である。検出面、底面ともに端整な隅丸形状を呈す。底面は中央部が最も深く、断面形は楕円形状に近い。検出面からの深さは27cmを測る。東半部では、埋土中から板材、木材破片が集中的に出土しているが、作為性は認められない。また埋土中より、甕が2点(1、2)と管状骨製の刺突具(3)が出土している。(1)は、外反する口縁部で、櫛描き平行沈線が走る。端面の立ち上がりは直線的で、上端部は丸く収め、



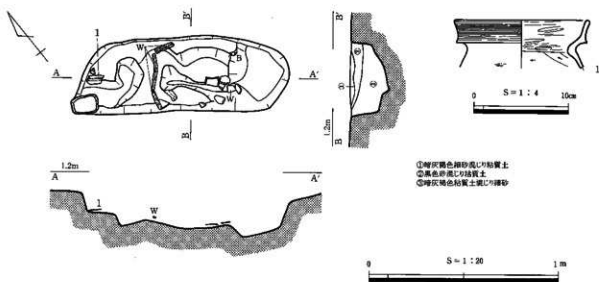
第46図 SK 211及び出土遺物



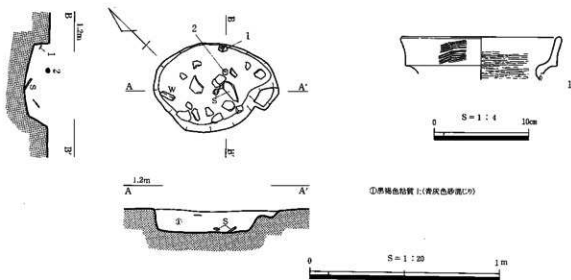
第47図 SK 212及び出土遺物



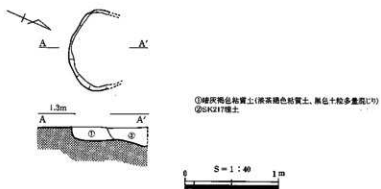
第48図 SK 213及び出土遺物



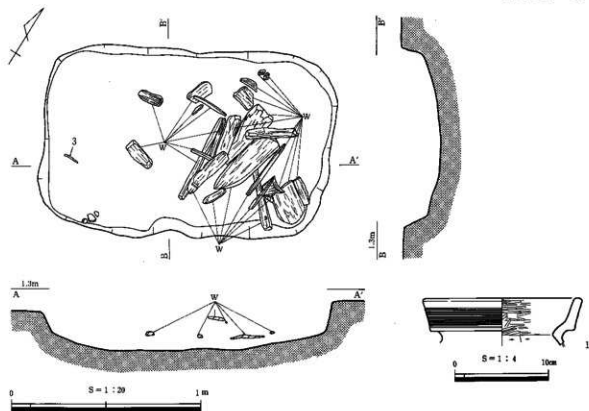
第49図 SK 214及び出土遺物



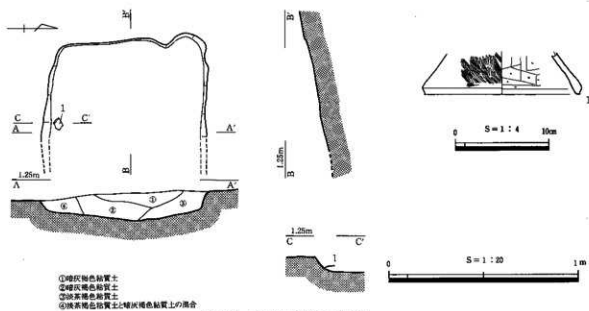
第50図 SK 215及び出土遺物



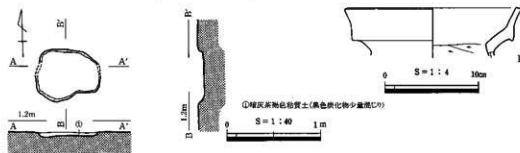
第51図 SK 216



第52図 SK217及び出土遺物



第53図 SK218及び出土遺物



第54図 SK219及び出土遺物

下部部は突出しない。内面は、口頸部にミガキ調整、胴部以下ケズリ調整である。

S K218 (第53図)

国道2区C20グリッドSE区に位置する。東側はトレンチによって切られているため全体の形状、規模は不明であるが、長軸85cm、短軸残存52cmを測る隅丸方形を呈する土坑と思われる。底面は、南北軸では中心に向かって下がり、東西軸では、東方向へ傾斜して下がっている。南北方向の断面形は不整な逆台形状を呈し、検出面からの深さは17cmを測る。埋土は4層に分層できたが、内側の暗灰褐色粘質土と外側の淡茶褐色粘質土の2つにまとめられる。南側の壁面寄りでは、埋土下層から器台と思われる脚部の破片(1)が出土している。(1)は、底部端部を面取りしてヨコナデし、外面はハケ調整後その上から疎らなミガキ調整を施している。内面はケズリ調整を施すが、底部端部はヨコナデしている。

S K219 (第54図)

国道2区A19グリッドNW区に位置する。長径69cm、短径54cmを測る不整な楕円形状を呈する土坑である。底面はほぼ平坦で、断面逆台形状を呈する。検出面からの深さは6cmである。埋土は、暗灰茶褐色粘質土の単層で、炭化物が少量混じっている。遺物は、甕か壺と思われる口縁部片(1)が、遺構中央部の埋土中より出土している。(1)は、外反する口縁部で、端面は無施文である。端面上端は面取りし、下端は下垂する。内面頸部以下ケズリ調整を施す。

S K220 (第56図・図版15)

国道2区A21グリッドNE区に位置する。南側は調査に伴う排水溝によって切られているため全体の形状、規模は不明であるが、長径1m、短径残存73cmを測る土坑である。検出面、底面ともに、本来不整な楕円形状を呈するものと思われる。底面は平坦で、断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。加工木片や木材破片、獣骨や植物の種などが埋土中から散在した状態で検出されたが、これらに混じって、甕の口縁部片(1、2)や紡錘形の有溝石鏝(3)、石製加工品(4)が出土している。(3)は底面直上から、(4)は底面付近から検出された。(1)は、強く外反する口縁部で、端部の立ち上がりは弧状を描き、上端は丸く細く収め、下端部は斜め下方に突出する。端面には無施文で、肩部外面に波状文が僅かに確認される。口頸部内外面はミガキ調整で、内面胴部以下はケズリ後ミガキ調整を加えている。

S K221 (第56図)

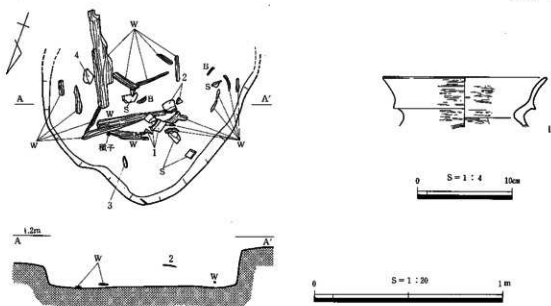
国道2区B18グリッドNE区からC18グリッドSE区にかけて位置する。長軸1.53m、短軸89cmを測る土坑である。検出面、底面ともに隅丸長方形を呈する。底面は多少のくぼみはあるものの概ね平坦で、断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは8cmを測る。遺物は南側寄りの埋土上面から出土しており、小型の甕(1)と胴部から底部にかけての破片(2)が近接して出土している。さらに東へ30cmの地点で土玉1点(3)が出土している。(1)は、口縁部が僅かに外反しており、頸部が確認できる。口縁端部が面取りされて内傾する形状をとり、端面をやや強めにヨコナデしている。口縁端面に1条の凹線が巡る。複合口縁とは言い難いが、端面下端が横方向にやや突出する。口縁部内面はミガキ調整で、頸部以下はケズリ調整されている。

S K222 (第57図)

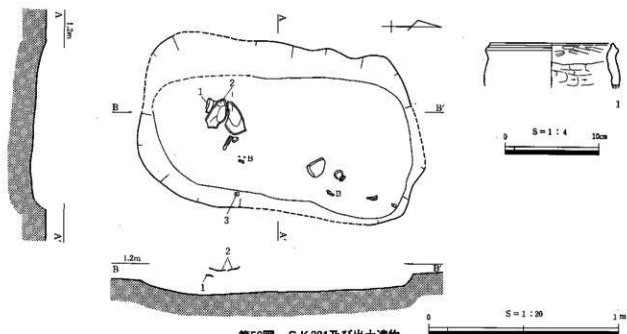
国道2区B20グリッド中央部に位置する。北東側はピットに切られている。長軸1.26m、短軸85cmを測る土坑で、検出面、底面ともに不整な形状を呈する。断面形はほぼ逆台形状を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。埋土は5層に分層されるが、茶褐色系の粘質土が主体となる。北側の埋土上面より器台の受け部(1)が出土しており、また埋土中より甕(2)と高環と思われる脚部(3)が出土している。(1)は、外傾する口縁部で、端面中程に横書き平行凹線が巡る。端面上端は丸く収め、下端は横方向に突出させている。頸部外面及び口縁部内面には、ミガキ調整を施している。

S K223 (第58図)

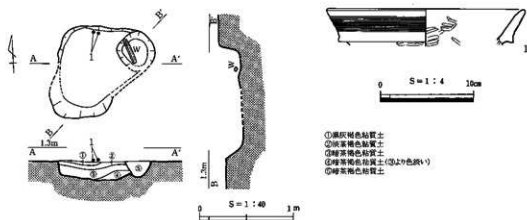
国道2区A19グリッドNW区からNE区にかけて位置する。南側は調査に伴う排水溝によって切られているため全体の形状、規模は不明であるが、検出面、底面ともに隅丸方形形状を呈する土坑と思われる。検出した範囲で



第55図 SK 220及び出土遺物



第56図 SK 221及び出土遺物



- ① 黒灰褐色粘質土
- ② 暗茶褐色粘質土
- ③ 暗茶褐色粘質土
- ④ 暗茶褐色粘質土 (③より色濃い)
- ⑤ 暗茶褐色粘質土

第57図 SK 222及び出土遺物

は長軸1.47m、短軸残存57cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは14.5cmを測る。埋土は1層で、暗灰茶褐色粘質土であり、若干の加工木片を含む。埋土中から、甕の口縁部（1）と蓋形のミニチュア土器（2）が出土している。（1）は、直立する口縁部で、端面は本来巡っていた多条の沈線をナデ消しており、その後ミガキ調整を施している。沈線は、下端に1条だけ残っている。端面上端は丸く収め、下端はナデ消のためやや肥厚気味となる。頸部外面、口縁部内面はミガキ調整で、内面頸部以下ケズリ調整後ミガキ調整を加えている。

SK224（第59図・図版15）

国道2区B19グリッドSW区に位置する。長径1.02m、短径53cmを測る土坑である。検出面、底面ともに楕円形状を呈する。底面は、西側で僅かに深くなる。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは22cmを測る。埋土は黒褐色土を基本とし、微細な混入物の差異によって2層に細分される。底面付近では、中心軸に即して加工長板材が検出された。これより上層から角板材や木片が折り重なるように出土しており、これらのうちには木庵丁（2）が含まれる。また埋土中より甕か壺と思われる口縁部（1）が出土している。（1）は、直立気味の口縁部で、多条の擬凹線が巡る。端面は上端が外側にやや屈曲し、下端は微かに下垂する。頸部内外面にミガキ調整が施され、胴部内面はケズリ調整である。

SK225（第60図）

国道2区B18グリッドSE区に位置する。東側では深さ28cmを測る掘り込みによって切られている。長径98cm、短径58cmを測り、検出面、底面ともに楕円形を呈する土坑である。検出面からの深さは16cmを測る。埋土は2層に分層できたが、暗灰褐色粘質土を基本とする。北側では底面直上から埋土中程にかけて甕と思われる口縁部（1）の破片が出土している。また、埋土中より土玉（2）が1点出土している。（1）は、内傾する口縁部で、端面に施文はない。端面は上下に拡張されており、斜め下方への下垂は明瞭である。口縁部内外面及び頸部外面には、細かいミガキ調整が施されている。

SK226（第61図）

国道2区B19グリッドSW区からSE区にかけて位置する。長径62cm、短径36cmを測る検出面、底面ともに楕円形状を呈する土坑である。検出面からの深さは4cmを測り、北側底面に落ち込みがあるため、さらに8cm深まる。埋土は4層に分層でき、①層には炭化物が含まれる。埋土中より甕（1）、底部片（2）が出土している。（1）は、ナデ消し気味の多条の擬凹線が巡り、外傾する口縁部である。端面は上端が丸く収まり、下端は若干下垂気味である。頸部内面はミガキ調整、胴部以下はケズリ調整である。

SK227（第62図）

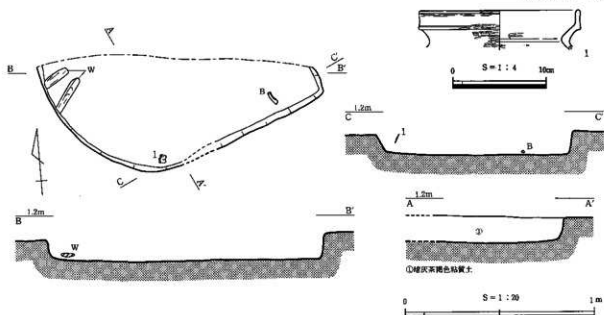
国道2区B18グリッドSW区に位置する。長軸1.48m、短軸96cmを測る土坑である。検出面は北東側が屈曲した不整形な形状で、細かい段差がある。壁面の立ち上がりは明瞭で、検出面からの深さは最大18cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土の1層で炭化物を含んでいる。埋土中より甕の口頸部（1）が出土している。（1）は、外傾する口縁部で、多条の擬凹線が巡る。端面上端部は欠損し、下端は下垂しない。口頸部内面はミガキ調整を施し、胴部内面はケズリ調整である。

SK228（第63図）

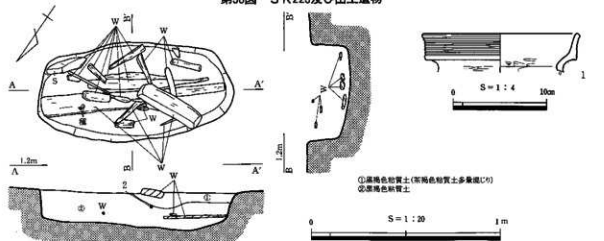
国道2区B18グリッドSW区に位置する。長径73cm、短径59cmを測る検出面、底面ともに円形状を呈する土坑である。底面は平坦で、断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは8cmを測る。埋土は1層で、黒茶褐色粘質土である。埋土中より甕（1）が出土した。（1）は、外傾する口縁部で、樽描き平行沈線が巡る。端面上端は丸く収め、下端は下垂しない。口頸部内面はミガキ調整で、口縁部をナデ消している。胴部以下はケズリ調整で、その上にミガキ調整を加えている。

SK229（第64図）

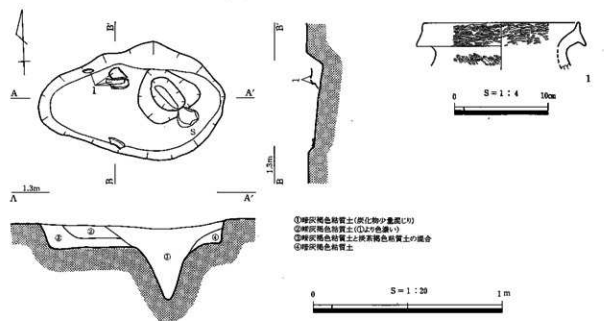
国道2区B18グリッドNE区に位置する。長径70cm、短径33cmを測る検出面、底面ともに楕円形を呈する土坑である。北側壁面に僅かな段をつくる。底面は南東側で部分的に落ち込むが、概ね平坦である。断面形は逆台



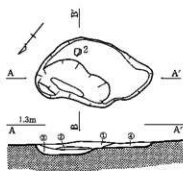
第58図 SK 223及び出土遺物



第59図 SK 224及び出土遺物

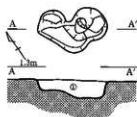


第60図 SK 225及び出土遺物



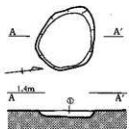
- ①黒褐色粘質土(黄灰褐色砂、黒色炭化物層状に混じる)
- ②灰褐色粘質土(黄灰色砂混じり)
- ③暗灰茶褐色粘質土(赤茶褐色粘質土小ブロック多量混じり)
- ④暗灰茶褐色粘質土(赤茶褐色粘質土小ブロック多量混じり)

第61図 S K 226及び出土遺物



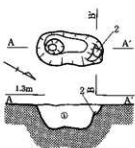
- ①暗灰褐色粘質土(黒色炭化物微量混じり)

第62図 S K 227及び出土遺物



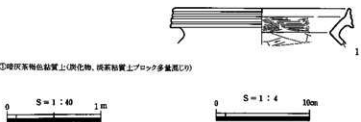
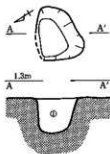
- ①黒茶褐色粘質土(赤茶褐色粘質土ブロック少量混じり)

第63図 S K 228及び出土遺物



- ①暗灰褐色粘質土(赤茶褐色粘質土混じり)

第64図 S K 229及び出土遺物



- ①暗灰茶褐色粘質土(炭化物、焼土粘質土ブロック多量混じり)

第65図 S K 230及び出土遺物

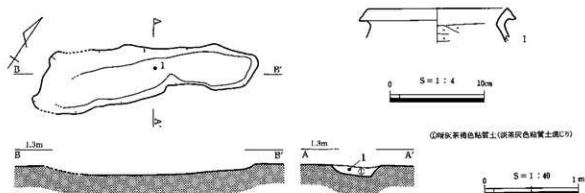
S = 1 : 40 1m

S = 1 : 4 10cm



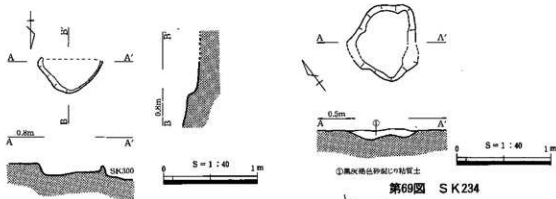
①暗灰色粘質土(灰白色砂質土、褐色物少量混じり)

第66図 SK 231及び出土遺物

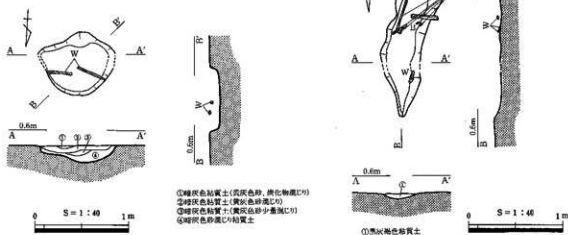


②暗灰色粘質土(深褐色粘質土混じり)

第67図 SK 232及び出土遺物



第68図 SK 233



第69図 SK 234

第70図 SK 235

第71図 SK 236

形状を呈し、検出面からの深さは27cmを測る。埋土は1層で、暗灰褐色粘質土である。遺物は北側壁面の段の底面直上から器台(2)が出土した。また埋土中より甕(1)が出土した。(1)は外傾して、襷描き平行沈線が巡る口縁部で、上端を欠損する。端面は弧状に反り、よって下端が突出気味となるが、下垂はしない。胴部内面はミガキ調整で、胴部内面はケズリ後ミガキ調整を加える。

SK230 (第65図)

国道2区B18グリッドNE区に位置する。長軸56cm、短軸46cmを測る検出面、底面ともに不整な台形状を呈する土坑である。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは37cmを測る。埋土は1層で、炭化物が混じる暗灰茶褐色粘質土である。埋土中より甕(1)が出土している。(1)は、3条の凹線が巡り、端面の内傾する口縁部で、端部下端は斜め下方に下垂する。口縁部内面はハケ調整で、端部側をヨコナデして消している。胴部内面はケズリ調整である。

SK231 (第66図)

国道2区B19グリッドNW区に位置する。長径87cm、短径64cmを測る土坑である。検出面、底面ともに楕円形状を呈す。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは34cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土の1層であり、炭化物が少量混じっている。底面近くで加工板が検出されたが、壁面から突き出たものであり、遺構との関連はない。埋土中より甕(1)が出土した。(1)は、内傾する口縁部で上端を欠く。端面に施文はない。胴部内面はケズリ調整で、頸部寄りの部分にはミガキ調整を加えている。

SK232 (第67図)

国道2区A19グリッドNW区からB19グリッドSW区にかけて位置する。長軸2.3m、短軸50cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整な長方形形状を呈する。断面の立ち上がりは緩やかで、底面は細長い平坦面となっている。検出面からの深さは12cmで、断面形は逆台形状を呈する。埋土は1層で、暗灰茶褐色粘質土である。中央部の埋土上層より甕(1)が出土している。(1)は、内傾する口縁部で、断面は三角形形状を呈し、凹線等は巡らない。胴部内面はケズリ調整である。

SK233 (第68図)

国道3区B26グリッドSE区に位置する。SD32より上層で、SA15より下層にあたる。南側はトレンチによって切られているため全体の形状、規模は不明であるが長軸68cm、短軸残存38cmを測り、本来丸方形形状を呈する土坑だと思われる。底面は平坦で、断面逆台形状を呈し、検出面からの深さは18cmを測る。遺物は出土していない。

SK234 (第69図)

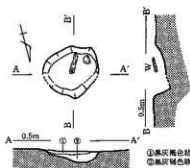
国道3区B26グリッドSW区からB26グリッドNW区に位置する。SD32より上層で、SA15より下層にあたる。長軸81cm、短軸72cmを測る検出面、底面ともに不整な五角形状を呈する土坑である。断面は皿状で、底面には凸凹がある。検出面からの深さは11cmを測る。埋土は1層で、黒灰褐色砂混じり粘質土である。遺物は検出されなかった。

SK235 (第70図)

国道3区B26グリッドSE区に位置する。SD32より上層で、SA15より下層にあたる。長径68cm、短径61cmを測る検出面、底面ともに不整な楕円形状を呈する土坑である。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは17cmを測る。埋土は4層に分層できたが、暗灰色粘質土を基本とする。埋土中に木片がみられたほかは、遺物は出土しなかった。

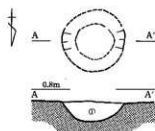
SK236 (第71図)

国道3区B26グリッドSW区に位置する。SK241の上層で、かつSK299とSA15より下層に築かれ、西側にはSK237が近接する。南西側はトレンチによって切られており全体の形状、規模は不明である。長軸残存1.37m、短軸39cmを測る土坑で、北側が先細りする溝的な形態をとる。断面は皿状で、底面は曲面を呈し、検出面からの深さは7cmを測る。埋土は1層で、黒灰褐色粘質土である。埋土中から木片が検出されたほかは、遺物は



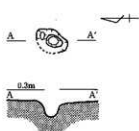
第72図 SK237

①黒灰褐色粘質土
②黒灰褐色砂質粘土粘質土

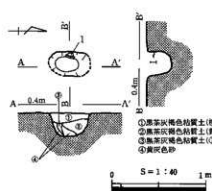


第73図 SK238

①緑灰赤褐色粘じ粘質土



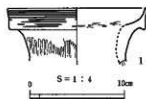
第74図 SK239



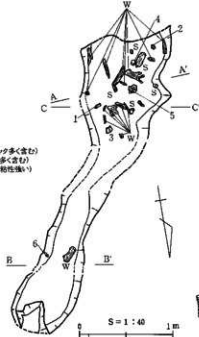
第75図 SK240及び出土遺物

①黒茶灰褐色粘質土(褐色ブロック多く含む)
②黒茶灰褐色粘質土(黄灰色多含む)
③黒茶灰褐色粘質土(D, ②より粘性強い)
④黄灰色砂

0 S = 1 : 40 1m

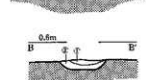
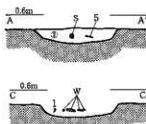


0 S = 1 : 4 10cm

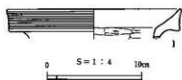


第76図 SK241及び出土遺物

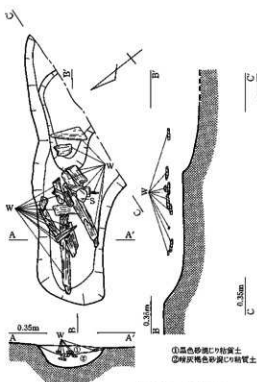
0 S = 1 : 40 1m



①NK241遺土
②黒灰褐色砂質粘土粘質土

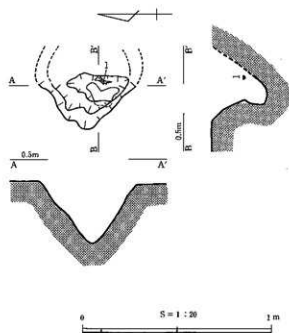


0 S = 1 : 4 10cm



第77図 SK242

①黒色砂質粘土粘質土
②緑灰褐色砂質粘土粘質土



第78図 SK243

0 S = 1 : 20 1m

出土していない。

SK237 (第72図)

国道3区B26グリッドSW区に位置する。SD32より上層で、SA15より下層にあたり、東側にはSK236、SK241が近接している。径57cmの検出面、底面ともに円形状を呈する土坑である。断面は皿状で、底面は凹面となる。検出面からの深さは最大18cmを測る。埋土は黒灰褐色粘質土を基本とし、砂の有無によって2層に細分された。埋土中から木片が検出されたほか、遺物は出土していない。

SK238 (第73図)

国道3区B27グリッドSE区に位置する。SD32より上層で、SA15より下層にあたる。土層断面観察用ベルト中から検出されたため、北側と南側の形状は不明であるが、径65cm程のほぼ円形を呈する土坑と思われる。断面形は半円形を呈し、検出面からの深さは22cmを測る。埋土は1層で、炭化物片を含む暗灰茶褐色砂混じり粘質土である。遺物は出土しなかった。

SK239 (第74図)

国道3区B27グリッドSW区に位置する。SD32より上層で、SA15より下層にあたり、北西側はSK240に切られている。長径37cm、短径残存18cmを測る土坑で楕円形状を呈すると思われる。断面形はU字形で、底面に径5cm程度の小さな平坦面をもつ。検出面からの深さは19cmを測る。遺物は出土していない。

SK240 (第75図)

国道3区B27グリッドSW区に位置する。SD32より上層で、SA15より下層にあたり、南東側でSK239を切っている。また、遺構北側は調査に伴う排水溝で切られているため、全体の形状、規模は不明である。長径は推定で45cm、短径27cm、検出面からの深さ26cmを測る。検出面、底面ともに楕円形を呈すると思われる土坑である。埋土は4層に分層でき、黒灰褐色粘質土を基本とするが、黄灰色砂がブロック状にみられる。埋土上層では西側の壁面に接して壺の口縁部片(1)が出土している。(1)は直立気味の口縁部で、多条の擬凹線が走り、端部下端は下垂する。擬凹線は部分的にナデ消されている。頸部外面と口縁部内面はミガキ調整を施し、口縁部内面はミガキをナデ消している。

SK241 (第76図・図版16)

国道3区B26グリッドSW区に位置する。SD32より上層で、SK236、297、299、SA15より下層にあたり、西側にはSK237が近接している。遺構の南側は調査に伴う排水溝によって切られているため、全体の形状、規模は不明である。長軸残存3.38m、短軸43cmを測る土坑で、溝的な細長い形状を呈する。検出面からの深さは8cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は1層で、黒灰褐色砂混じり粘質土である。木片が南側に片寄って出土しており、いずれも底面から浮いた状態である。埋土中より甕か壺と思われる破片(1)、甕(2)小型の甕(3)、壺(4、5)、土玉(6)1点が出土している。(1)は直立気味の口縁部で、多条の擬凹線が走る。口縁部の断面は三角形に近い。胴部内面はケズリ調整を施している。

SK242 (第77図)

国道3区B25グリッドSW区からSE区にかけて位置する。SD32より上層で、SA15より下層にあたる。南側は調査に伴う排水溝によって切られているため全体の形状、規模は不明である。長径残存1.44m、短径40cmを測る土坑で、検出面、底面ともに不整な長楕円形状を呈すると思われる。断面の立ち上がりは比較的緩やかであり、底面はほぼ平坦だが、南側に落ち込みがみられる。検出面からの深さは9cmで、南側でさらに10cm深まる。埋土中から、加工木材片がほぼ一定のレベルでまともに出土しているほかは、遺物の出土はみられない。

SK243 (第78図・図版16)

国道3区B26グリッドSW区に位置する。SD32より上層で、SA15より下層にあたる。東側はトレンチによって切られているため全体の形状、規模は不明である。長軸52cm、短軸残存30cmで、検出面からの深さは34cmを測る。断面形は逆三角形形状を呈するが、一部袋状となり、壁面には凹凸がある。埋土中より、シカの肩甲骨によるト骨が1点検出された。関節窩を上にし、東側壁面に接した状態で出土している。

SK244 (第79図)

国道2区B17グリッドSSE区に位置する。長径71cm、短径57cmを測る楕円形状を呈する土坑である。底面の西側はトレンチによって切られている。底面は平坦で、検出面からの深さは14cmを測り、断面逆台形状を呈する。埋土は単層で、炭化物を少量含む暗灰褐色粘質土である。遺物は出土していない。

SK245 (第80図)

国道2区B17グリッドSSE区に位置する。一部攪乱を受けているが、長径61cm、短径58cmを測る、円形状を呈する土坑である。底面は平坦で、検出面からの深さは13cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は1層で、暗灰茶褐色粘質土である。遺物は出土していない。

SK246 (第81図)

国道2区A18グリッドNE区に位置する。南側は調査に伴う排水溝によって切られている。長軸60cm、短軸残存50cmを測る土坑である。検出面、底面は本来楕円形状を呈するものと思われ、断面は逆台形状を呈する。検出面からの深さは20cmを測る。埋土は1層で、暗茶褐色粘質土である。遺物の出土はなかった。

SK247 (第82図)

国道2区B18グリッドSW区に位置する。長径79cm、短径52cmを測る土坑である。検出面、底面ともに楕円形状を呈する。検出面からの深さは12cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は暗灰褐色粘質土の1層で炭化物を多量に含んでいる。遺物は出土していない。

SK248 (第83図)

国道2区B18グリッドSSE区からB19グリッドSW区にかけて位置する。長径65cm、短径49cmを測る土坑である。検出面、底面ともに楕円形状を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは16cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は暗茶灰褐色粘質土の1層で、炭化物を含んでいた。遺物は出土していない。

SK249 (第84図)

国道2区B18グリッドSSE区に位置する。長軸82cm、短軸43cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整な形状を呈する。検出面からの深さは11cmを測り、断面形は逆台形状を呈す。埋土は暗灰茶褐色粘質土の1層で、炭化物を含んでいた。遺物は出土していない。

SK250 (第85図)

国道2区B20グリッドSW区に位置する。長径73cm、短径60cmを測る土坑である。検出面、底面ともに楕円形状を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは13cmを測り、断面逆台形状を呈する。埋土は3層に分層してきたが、底面直上に部分的に細砂が堆積している。南東部の埋土上面で円礫が検出されており、埋土中に木片が混入している。遺物は出土していない。

SK251 (第86図)

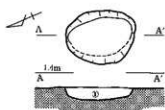
国道2区A18グリッドNE区に位置する。長径76cm、短径45cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整な楕円形状を呈す。底面はほぼ平坦で、断面逆台形状を呈し、検出面からの深さは14cmを測る。埋土は1層で、暗茶灰色粘質土である。遺物は出土していない。

SK252 (第87図)

国道2区A18グリッドNW区に位置する。南東側は、調査に伴う排水溝によって切られている。長径残存92cm、短径37cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整な長楕円形を呈すると思われる。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは8cm、断面形は皿状を呈する。埋土は1層で、暗灰褐色粘質土である。遺物は出土していない。

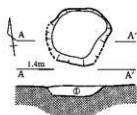
SK253 (第88図)

国道2区B18グリッドSSE区からNE区にかけて位置する。南東側はSD5との切り合いがみられる。長径72cm、短径残存44cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整な楕円形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは12cmを測り、断面形は逆台形状を呈す。遺物は出土していない。



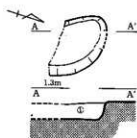
①暗灰褐色粘質土

第79図 SK244



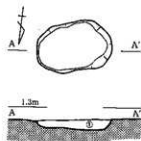
①暗灰褐色粘質土

第80図 SK245



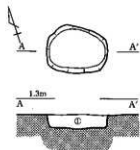
①暗赤褐色粘質土

第81図 SK246



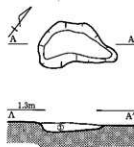
①暗灰褐色粘質土

第82図 SK247



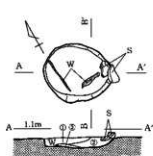
①暗赤褐色粘質土

第83図 SK248



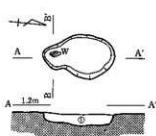
①暗赤褐色粘質土

第84図 SK249



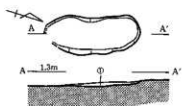
①暗灰褐色粘質土
②黒色粘砂混じり粘質土
③暗灰褐色粘質土上に粘砂

第85図 SK250



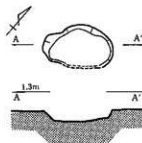
①暗赤褐色粘質土

第86図 SK251

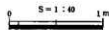


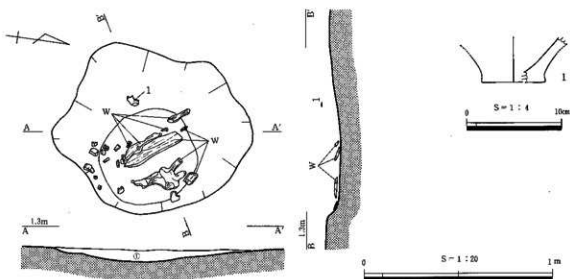
①暗灰褐色粘質土

第87図 SK252



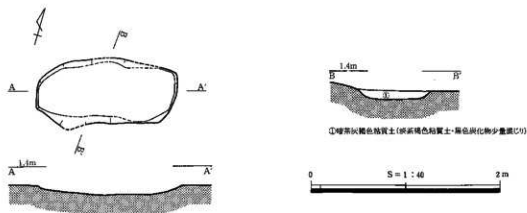
第88図 SK253





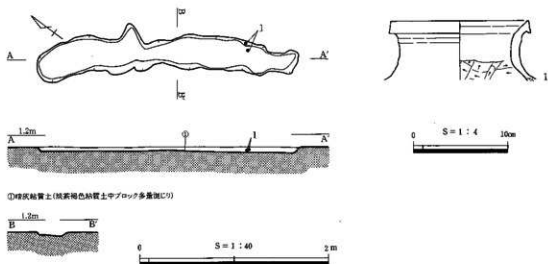
①埴原以褐色粘質土(粘土物量少)

第89圖 SK 254及び出土遺物



①埴原以褐色粘質土(埴原褐色粘質土・褐色炭化物少量混じり)

第90圖 SK 255



①埴原粘質土(埴原褐色粘質土中ブロック多量混じり)

第91圖 SK 256及び出土遺物

SK254 (第89図)

国道1区C15グリッドNE区からSE区にかけて位置する。長径1.06m、短径86cmを測る土坑である。検出面は不整な円形状を呈し、底面はほぼ円形を呈す。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは7.5cmを測る。埋土は1層で炭化物混じりの暗茶灰褐色粘質土である。底面直上からは炭化した加工木材や自然木が検出され、火焚き場的な様相である。埋土中から、底部片(1)が出土している。(1)は平底で、風化のため内外面とも調整不明である。

SK255 (第90図)

国道2区A17グリッドNE区に位置する。長軸1.43m、短軸71cmを測る土坑である。検出面、底面ともに隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは19cm、断面形は皿状を呈す。埋土は暗茶灰褐色粘質土の1層で、炭化物が少量混ざる。遺物は出土していない。

SK256 (第91図)

国道2区B19グリッドNW区からC19グリッドSW区にかけて位置する。長軸2.76m、短軸32cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整ながら、直線状に延びる溝状を呈する。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは7cmを測る。埋土は1層で、暗灰色粘質土である。埋土中から壺(1)、土玉2点(2、3)が出土した。(1)は、若干内傾する口縁部で、端面下端が下垂する。凹線等は巡らない。胴部内面は肩部以下ケズリ調整である。

第2節 溝

SD29～32 (第92図)

SD32は3区B26グリッド南側に位置する。東西方向に約5mの長さで延び、幅約1.2m、深さ20cm前後の、木器溜りを伴う不整形な溝状遺構である。北東側でSD15、18と接している。南西側は非常に浅くなるため、遺構の続きを検出することができなかった。検出面の標高は北側で0.3～0.35m、南側で0.25m前後である。底面形も不整形で、所々に浅い澁み状の落ち込みがみられる。

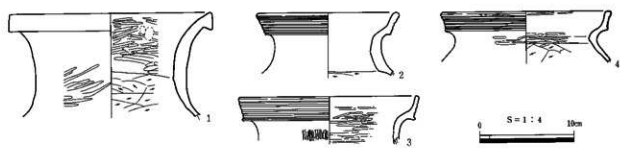
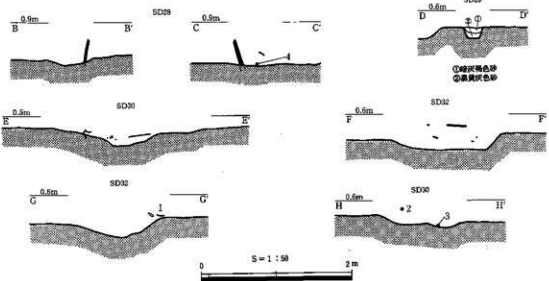
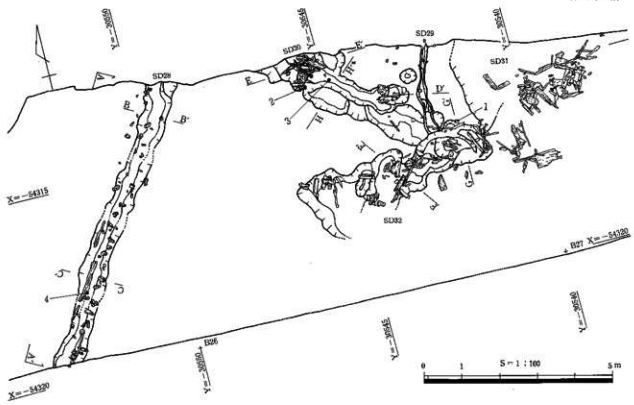
SD31はSD32の北東側に位置する木器溜りを伴う落ち込みである。東側へと緩やかに傾斜する落ち込みの上端ラインは南北に2.5mほど延びるが、北側は調査区外へと続いており、東側・南側では立ち上がりを検出できなかったため、遺構の全体像は不明である。落ち込みの深さは検出面より10cm前後である。

SD29、30はSD32の北岸に接している。両者とも北側は調査区外へと続くため全体像は不明だが、SD30は南東から北西方向、SD29はほぼ南北方向に直線的に延びている。SD29は南端でSD30の東端を一部切る。検出した範囲内での各規模は、SD30が長さ4.3m、検出面の幅約1m、底面幅20cm前後、深さ15cm前後、SD29が長さ2.3m、検出面の幅約30cm、底面幅15cm前後、深さ15cm前後を測る。SD15、18とも、断面形は基本的に逆台形状を呈する。SD29の底面は平坦であるが、SD30の底面は北西側にやや傾斜する。またSD30は所々にテラス状の浅い段が付随し、深さを増した北西側には木器溜りも形成されている。

SD30～32の埋土は暗茶褐色系の砂混じり粘質土、SD29の埋土は黒灰褐色系の砂質土で、上層断面からSD29がSD30を切っていることが確認できた。木器溜りはSD31、32の検出面付近、SD30の北側で検出された。SD32では溝全体に角材、板材などが散乱した状態を確認している。一方、SD31は比較的大型の板材、角材などが2m四方ほどの範囲に集中している。SD30の壁面沿いからは、赤色塗彩された木製高環が出土している。

SD32に伴う土器は、溝の北東側の肩から出土した壺(1)が挙げられる。口縁は肥厚し直立する。全体に器壁は厚く、外面は口縁部から頸部上半分にかけてナデ、頸部下半分にヘラミガキ、内面は口縁から頸部上半分にかけてヘラミガキ、頸部下半部以下はケズリが施される。

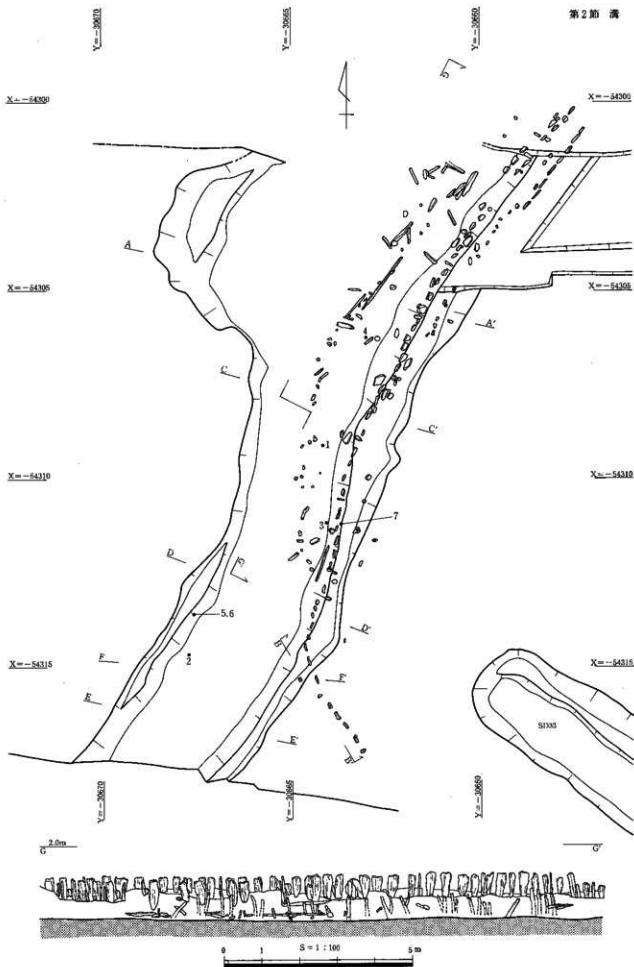
SD30に伴う遺物は、北側の検出面付近より出土した壺(2)、北側の底面直上から出土した壺(3)が挙げられる。(2)は外反、(3)は外傾する複合口縁で、いずれも口縁外面には多条の凹線が巡り、若干のナデ消



第92図 SD28~32及び出土遺物



第93図 SD11木器溜検出状況



第94图 SD11矢板列檢出状況

しが施される。(2)は頸部内外面ヨコナデ、肩部にヘラケズリが見られる。(3)は頸部外面にハケメ、口縁部から頸部の内面にはヘラミガキがみられる。

S D28 (第92図、図版17)

3区B25グリッドS E区～B26グリッドN W区にかけて位置する。北側、南側とも調査区外へと続いているため全体像は明らかでないが、北東から南西方向に直線的に延びる溝状遺構である。検出した範囲内での規模は、長さ15.5m、幅約1.5m、深さは30cmを測る。西側には後続する時期のS D36、37が平行し、西側の肩はS D37によって切られる。約5m東にはS D29～32の溝状遺構群が位置している。

溝の底面及び壁面には10～30cmほどの間隔で杭が打ち込まれ、溝に平行する杭列をなす。溝の南西側では、杭に支えられる横板も見られる。溝の検出面の標高は北側で0.4m、南側で0.3m、杭の頂点の標高は0.7m前後、横板は杭の頂点より20cmほど低位に設置されている。杭列には5～8cm前後の角材と一部に転用材である板が使用されており、比較的整然とした列をなす。本来的には杭列全体に横板が付随するものと思われ、溝の護岸施設と考える。

遺物は溝の南西側の底面直上より壘(4)が出土している。外反する複合口縁の外面にはややナデ消し気味の板凹線が走り、口縁端部はまるく収められる。頸部外面及び口縁部から頸部の内面にはヘラミガキが施され、肩部内面にはヘラケズリがみられる。

S D11 (第93～95図、図版18～23)

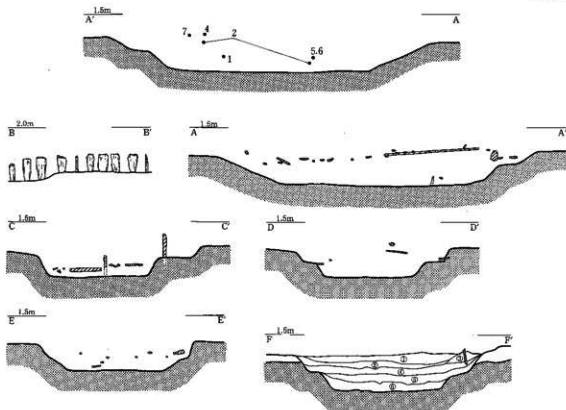
1区B14、C14、15グリッドにかけて位置する溝状遺構である。1区の中央付近を横断するかたちで北北東から南南西に延びる。溝の南東側の、東岸から約4m離れた地点には、S D11の直交方向に延びる同時期の溝S D33の西端が位置している。S D11の規模は、検出した範囲内で長さ18.5m、検出面の幅は南側で3.8m前後、北側では最大幅3.5mを測る。底面幅は南側で2.4m前後、北側で5m前後である。検出面の標高は北側で0.7～0.9m、南側で0.8m前後、底面の標高は北側で0.05～0.1m、南側で-0.03～0.05mである。わずかに南側の底面が低いことから、北から南へ向かう非常に緩やかな流れが想定される。

溝は南側ではほぼ一定の幅を保つが、北側では蛇行し幅が広がる。断面は逆台形状を呈し、東岸と西岸の一部は、壁面をシ字状に掘削し、テラス状の段が形成される。東岸より4.5m内側の溝の底面には、東岸にほぼ平行する杭列が位置する。この杭列はC14グリッドS W区とS E区の境界付近からカーブし、東岸にぶつかり終息する。杭は径5cm程度の自然木、4cm角の角材などが用いられており、間隔はまばらである。

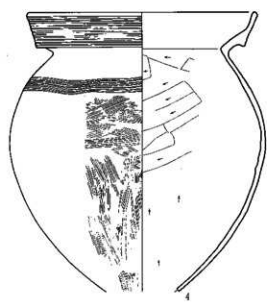
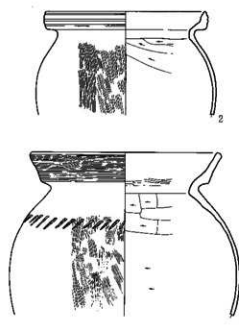
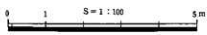
東岸のテラスの平坦面は30～80cmの幅をもち、平坦面の西端に矢板を打ち込んだ護岸施設が作られる。矢板には長さ50～80cm前後、幅30cm前後、厚さ3～4cmのスキ製板材が用いられる。板の片側をV字状に削り、矢羽根状の形態に加工したものである。矢板は東岸14mにわたって設置されるが、B14グリッド中央付近でカーブを描きつ南東方向を変え、溝のラインから遠ざかり、3.5mほど延びて終息する。基本的に矢板は壁面に板の平坦な面が沿うかたちで打たれているが、4、5枚に1枚程度、溝の壁面に矢板の平坦面が直交するかたちで打たれるものがある。北側では、50cmほど背後にもう一列、6.8mにわたる矢板列が見られ、その内北端から2.3mは比較的大形の矢板が密に打たれている。隣接する矢板と矢板の間には、5～10cm程度の隙間が開く。南東付近で矢板列が溝から離れる部分では、矢板の間隔が30cm近く開く。埋土は4層に分けられるが、基本的に灰茶褐色系の細砂混じり粘質土で、レンズ状堆積をみせる。矢板列は③層が堆積した段階で打たれたものである。

一方西岸は、南側に狭長な平坦面のテラス、北側の蛇行した部分に半月形の平坦面のテラスが存在するが、矢板は一枚も打たれていない。地形的にS D11を境に東側が微高地となることから、矢板列は護岸としてのみでなく、この岸辺を境界とする区画の意味を持って打たれたものと推察する。S D11は50mほど北側に位置する県道調査区4区の溝状遺構S D11につながっていくものと想定される。

S D11の内部には、大型の建築部材や木製品、自然木からなる濃密な木器溜が形成されている。その方向は基本的に溝の流れと同一であるが、大型の建築部材などが溝のなかで縦横に重なる様も見受けられる。上層には板材、柱材などの比較的大型の木器が溜り、下層に近付くにつれ小型の木製品の出土が多くなる。また、南側より



- ①暗青灰色シルト(細砂混じり)
- ②緑茶褐色粘質土(細砂混じり)
- ③暗青灰色シルト(細砂混じり、①より色濃い)
- ④灰茶褐色粘質土(暗茶褐色金属成分多量混じり、細砂混じり)
- ⑤暗灰茶褐色粘質土(細砂混じり)
- ⑥暗灰茶褐色粘質土(明灰茶褐色粘質土ブロック状に少量混じり、細砂混じり)



第95図 S D11断面図、土層図及び出土遺物

も北側に大形の木器が顕著で、南側は角材、破材を中心とした溜りが形成される。南側では、テラス上の矢板と壁面との間から盾が出土しており、その西側1mの地点では、板を加工し頭と脚、脚を表現した人形を検出した。北側では赤色塗彩された木製高環を検出している。その他、木器溜りから出土した製品には、桶、杓子、木鏝、田舟、盾、斧柄、鏝、碇などが挙げられる。土器は埋土中から(1)～(4)を検出した。いずれもローリングを受けていない遺存状態の良好なもので、溝内部に廃棄されたものと考えられる。

(1)は壺で、口縁端部が上下に拡張され、端面が内傾する。細い構描き平行沈線が巡る。胴部は肩が張らず、外面ハケ調整、内面ケズリ調整である。(2)は壺で、口縁端部が凸面を呈し、3条の凹線が巡る。端面下端は下垂しない。胴部は肩が張らず、外面ハケ調整、内面ケズリ調整である。(3)は壺で、外傾する口縁部を呈する。端面上端は丸く収め、下端は下垂しない。端面には構描き平行沈線が巡り、内面ミガキ調整で大半をナデ消している。胴部は肩が張らず、外面ハケ調整で、肩部にヘラ状工具による連続刺突が巡る。内面はケズリ調整である。(4)は壺で、外傾する口縁部を呈する。端面上端は丸く収め、下端はやや下垂する。端面には多条の擬凹線が巡り、内面はナデ調整している。胴部は肩が張らず、外面ハケ調整で、肩部にハケ状工具による平行沈線が巡る。内面はケズリ調整である。

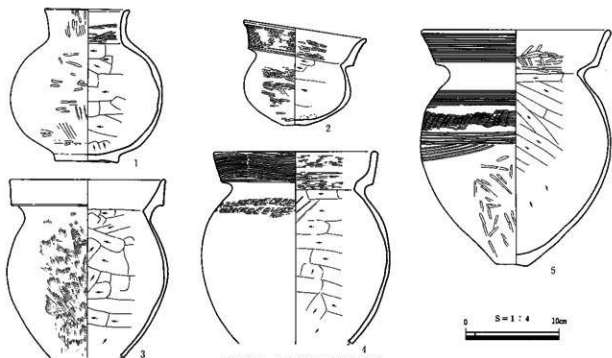
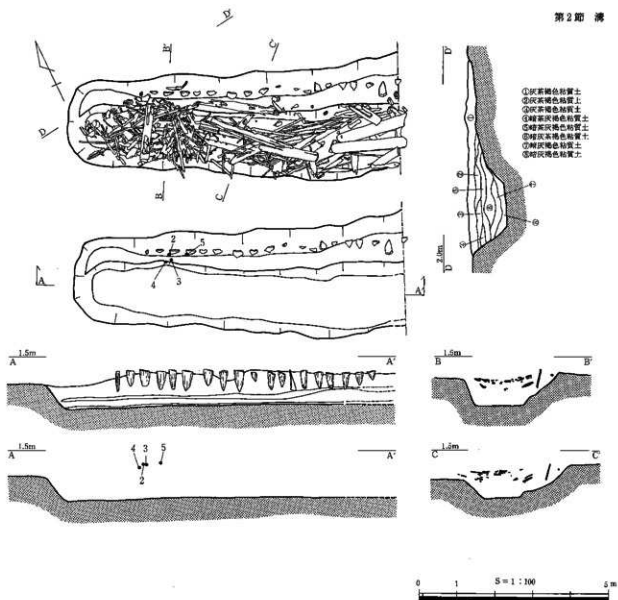
SD33 (第96図・図版24、25)

国道1区B15グリッドSW区に位置する。SD11とは直交する位置関係にあるが合流はせず、4.2mの幅の陸橋状部分を含んだ位置から南東方向に向かい、調査区外へ伸びる。SD11に伴う矢板列は、東岸に即して南北に伸びているが、陸橋状部分を過ぎると、SD33と並走する方向に向きを変え、そこで途切れている。検出長8.7m、最大幅2.9mを測る。北東岸の標高は1.1m、南西岸の標高は0.7mで、最深部の標高は0.2mを測る。よって溝の深さは50～90cmとなる。北東側に溝の方向に平行する向きで段状部分が細長く伸び、よって溝の断面は北東側で段になる逆台形状を呈する。段状部は、溝底面から20～25cmの高さにある。北東岸には、遺存長25～50cmの矢板19枚を段状部の壁面側に用いた護岸施設が付設され、長さ6.8mにわたって検出された。溝の完備状態では矢板の先端が露出するので、矢板は当初から打ち込まれたものではなく、溝が埋没する過程で打設されたものであるといえる。土層断面からみて、下層の堆積層である⑥層から⑧層が上層と土質を変え、矢板のレベルともほぼ合致することから、矢板は⑤層堆積以降に打たれたものである可能性もある。なお、南西岸には矢板が打たれておらず、矢板はSD11と同様な在り方をみせる。

溝の上層には、濃密な木器溜り層が形成されている。標高0.6～1mの範囲にあたり、断面では中心がややくぼむ弧状の堆積をなしている。木製品の構成は、長さ1mを越える比較的大型の角材や板材などの建築材が主体を占め、容器類や農具類はみられない。南東端では、両端を弧状に加工した長い板材が2枚出土している。概ね溝の軸に平行な方向で出土するが、西端ではむしろ溝に直交する方向で堆積している。

土器は、溝の北東岸の西寄り集積的に出土し、木器溜りに混入した状態で検出されている。出土した標高は0.5～1.2mの範囲で、木器溜りの上部と下部で出土した破片同志が接合したものもある。溝の規模に比して出土した土器の量は多く、かつ完形近くまで遺存しており、しかも時期的にまとまる傾向にあり、溝への一括投棄が窺われる。これら土器の出土状況から勘案するに、木器溜りも着したのではなく、岸辺から投棄されたものであると考えられる。

(1)は、口頸部がやや外傾気味に立ち上がる壺で、胴部は球形を呈し、底部は高台状の平底である。口頸部内外面はミガキ調整で、胴部外面はミガキ調整、内面はケズリ調整である。(2)は小型の壺で、歪みのために口縁端部のラインが傾いている。口縁部は外反し、端面上端は肥厚気味に丸く収め、下端は下垂しない。端面には構描き平行沈線が巡る。内面はミガキ調整で、端部はナデ消している。胴部は寸の詰まった球形を呈し、底部は小さな平底である。胴部外面はハケ調整後ミガキ調整を加え、内面はケズリ調整で底部に指押さえがみられる。(3)は口縁端部が直立する壺で、口縁部内外面ともヨコナデしている。胴部はあまり肩が張らず、外面ハケ調整、内面ケズリ調整である。(4)は外傾する口縁部の壺で、端面上端は丸く収め、下端は下垂しない。端面には構描き平行沈線が巡り、内面はミガキ調整する。胴部は肩が張らず、外面肩部にハケ状工具による押し引き平行



第96图 S D33及び出土遺物

沈線が施されている。内面はケズリ調整である。(5)は外反する口縁部の甕で、端面上端は丸く収め、下端は下垂しない。端面には多条の擬凹線が巡り、内面はミガキ調整し、端部はヨコナデする。胴部はやや肩が張り、底部は小さめの平底である。外面ミガキ調整で、肩部にハケ状工具による押し平行沈線とこれを挟んで上下に平行沈線が施されている。内面はケズリ調整である。

第4章 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構

第1節 土坑

SK257 (第101図・図版27)

国道3区B17グリッドNE区に位置する。長径1.14m、短径98cmを測る土坑である。検出面、底面ともにほぼ円形状を呈する。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。埋土は2層に分層でき、黒茶褐色粘質土を基本とするが、①層には炭化物を含んでいる。埋土中より甕(1)、鉄製の棒状製品(2)、鉄器片が出土している。(1)は、外反する口縁部で、端面上端を丸く収め、下端は横方向に突出させている。内外面ともナデ調整である。

SK258 (第102図・図版29)

国道2区A19グリッドNE区からA20グリッドNW区にかけて位置する。長径96cm、短径73cmを測る土坑である。検出面、底面ともに北側と南側が外側に張り出す不整な楕円形状を呈する。底面は中心部に向かって傾斜する。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは13cmを測る。埋土は黒灰褐色土の1層で、貝殻片を含んでいる。埋土下層から、加工木片や自然木片が東側にやや片寄せた状態で出土している。また、埋土中より甕(1、2)が出土している。(1)は、外反する口縁部で、端面上端を丸く収め、下端は横方向に突出させている。胴部外面にハケ調整、内面にはケズリ調整を施している。

SK259 (第103図)

国道2区B18グリッドSE区に位置する。長径57cm、短径46cmを測り、検出面、底面ともに不整な円形状を呈する土坑である。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは13cmを測る。埋土中から甕(1)が出土した。(1)は、外反する口縁部の上端を欠損し、下端は横方向に突出している。口縁部内外面ともにミガキ調整で、頸部以下はケズリ調整後ミガキ調整を加えている。

SK260 (第104図・図版30)

国道2区B21グリッドNW区に位置する。長径1.2m、短径53cmを測る土坑である。検出面、底面ともに長楕円形を呈する。底面は概ね平坦で、検出面からの深さは最大22cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土中には10cm前後の礫が混入しており、南東側では25cm前後の角礫が2個、立位で検出された。ただし、底面からは浮いた状態である。遺物は、埋土中から甕(1)、ほぼ中央部の底面直上より中手足骨製で断面三角の骨鏝(2)、中央部やや北西側の底面直上で軽石加工品(3)が出土している。(1)は外反する口縁部で、端面上端は丸く収め、下端は横方向に突出させている。口縁部内外面はヨコナデ調整、胴部外面にはハケ状工具による波状文が施され、胴部内面はケズリ調整である。

SK261 (第105図)

国道2区B20グリッドNW区の北西隅に位置する。長軸1.48m、短軸89cmを測る土坑である。北側の短辺は弧状を描き、それ以外の外形は直線的である。検出面、底面ともに隅丸長方形を呈する。底面は、北側でやや傾斜し、平坦面へと続く。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは21cmを測る。埋土は3層に分層できたが、灰褐色系の粘質土を基本とする。埋土中には、礫や木片が混入している。

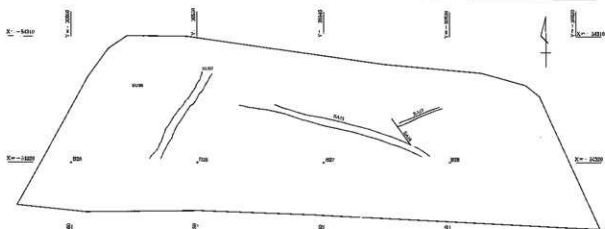
埋土中からは、甕の口縁部片(1、2)、底部片(3)が出土している。(1)は、外反する口縁部で、端面上端は丸く収め、下端は横方向に突出させている。口縁部内外面はヨコナデ調整、胴部外面はハケ調整後ハケ状工具による波状文が施され、胴部内面はケズリ調整である。

SK262 (第106図・図版28)

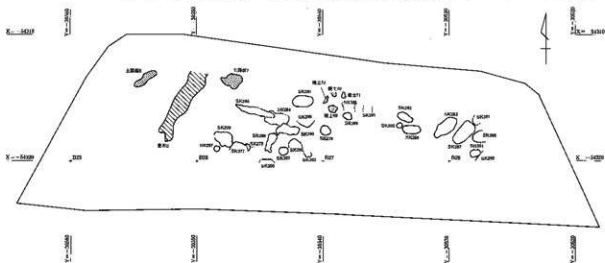
国道2区C18グリッドSE区からI9グリッドSW区にわたって位置する。遺構北側が排水溝で切られているが、ほぼ円形状を呈すると思われる。検出した範囲では径78.5cm、深さ4cmを測るが、上層断面から復元すると深



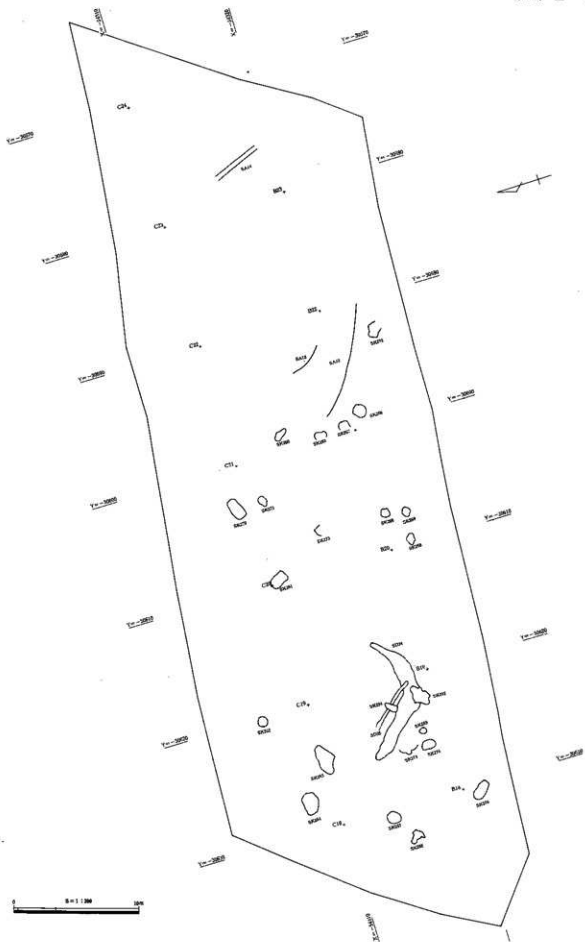
第97图 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭 1区遺構配置圖



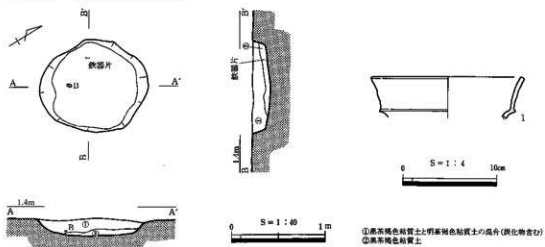
第98图 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭 3区遺構配置圖①



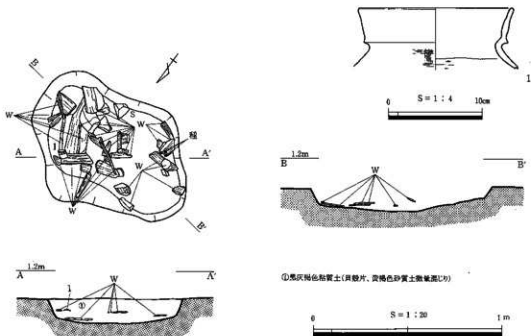
第99图 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭 3区遺構配置圖②



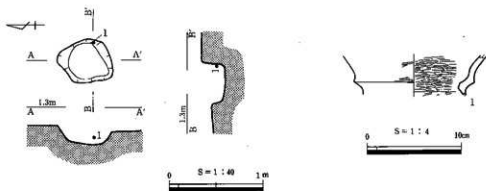
第100図 弥生時代後期末～古墳時代前期初環2区遺構配置図



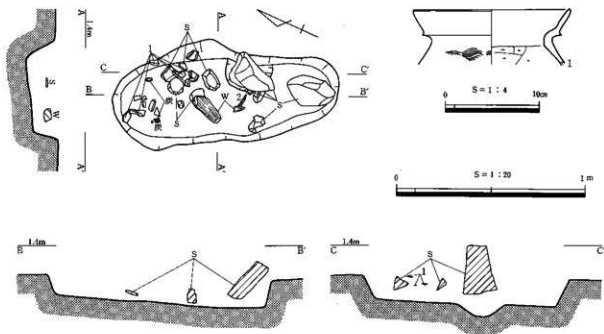
第101図 SK257及び出土遺物



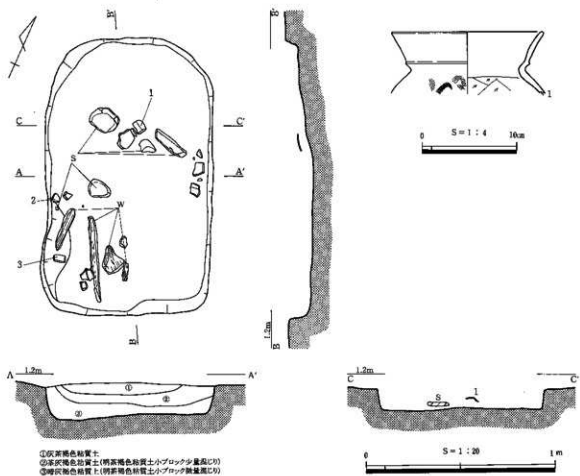
第102図 SK258及び出土遺物



第103図 SK259及び出土遺物



第104図 SK 260及び出土遺物



第105図 SK 261及び出土遺物

さ17.8cmとなる。底面は南西側がやや低くなる。埋土は4層からなり、炭化物を含む黒褐色系の粘質土を基本としている。遺物は南半部にやや集中し、主に①層中から出土している。出土レベルに幅があるが、相互に時期的な隔たりはない。甕(1、2)と高坏と思われる脚部(3)が出土している。(1)、(2)は、ともに外反する口縁部で、端面上端を細く丸く収め、下端はやや斜め下方に突出する。(2)の方が小型である。ともに口縁部内外面はヨコナデ調整で、胴部内面はケズリ調整である。

SK263 (第107図)

国道2区B18グリッドからC18グリッドにかけて位置する。長軸2.39m、短軸1.38m、深さは11cmを測る不整形の土坑である。断面形は皿状を呈する。埋土は黒色粘質土が主体であり、加工木や礫の混入がみられる。遺物は全て底面から浮いており、遺構前面に散らばるような印象である。埋土中から甕(1)、小型の甕(2)、土玉3点(3～5)、軽石加工品(6)が検出された。(1)は、外反する口縁部で、端面上端を丸く収め、下端は横方向に突出する。口縁部内外面はヨコナデ調整である。胴部は、やや肩の張る形態で、外面ハケ調整にハケ状工具による平行沈線と波状文が施される。内面はケズリ調整である。

SK264 (第108図・図版28)

国道2区C18グリッドSW区に位置する。北東部でSK200を切っている。長軸1.72m、短軸1.21mで検出面、底面ともに隅丸長方形を呈する土坑である。底面は平坦で、断面逆台形状を呈し、検出面からの深さは19.2cmを測る。埋土は2層に分層でき、黒色粘質土が主体である。遺物は、土器片や獣骨が遺構内に拡散しており、全て底面から浮いた位置で出土している。埋土中から甕(1、2、3)、蓋のつまみ部(4)が出土している。

(1)～(3)は、いずれも外反する口縁部で、端面上端を丸く収め、下端は横方向に突出する。口縁部内外面はヨコナデ調整である。(1)は肩が下がる器形で、(2)はやや肩が張り、(3)は寸が詰まって最大径が胴部中位にくる器形となる。いずれも胴部外面ハケ調整後施文し、胴部内面はケズリ調整である。(1)はハケ状工具による平行沈線が走り、(2)はハケ状工具による平行沈線と押し引き気味の連続刺突文が施される。(3)はハケ状工具による平行沈線と波状文が走る。

SK265 (第109図)

国道2区B17グリッドSE区からNE区に位置する不整形な土坑である。北西部はビットで切られている。検出した範囲では長軸90.5cm、短軸72.0cm、深さは6cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土の単層で、木片を含んでいる。埋土上層付近から甕の口縁部(1)が出土している。(1)は、外反する口縁部で、端面上端を細く丸く収め、下端はやや斜め下方に突出する。口縁部内外面はヨコナデ調整で、胴部内面はケズリ調整である。

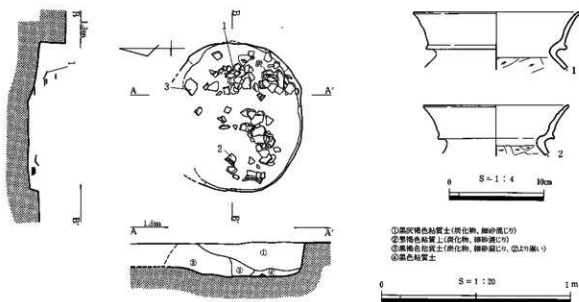
SK266 (第110図・図版29)

国道2区A21グリッドNW区に位置する。長径1.15m、短径95.5cmを測る検出面、底面ともにほぼ円形の土坑である。底面は平坦で、検出面からの深さは11.1cmを測り、断面逆台形状を呈する。埋土は4層に分層できたが、黒灰褐色土を基本とし、下層は砂が卓越する。埋土中には礫、炭化材及び獣骨が混入しており、土器片が散らばった状態で検出された。遺物の出土レベルは底面近くから埋土上層まで幅がある。中央部の底面直上と東側の埋土下層からは甕(1、2)が出土している。

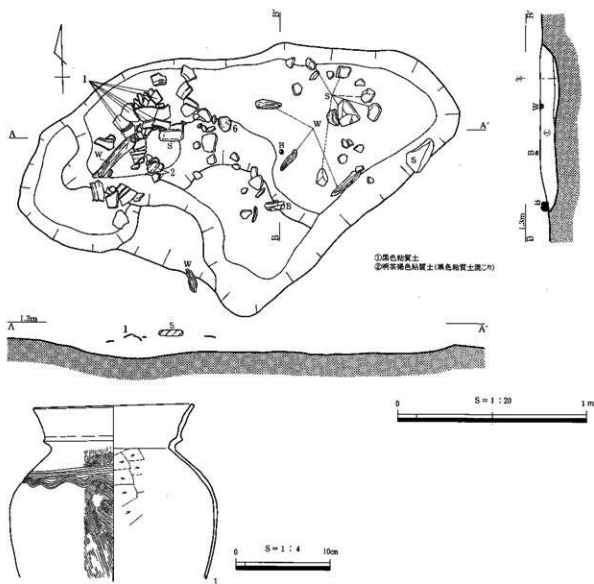
(1)、(2)は、ともに外反する口縁部で、端面上端を細く丸く収め、下端は横方向に突出する。ともに口縁部内外面はヨコナデ調整で、胴部外面はハケ調整、胴部内面はケズリ調整である。(2)は、胴部外面にハケ状工具による波状文が1周以上巡る。

SK267 (第111図)

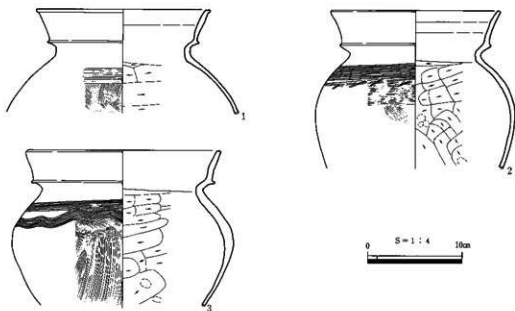
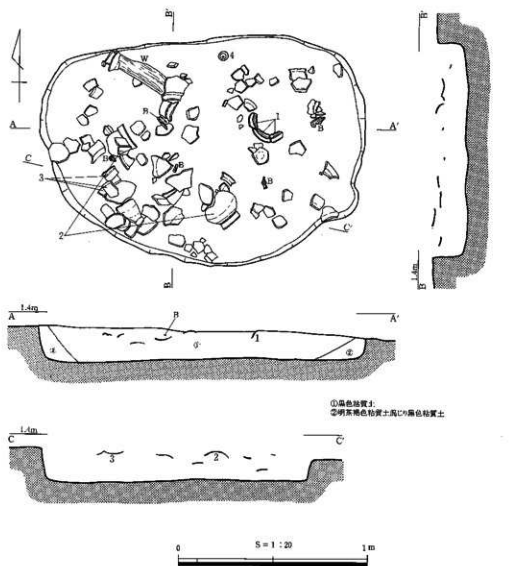
国道2区B21グリッドSW区に位置する。遺構の西側がトレンチで切られているため全体の規模は不明であるが、長径92.8cm、短径75cm程度のはほぼ円形の土坑と思われる。検出面からの深さは10.5cmで、断面は北側に緩やかな立ち上がりとなる逆台形状を呈する。埋土は黒灰褐色粘質土を基本とし、断面中央部にはブロック状に貝混り層が堆積する。木片数点が底面近くで出土しており、①層と②層を区切るように横たわっているものもある。埋土中から器台(1)が出土しており、受け部内外面にミガキ調整を施し、脚部内面をケズリ調整している。



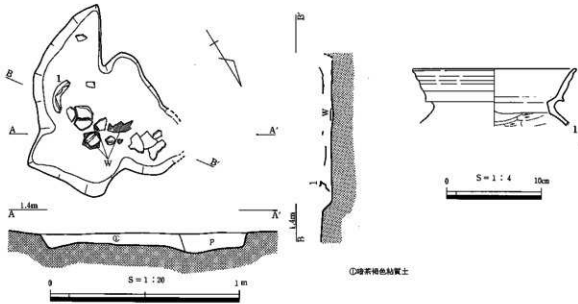
第106図 SK 262及び出土遺物



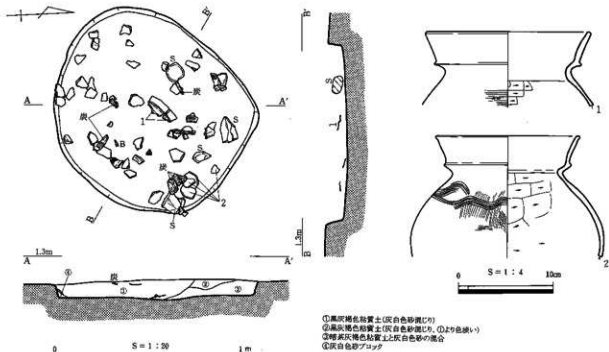
第107図 SK 263及び出土遺物



第108図 SK264及び出土遺物



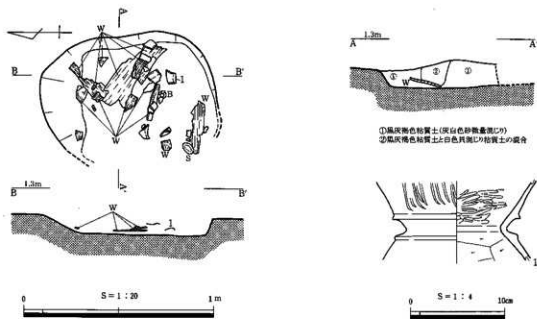
第109図 SK265及び出土遺物



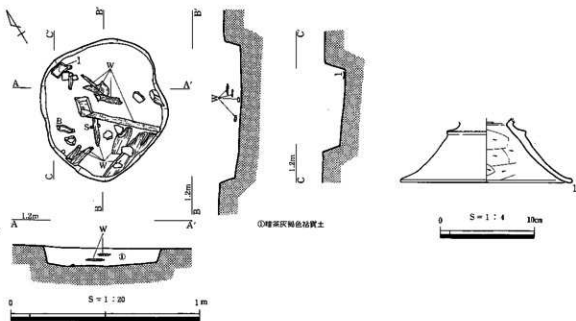
第110図 SK266及び出土遺物

SK268 (第112図・図版29)

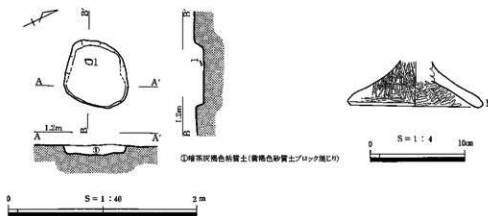
国道2区A20グリッドNW区に位置する。長径70.0cm、短径67.2cmを測り、検出面、底面ともにほぼ円形を呈する土坑である。底面は平坦で、検出面からの深さは11.8cmを測り、断面逆台形状を呈する。埋土は暗茶灰褐色土の単層で、木片や獣骨が混入している。遺物は、北側隅の底面直上から器台脚部(1)が出土している。(1)は、筒部内面をミガキ調整し、脚部内面をケズリ調整している。筒部のあまり縮まらない形態である。



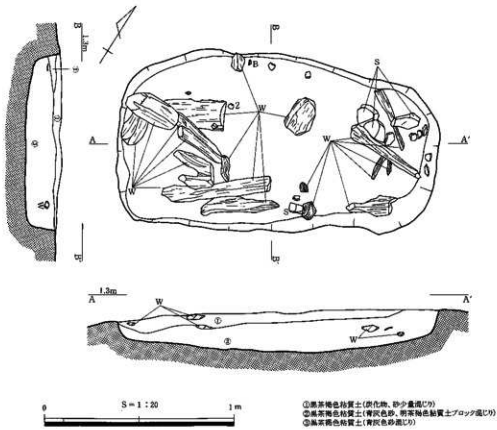
第111図 SK 267及び出土遺物



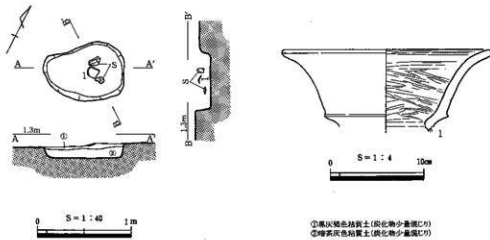
第112図 SK 268及び出土遺物



第113図 SK 269及び出土遺物



第114図 SK 270及び出土遺物



第115図 SK 271及び出土遺物

SK269 (第113図)

国道2区A20グリッドNW区に位置する。長軸79.5cm、短軸69.5cmを測り、検出面、底面とも不整形の土坑である。検出面からの深さは10.5cmで、断面逆台形状を呈する。埋土は暗茶灰褐色粘質土の単層である。遺物は、東側の底面から3cm程浮いた位置で器台あるいは高坏の脚部(1)が出土している。内外面ともに密にミガキ調整している。

SK270 (第114図・図版30)

国道2区C20グリッドSE区に位置する。長軸1.71m、短軸93.5cmを測り、検出面、底面ともに隅丸長方形形状を呈する土坑である。検出面からの深さは22.5cmで断面逆台形状を呈する。埋土は黒茶褐色粘質土が3層に細分され、①層には炭化物が少量混じる。埋土中には、加工木片や自然木片、自然礫が混入している。遺物は、埋土中から壺(1)、土玉(2)が出土している。(1)は、外反する口縁部で、端面上端を細く収め、下端は斜め下方に突出する。口縁部内面はヨコナデされるが、一部にミガキ調整が残る。胴部外面にはハケ状工具による平行沈線が走り、内面はケズリ調整である。

SK271 (第115図)

国道2区B20グリッドNE区に位置する。長径85.5cm、短径59.5cmを測り、検出面、底面とも不整形な楕円形状を呈する土坑である。底面は平坦で、検出面からの深さは15.5cm、断面逆台形状を呈する。埋土は2層で、いずれにも炭化物が少量混じる。遺物は、遺構中央部の埋土上面から器台受部(1)が出土している。受部内面はミガキ調整で、筒部内面をケズリ調整している。

SK272 (第116図・図版31)

国道2区A21グリッドNE区に位置する。南東側は排水溝で切られており、検出面、底面ともに不整形な形状を呈する。検出した範囲では、長軸1.25m以上、短軸65.5cm、検出面からの深さは19.5cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面逆台形を呈する。埋土は3層に分層でき、黒色系の粘質土を基本とする。埋土中には木片が混入している。南側の埋土上層より壺の胴部(1)、東側隅の埋土上層より壺の口縁部(2)、骨織(3)が出土している。また、中央部やや東側の底面直上からは2ヶ所で炭化米が検出された。

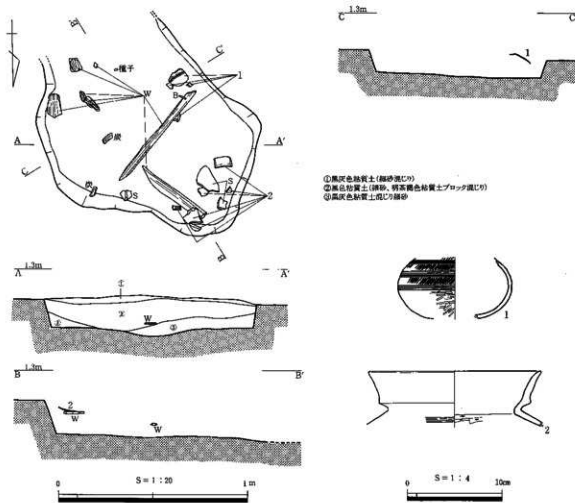
(1)は、寸の詰まった球形の胴部を持つ壺で、外面を平滑になるまでミガキ調整しており、2段の貝殻腹縁による連続刺突文を、3、4条の沈線3ヶ所で仕切っている。(2)は、外反する口縁部で、端面上端を細く丸く収め、下端は横方向にやや突出させる。口縁部内外面はヨコナデされる。胴部外面はハケ調整され、内面はケズリ調整である。

SK273 (第117図)

国道2区B20グリッドNW区に位置する。南側をトレンチに切れ、全体の形状は確認できなかったが、円形を志向する形状と思われる。検出した範囲では最大幅83.5cm、検出面からの深さ11.5cmを測る。底面は東側方向にやや傾斜するが平坦である。断面はほぼ逆台形状を呈し、埋土は黒灰褐色土の単層である。土器片は全体に底面から浮いて出土しており、北側の埋土上層からは壺(1)が出土している。(1)は、外傾する口縁部で、端面上端を丸く収め、下端は横方向に突出させる。口縁部内外面は、ヨコナデされている。

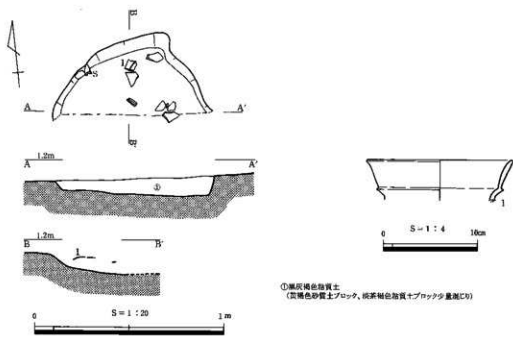
SK274 (第118図・図版31)

国道2区B18グリッドSW区に位置する。南側には同時期のSK275が近接する。東側はトレンチによって切られ、全体の形状は確認できなかった。検出した範囲では、長軸1.61m、深さは最大で19.5cmを測り、西側に張り出し部分のある不整形な土坑である。埋土は、暗灰褐色粘質土が僅かな混入物の差異によって3層に分層され、埋土中位から下層にかけて加工木片、自然木片がまとめて検出された。遺物は、南西隅で埋土下層中から器台受部(1)の破片が拡散し検出されたほか、埋土中中程からは低坏脚の脚部(2)が出土している。(1)は内外面ミガキ調整、(2)は内面をミガキ調整する。



- ①黄灰色粘質土(細砂混じり)
- ②黄灰色粘質土(細砂、黄褐色粘質土ブロック混じり)
- ③黄灰色粘質土(粗じり層砂)

第116図 SK 272及び出土遺物



- ①黄灰色粘質土
(黄褐色粘質土ブロック、黄褐色粘質土ブロック少量混じり)

第117図 SK 273及び出土遺物

SK275 (第119図・図版32)

国道2区B18グリッドSW区に位置する。長軸1.12m、短軸70.5cmを測る検出面、底面ともやや不整な隅丸方形状を呈する土坑である。北側には同時期とみなされるSK274が近接する。底面はテラス状の平坦面を経た後、中央付近でピット状に落ち込む。よって、断面形は概ね逆台形状を呈すが、中央部分が更に逆台形状に突出する形状となる。検出面からテラス状の平坦面までの深さは28cmで、最深部までさらに14cm深くなる。埋土は暗茶褐色粘質土が砂の混入の有無により2層に分層される。ピット状の落ち込み部分より上位の②層中からは、自然礫、加工木片がややまとまりをもって出土している。これらより下層から土器片が出土しており、甕(2)、器台(3)のほか、中央落ち込み部の埋土中から甕(1)が検出された。(1)は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端を丸く収め、下端はやや斜め下方向に突出させている。肩部は、外面ハケ調整後ハケ状工具による波状文を施し、内面はケズリ調整する。

SK276 (第120図・図版31)

国道2区A17グリッドNE区からA18グリッドNW区にまたがる位置にある。長軸1.57m、短軸83.5cmを測り、検出面、底面ともに隅丸長方形形状を呈する土坑である。検出面からの深さは24cmで、断面逆台形を呈する。埋土は、暗灰茶褐色粘質土が微量な混入物の差によって3層に分層され、①層には炭化物が混じっている。遺物は、土器が東側に片寄っており、①層上面から③層にかけて斜方向に流れ込んだような出土状況である。中央部からやや西寄りで、加工木片が③層の底面付近からまとまりをもって出土しており、土器に先行する埋積という印象である。土器は、甕(1～6)、低脚杯(7)が出土している。(1)は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端を丸く収め、下端は横方向に突出させている。肩部は、外面ハケ調整後ハケ状工具による波状文を施し、内面はケズリ調整する。

SK277 (第121図)

国道3区B26グリッドSW区に位置する。東側はSK279の、西側はSK299の上層にあたる。南部が調査区外へ広がるため全体の形状、規模は不明である。検出した範囲では長軸残存1.22m、検出面からの深さは最大で14.5cmを測る土坑である。底面には起伏がある。埋土は暗茶褐色砂混じり粘質土の単層で、炭化物が多量に混じっていた。遺構西側の埋土中から、甕の頸部から肩部にかけての土器片(1)が出土している。(1)は、外面ハケ調整後波状文を施し、内面はケズリ調整である。

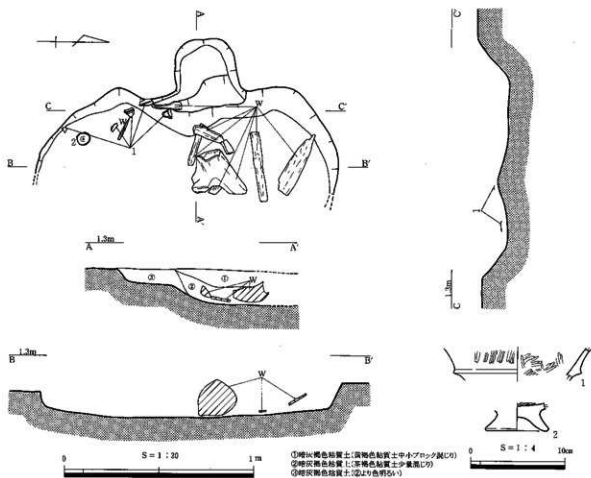
SK278 (第122図・図版32)

国道3区B26グリッドSE区からB27グリッドSW区にまたがって位置する。長径77.5cm、短径69.5cmを測る検出面、底面ともに楕円形を呈する土坑である。底面は平坦で、検出面からの深さは12.5cmを測る。断面形は逆台形状を呈するが、西側の立ち上がりやや緩やかである。埋土は暗茶褐色粘質土と灰茶褐色砂の混土を基本とし、炭化物の有無により2層に細分できた。遺物はほぼ遺構中央部から北側にかけて出土しており、検出面上面では甕(1)と器台受部(1)の破片が出土している。中央部底面直上からは、長さ12cm、幅6cmの礫が1点検出された。

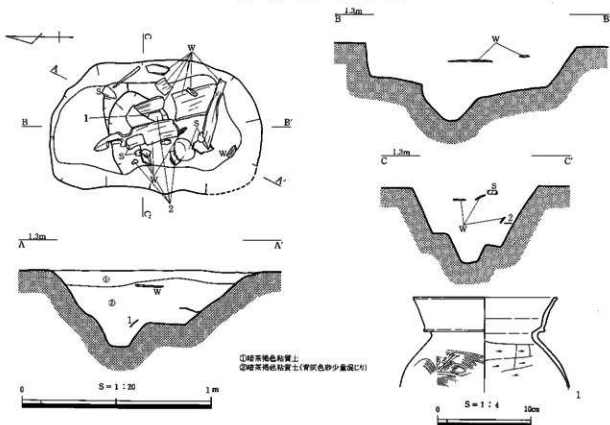
(1)は、外反する口縁部で、端面上端を細く丸く収め、下端は横方向に突出させる。口縁部外面には、貝殻腹縁による押し引きの波状文を施し、口縁部内面はミガキ調整し、端部をヨコナデして消している。肩部内面はケズリ調整後、ミガキ調整を加えている。(2)は外反する受部で、内面にミガキ調整を施している。

SK279 (第123図・図版33)

国道3区B26グリッドSW区に位置する。長軸49.0cm、短軸40.5cmを測る検出面、底面ともにやや不整な隅丸方形を呈する土坑である。東側はSK277の下層にあたる。底面は平坦だが、南側にやや下がる。検出面からの深さは5.5cmで断面逆台形状を呈する。遺物は遺構内に拡散しており、底面直上から埋土上面にかけて甕(1、2)が出土している。(1)は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端は平坦で、下端は横方向に突出している。肩部は、外面ハケ調整後ハケ状工具による波状文を施し、内面はケズリ調整する。

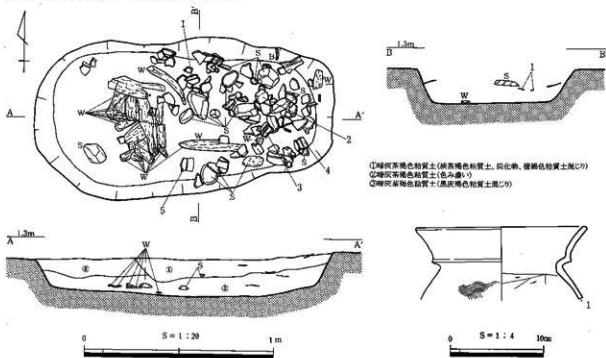


第118図 SK 274及び出土遺物



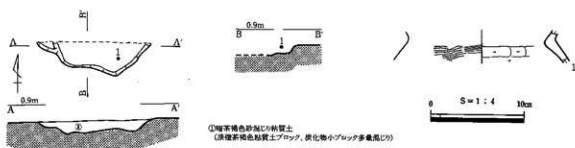
第119図 SK 275及び出土遺物

第4章 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構



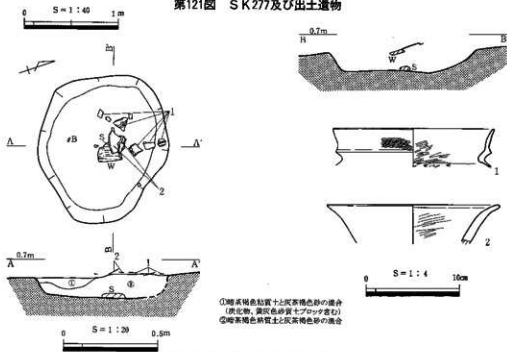
- ①暗灰茶褐色粘質土 (暗茶褐色粘質土、炭化物、暗褐色粘質土混じり)
- ②暗灰茶褐色粘質土 (色み濃い)
- ③暗灰茶褐色粘質土 (黒炭褐色粘質土混じり)

第120図 SK 276及び出土遺物



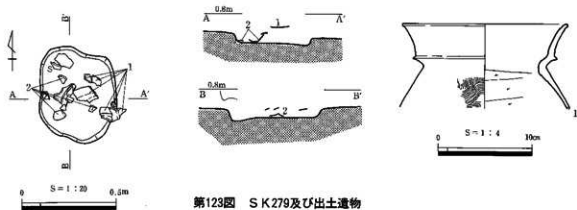
- ①暗茶褐色粘質土の粘質土
(濃茶褐色粘質土ブロック、炭化物小ブロック多量混じり)

第121図 SK 277及び出土遺物

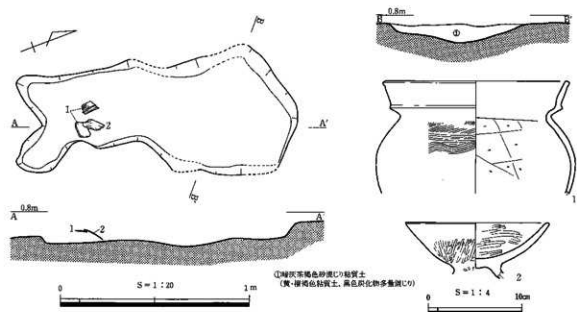


- ①暗茶褐色粘質土と灰茶褐色砂の混合
(炭化物、黄褐色砂質土ブロック含む)
- ②暗茶褐色粘質土と灰茶褐色砂の混合

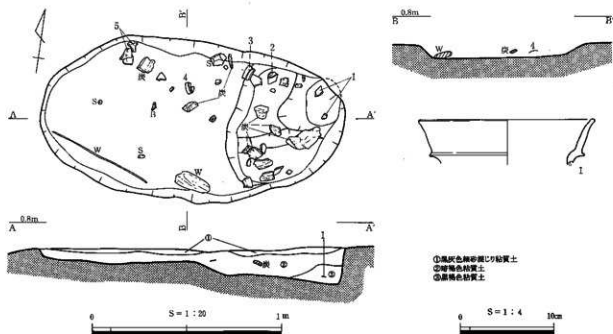
第122図 SK 278及び出土遺物



第123図 SK 279及び出土遺物



第124図 SK 280及び出土遺物



第125図 SK 281及び出土遺物

S K 280 (第124図)

国道3区B26グリッドSE区に位置する。長軸1.35m、短軸42.5cm、検出面からの深さ12.5cmを測る検出面、底面ともに不整形の土坑である。埋土は暗灰褐色砂混じり粘質土の単層であり、炭化物が多量に混じっている。遺物は南側から出土しており、甕(1)と低脚杯の坏部(2)が折り重なるように出土した。

(1)は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端は平坦で、下端は横方向に突出し、鈍い稜をなす。胴部は肩が張り、外面ハケ調整後ハケ状工具による波状文を施し、内面はケズリ調整する。(2)は、口徑に対し体部の深い坏部で、外面ハケ調整後ミガキ調整し、内面ミガキ調整を施す。

S K 281 (第125図・図版33)

国道3区B26グリッドSE区からNE区にまたがって位置する。長径1.61m、短径84.5cmを測る長楕円形状を呈する土坑である。底面は、西側から中央部まで深さ7cm程度の比較的平坦な面を経た後、東側に向かって落ち込む。東側では深さ最大19cmを測る。埋土は3層に分けられ暗褐色粘質土を主体とする。遺物は、東側の落ち込み部下層の③層から甕の口縁部(1)が、北側の埋土中程で甕の破片(2～5)が拡散し、出土している。炭化米、炭化物が東側の底面上を中心に検出されたほか、不明鉄器片も東側落ち込み部の埋土中程から出土している。(1)は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端は細く丸く収め、下端は斜め下方に突出する。

S K 282 (第126図・図版33)

国道3区B27グリッドSE区に位置する。長径1.18m、短径54.8cmを測る長楕円形状を呈する土坑である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは4cm、断面形は逆台形状を呈する。南側には同時期のS K 288が近接している。埋土は2層に分層される。遺物は概ね①層中からの出土で、土器片が散乱した状態である。南東部の埋土中程から甕の口縁部片(1)を検出した。(1)は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端は丸く収め、下端は横方向に突出する。

S K 283 (第127図・図版34)

国道3区B27グリッドSE区からB28グリッドSW区にまたがって位置する。長径2.16m、短径92.2cmを測る楕円形状を呈する土坑である。南西側に深さ4cmの平坦な段があり、これよりさらに19cm深まる落ち込みが続く。再び3cm高くなって北東側の平坦面となる。埋土は2層に分層でき、炭化物混じりの②層が主体である。②層上面では炭化物の広がりが検出され、埋積途上で火焚き行為が想定される。遺物は底面から浮いた状態で出土しており、南東側の落ち込み部の埋土中からは甕(1)が、また中央部や北東からは器台受部(2)が散乱した状態で出土している。北東側の埋土中程からも甕(3)が出土した。

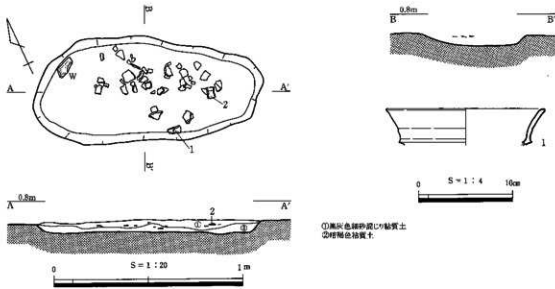
(1)は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整であるが、外面に波状文が巡る。端面上端は平坦で、下端は横方向に突出する。外面ハケ調整後ハケ状工具による波状文と平行沈線を施し、内面はケズリ調整する。(2)は、口縁端部が強く外反する受部で、内面ミガキ調整を施す。

S K 284 (第128図・図版37)

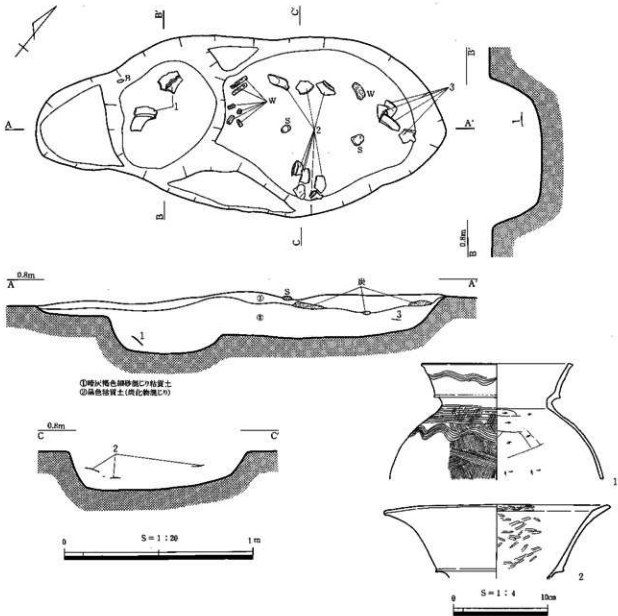
国道3区B26グリッドSE区に位置する。東南隅はS K 295の下層、南側はS K 235の上層にあたる。東側をS K 285で切られているが、検出面・底面ともに不整な隅丸長方形を呈する土坑である。長軸1.7m、短軸87cmで、検出面からの深さは11.5cmを測り、断面は逆台形状を呈する。埋土は暗灰色細砂混じり粘質土の単層で、北側の底面上で炭化物の集積が検出された。遺物は出土していない。

S K 285 (第128図・図版34)

国道3区B26グリッドSW区からSE区にまたがって位置する。長軸3.19m、短軸51.5cmを測る、東西に細長い土坑である。遺構東側ではS K 284を切っている。底面は連続面ではなく、東側ではテラス状の平坦面をみたあと落ち込み、西側に向かって長さ1.3m、幅20cm程度の細長い平坦面が伸びる。その西側にはビット状の落ち込みがあり、更に深くなっている。検出面からの深さは最大で27.5cmを測る。埋土は2層に分層でき、暗灰色粘質土を基本とする。遺物は埋土中①層から出土しており、甕(1、2)、骨製の針状刺突具(3)、不明鉄器片、



第126図 SK 282及び出土遺物



第127図 SK 283及び出土遺物

器、木片などが検出されている。(1)は、外反する口縁部で、外面ヨコナデ調整、内面ミガキ調整されているが、ミガキを部分的にナデ消している。端面上端は細く丸く収め、下端は横方向に突出させる。(2)は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端は丸く収め、下端は横方向に突出し、鈍い稜となる。頸部外面には貝殻敷縁による押し引き連続刺突が施され、内面はケズリ調整している。

SK286 (第129図・図版34)

国道3区B28グリッドSW区に位置する。東側が調査区外に広がるため全体の形状・規模は不明である。検出した範囲では最大幅89.5cm、深さ18.2cmを測り、本来楕円形状を呈するものと思われる。壁面の立ち上がりは、概ね緩やかである。埋土は、黒茶褐色砂混じり粘質土の単層である。遺物は埋土中から壺(1)が出土している。(1)は、口縁部がやや外反気味に長く立ち上がり、口縁下端が横方向に突出する。口縁部内外面ともにナデ調整で、肩部内面はケズリ調整している。

SK287 (第130図・図版35)

国道3区B28グリッドSW区に位置する。長径1.96m、短径1mを測り、検出面、底面ともに隅丸長方形的な楕円形を呈する上坑である。底面は、中央やや北で僅かな落ち込みがあるものの、ほぼ平坦である。検出面からの深さは25.5cmで、断面逆台形状を呈する。埋土は2層に分層され、暗灰色系の粘質土を基本とし、①層には炭化物を多量に含んでいる。遺物の出土レベルは底面近くから埋土上層まで幅があり、破砕された土器片が加工木などを交えて、遺構全体に拡散している。検出された土器は、壺(1、5～7)、甕(2、3、8～15)、高坏(16)、器台(4、17)と器種が豊富で、個体数も他の土坑に較べて多いと言える。このほか、土玉(18、19)や勾玉状に加工した軽石製品(20)が出土している。

(1)は、外傾気味に直立する単純口縁部で、肩部外面に波状文が巡る。内面はケズリ調整をナデ消している。(2)は、外反する口縁部で、端部を丸く収め、下端は突出しない。(3)は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端は丸く収め、下端は横方向に突出する。胴部は肩が張らず、外面ハケ調整後ハケ状工具による平行沈線と波状文を施し、内面はケズリ調整する。底部は尖り気味の丸底である。(4)は、鼓形の器台で、口縁端部が平坦面をなす。受部内面ミガキ調整で、脚部内面はケズリ調整する。

SK288 (第131図・図版36)

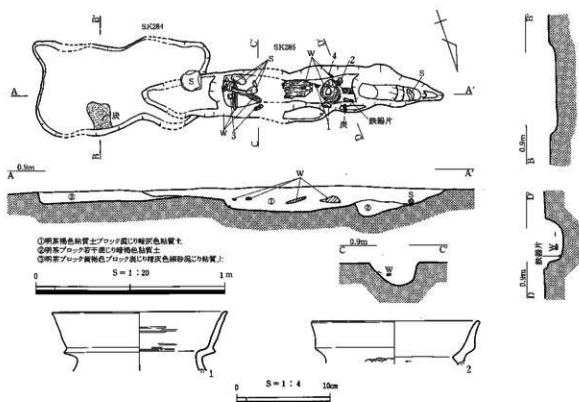
国道3区B27グリッドSE区に位置する。長径1.41m、短径63.5cmを測り、検出面、底面ともに長楕円形状を呈する土坑である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面皿状を呈する。検出面からの深さは最大25cmを測る。埋土は黒色砂混じり粘質土が混入物の差によって2層に分層され、①層には炭化物が多量に含まれていた。遺物は、概ね埋土中程から上層にかけて出土しており、東側では加工木片や角礫が検出され、西側では20cm長の角礫や加工木片に混じって甕(1)が破砕された状態で出土している。(1)は、直立する口縁部が端部で外傾するもので、下端は突出しない。

SK289 (第132図)

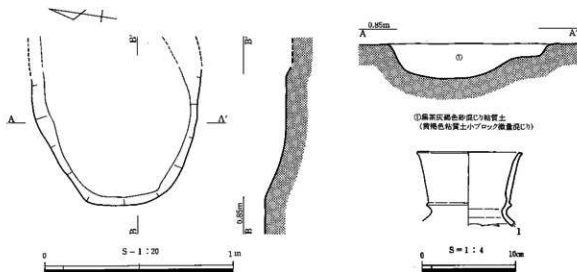
国道3区B27グリッドSW区に位置する。土器溜まり状に検出したが、本来は上坑を伴うものであったと思われる。土器は、ほぼ50cm四方の範囲で折り重なるように検出され、出土レベルに幅がある。甕(1、3～5)、器台(2)が出土している。(1)は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端は尖り気味に収め、下端は突出しない。胴部は肩が張らず、外面ハケ調整後ハケ状工具による平行沈線と波状文を施し、内面はケズリ調整する。(2)は、鼓形の器台で、外面緻密なミガキ調整、内面ケズリ調整で、口縁端部内面はヨコナデし、筒部は内外面ともにナデ調整である。

SK290 (第133図)

国道3区B28グリッドSW区に位置する土坑である。南側と東側を排水溝で切られている。検出面からの深さは5.5cmを測り、底面は調査区外に向かって緩やかに上昇している。遺物は埋土中程で甕の口縁部(1)が出土している。(1)は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端は尖り気味に収め、下端は突出しない。頸部内面はケズリ調整する。



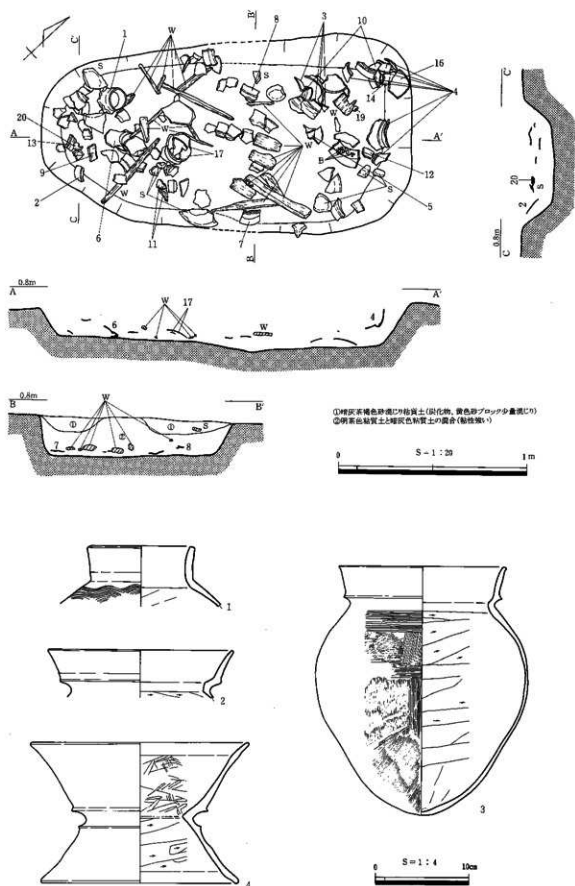
第128図 SK 284、285及び出土遺物



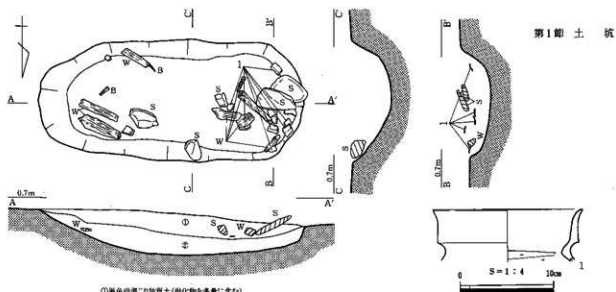
第129図 SK 286及び出土遺物

SK291 (第134図)

図3区B27グリッドSW区に位置する土坑である。十層断面観察用のベルト中から検出されたため、北側と南側の形状、規模は不明であるが、72cmの幅で検出した。壁面の立ち上がりは西側で検出面から緩やかに傾斜したあと、更に10cm程度落ち込み幅30cm程度の平坦な底面へと続く。深さは最大で19.8cmを測る。埋土は4層に分けられ、暗灰茶褐色系及び黒灰色系の砂泥じり粘質土を基本とする。①層には炭化物が少量混じり、④層中底面直上から、人頭大の礫が検出されている。遺物は遺構中央部からやや東側に片寄り、壺(1)が破砕された

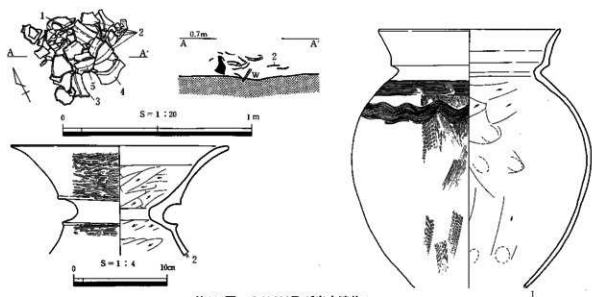


第130図 SK287及び出土遺物

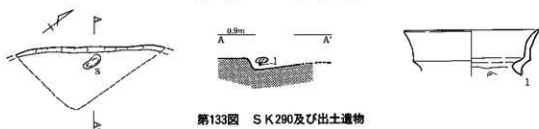


- ① 黒色の凝じり粘質土(灰化物を多量に含む)
 ② 赤色の凝じり粘質土(①より砂を多く含む)

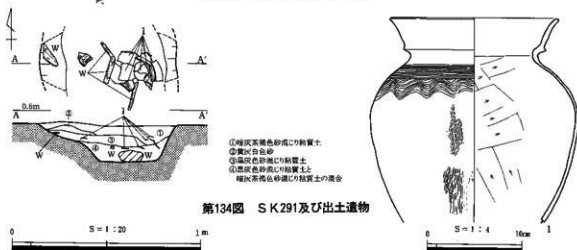
第131図 SK 288及び出土遺物



第132図 SK 289及び出土遺物



第133図 SK 290及び出土遺物



- ① 緑灰色褐色砂凝じり粘質土
 ② 灰白色砂
 ③ 黒灰色砂凝じり粘質土
 ④ 赤褐色砂凝じり粘質土上
 種別茶褐色砂凝じり粘質土の混入

第134図 SK 291及び出土遺物

状態で埋土中程から検出された。(1)は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端は細く丸く収め、下端は横方向に突出する。胴部は肩が張り、外面ハケ調整後ハケ状工具による平行沈線と波状文を施し、内面はケズリ調整する。

S K 292 (第135図)

2区B18グリッドSE区に位置する土坑である。北東側でSD34を切っている。土坑の上方には2m四方ほどの範囲でナスビ形柄鉢(1)(2)(3)、栓形建築部材(4)(5)、板材、角材、自然木などが集中しており、その下方にテラス状の浅い段が付随する不整な長楕円形状の上坑が位置する。木器溜りの検出レベルは1.1～1.2m、土坑検出面の標高は1.1mである。土坑は長径1.94m、短径1.1m、テラス部分の深さは約10cm、土坑最深部は60cmを測る。底面は東側に向かって緩やかに傾斜している。土坑の北東側にはピット状の落ち込みがみられ、検出面からの深さは45cmを測る。埋土は非常に水分を多く含んだ灰茶褐色粘質土で、切りあい関係にあるSD34や周辺の土坑の埋土とは土質に著しい差異がある。完掘後、土坑底面からの湧水を確認しており、井戸として使用された可能性を考える。

S K 293 (第136図)

国道2区B21グリッドSW区に位置する土坑である。西側をトレンチで切られており、全体の形状は不明であるが、長軸49.7cmの不整な楕円形状を呈すると思われる。壁面の立ち上がりは南側でやや急となり、底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは9.5cmで、不整な逆台形状の断面形を持つ。埋土は暗茶褐色粘質土の単層で、木片を含む。遺物は出土していない。

S K 294 (第137図)

国道2区B18グリッドSE区に位置し、SD34、SD35を切っている。長径1.19m、短径48.5cmを測り、検出面、底面ともに不整な楕円形状を呈する土坑である。底面は平坦で、断面逆台形状を呈する。検出面からの深さは19.5cmを測る。埋土は暗茶灰褐色土の単層で、炭化物が混じる。遺物は出土しなかった。

S K 295 (第138図・図版35)

国道3区B26グリッドSE区に位置し、SK284、SA15の上層にあたる。長軸1.71m、短軸59.5cmを測る不整形な土坑である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは15.5cm、断面逆台形状を呈する。埋土は暗茶褐色砂混じり粘質土が2層に分層され、①層には炭化物が多量に混じる。遺物は出土していない。

S K 296 (第139図)

国道3区B26グリッドSE区に位置し、SA15の上層にあたる土坑である。南側は、排水溝に切られている。検出した範囲では、幅99.5cm、深さ13.5cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は、暗茶褐色砂混じり粘質土が混入物の差によって4層に分層された。①層には炭化物が多量に混じる。遺物は出土しなかった。

S K 297 (第140図)

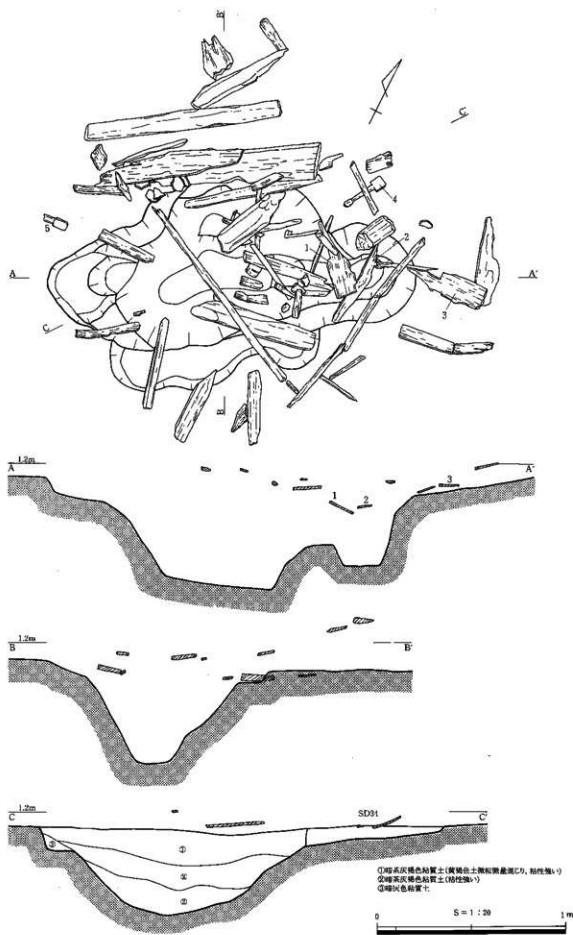
国道3区B26グリッドSW区に位置し、SK241、SA15の上層にあたる。径45cm程の不整な円形状の土坑である。断面皿状を呈し、底面は平坦である。検出面からの深さは4.5cmを測る。遺物は出土していない。

S K 298 (第141図・図版36)

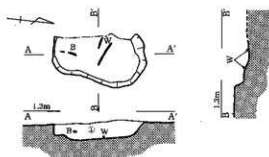
国道3区B26グリッドSE区に位置し、SA15の上層にあたる土坑である。北側はトレンチで切られ、全体の形状・規模は不明である。1.1mの長さで検出し、深さは最大で7.5cmを測る。断面の立ち上がりは比較的緩やかで、底面は平坦である。断面形は逆台形状を呈する。埋土は2層に分層できるが、暗灰色系の粘質土が基本となる。遺物は、中央部の埋土中から壺か甕の頸部(1)、底面近くから鉄器片(2)が出土している。(2)は鋳造鉄斧の破片の可能性もあるものである。

S K 299 (第142図)

国道3区B26グリッドSW区に位置し、SK277の下層、SK236、241、SA15の上層にあたる。長軸1.64m、短軸1.05mを測る検出面、底面ともに不整形な土坑である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは10cm、断面の形状は皿状を呈する。埋土は暗茶褐色砂混じり粘質土の単層であり、炭化物が混じる。小礫が検出されたは

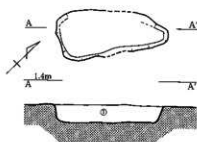


第135圖 SK 292



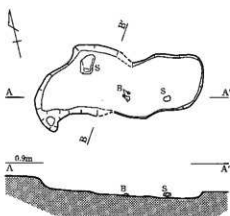
①暗茶褐色粘質土

第136図 SK 293



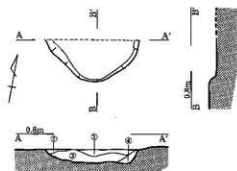
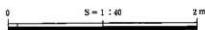
①暗茶褐色粘質土(炭化物混じり)

第137図 SK 294



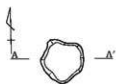
①暗茶褐色砂混じり粘質土(炭化物多量混じり)
②暗茶褐色砂混じり粘質土

第138図 SK 295

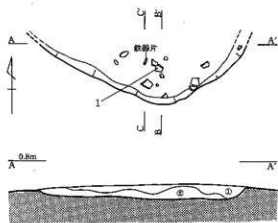


①暗茶褐色砂混じり粘質土(炭化物多量混じり)
②暗茶褐色砂混じり粘質土(やや粘性強)
③暗茶褐色砂混じり粘質土(やや粘性強)
④暗茶褐色砂混じり粘質土(やや粘性強)

第139図 SK 296

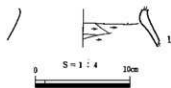
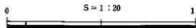


第140図 SK 297



①暗茶褐色砂混じり粘質土
②暗茶褐色粘質土

第141図 SK 298及び出土遺物



かは、遺物は検出されなかった。

SK300 (第143図)

国道3区B26グリッドSE区に位置し、SA15の上層にある土坑である。南側は排水溝に切られているため、全体の形状、規模は不明である。95.5cmの長さで検出した。底面はほぼ平坦で、深さ最大17cmを測り、断面は弧状を呈する。遺物は出土しなかった。

SK301 (第144図)

国道3区B28グリッドSW区に位置し、SA15の上層にあたる土坑である。北側と東側は排水溝に切られているため、底面部分は遺存しておらず、全体の形状、規模は不明である。長さ69.4cmにわたって検出し、深さは最大32.6cmを測る。埋土は3層に分層され、灰茶褐色系の粘質土を基本とする。遺物は出土していない。

SK302 (第145図・図版37)

国道3区B26グリッドSE区に位置し、SA15の上層にあたる。長径69.5cm、短径62cmを測る楕円形状を呈する土坑である。検出面からの深さは最大で17.5cmを測り、底面が傾斜する。埋土は2層に分層される。遺物は出土していない。

SK303 (第146図)

国道3区B26グリッドSE区に位置し、SA15の上層にあたる土坑である。北側は排水溝に切られているため、全体の形状、規模は不明である。50cmの長さにわたって検出し、深さは最大で10.5cmを測る。断面は弧状を呈する。西側の埋土中では、礫が集中的に検出された。遺物は出土していない。

SK304 (第147図)

国道3区B28グリッドSW区に位置し、SA15の上層にあたる。長径80cm、短径59.5cmを測る楕円形状を呈する土坑である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは11.5cm、断面逆台形状を呈する。埋土は黒灰褐色土を基本とし、3層に細分される。遺物は出土していない。

SK305 (第148図・図版37)

国道3区B27グリッドSE区に位置し、SA15の上層にあたる。SK288が南東側に近接する。長径47.3cm、短径38.9cmを測るやや不整な円形状を呈する土坑である。底面は東側が深くなっており、検出面からの深さは19.5cmを測る。埋土は黒色砂混じり粘質土が2層に分層され、①層には炭化物が多量に含まれている。①層中からは加工板材が、②層中からは径14cmほどの平石が検出されたほかは、遺物は出土していない。

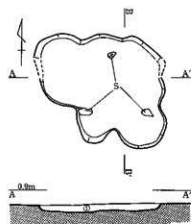
SK306 (第149図)

国道3区B27グリッドSW区に位置する。SA15より上層から掘り込まれている土坑である。土層断面観察用ベルト中から検出されたため、北側と南側の形状は不明である。底面は東側で僅かにテラス状の平坦面をみたあと、西側に向かって6cm程度落ち込む。検出された範囲では最大幅98.6cm、深さ37.5cmを測る。埋土は6層に分層されるが、灰茶褐色砂混じり粘質土と暗灰茶褐色砂混じり粘質土に大別され、礫や炭化物が含まれている。加工板材が埋土中から出土したほかは、遺物は出土していない。

第2節 溝、坑列

SD34 (第150図)

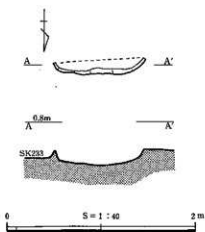
国道2区B18グリッドSE区からB19グリッドSW区にかけてに位置する。中央部や北西側でSK294に、中央部や北東側でSD35に、さらに南側ではSK292に切られている。東西9m、南北6mの範囲で緩やかな「L」字状に伸びる溝状遺構である。全長11mを測る。遺構中央部は最大幅1.6mで、両端に近づくにつれ幅が狭くなっている。底面は平坦で、検出面からの深さは10cmから15cmを測る。埋土は2層に分層され、暗灰褐色粘質土を基本とする。①層には炭化物が混じる。遺物は、北側肩部寄りで高環(1)、器台(2)が検出されたほか、西側底面から土玉(3)が出土している。



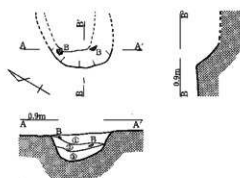
①暗茶褐色砂礫シロ粘質土(褐色粘質土インフロック、炭化物散在シ)



第142図 SK 299

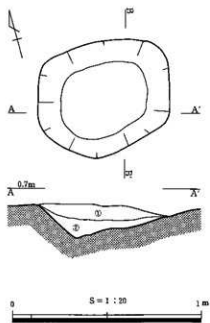


第143図 SK 300



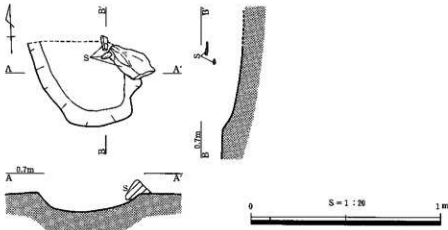
①暗茶褐色砂礫シロ粘質土
②灰茶褐色砂礫シロ粘質土(砂少量)
③暗茶褐色砂礫シロ粘質土(やや色黒)

第144図 SK 301

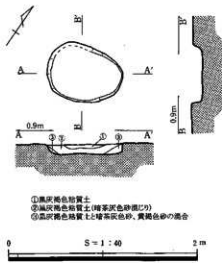


①暗茶褐色粘質土(褐色砂礫シロ粘質土少量混じり)
②暗茶褐色粘質土

第145図 SK 302

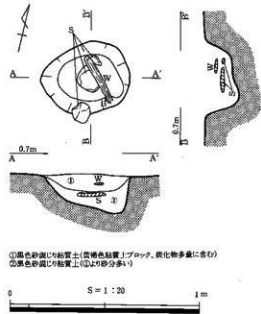


第146図 SK303



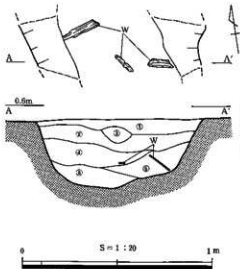
- ①黒灰褐色粘質土
- ②黒灰褐色粘質土(碎茶灰色砂混じり)
- ③黒灰褐色粘質土と碎茶灰色砂、黄褐色砂の混合

第147図 SK304



- ①黒色砂混じり粘質土(炭粉色粘質土ブロック、炭化物多量に含む)
- ②赤色砂混じり粘質土(①より砂が多い)

第148図 SK305



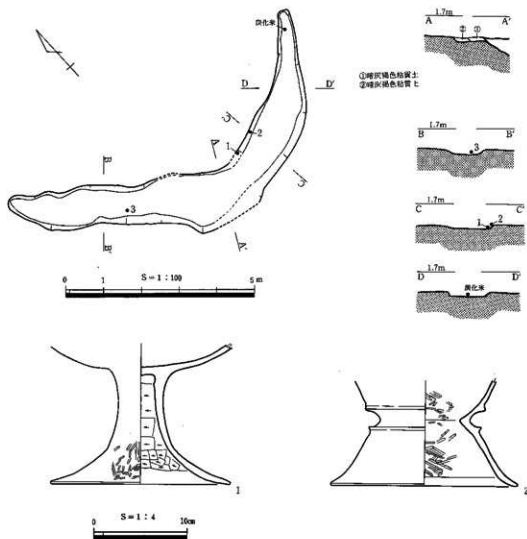
- ①灰茶褐色砂混じり粘質土(黒色炭化物少量混じり)
- ②灰茶褐色砂混じり粘質土(黒色炭化物、黄褐色粘質土小ブロック少量混じり)
- ③灰茶褐色砂混じり粘質土(黒色炭化物、黄褐色粘質土小ブロック、明褐色粘質土ブロック混じり)
- ④灰茶褐色砂混じり粘質土(黒色炭化物、黄褐色粘質土小ブロック、灰色粘質土マブロック混じり)
- ⑤暗灰茶褐色砂混じり粘質土(黒色炭化物少量混じり)
- ⑥暗灰茶褐色砂混じり粘質土(黒色炭化物少量混じり、明褐色粘質土小ブロック少量混じり)

第149図 SK306

(1)は、口径の広い皿形の坏部を有する高坏で、坏部と脚部を接合する円盤充填部分が剥離して遺存していない。脚部外面上方はハケ、ミガキ調整後丁寧にナデ調整しており、下方はミガキ調整が残る。内面はケズリ調整し、端部はナデ調整している。(2)は、鼓形器台で、口径に対し器高の高い器形である。外面ナデ調整で、内面ミガキ調整を施し、底部端部はヨコナデしている。

SD35 (第151図)

国道2区B18グリッドSE区からNE区にかけて位置する。遺構北西隅はSK253と切りあっているため、形



第150図 SD34及び出土遺物



第151図 SD35



第152圖 SA12~14

状は確認できなかったが、検出した範囲では長さ4.3m強、最大幅40cm強を測る細長い溝状遺構である。中央部ではSK294に切られ、南東部ではSD34を切っている。断面の立ち上がりはわりあいはきりきりしており、底面は南側から北側にかけて緩やかに傾斜している。検出面からの深さは10cm程度である。埋土は暗灰褐色粘質土の単層で、炭化物も微量に混じていたが、遺物は出土しなかった。

SA12～14 (第152図・図版38)

2区A21～23グリッド北側からB21～23グリッドの南側にかけて位置する杭列である。A、B21グリッド付近の西側部分と、B23グリッド付近の東側部分の2群に大別でき、A21グリッドの北側を北西から南東へ向かって約7m延びる杭列をSA12、B21グリッドの中央から南東に向かって約3.5m延びる杭列をSA13、B23グリッドに位置し北北西から南南東方向に直線的に延びる杭列をSA14と呼称する。SA12、13の検出面の標高は0.75m前後、杭の頂点の標高は1.2m前後である。SA14は、平行する2条の杭列に横板が付随するものである。検出面の標高は0.5m前後、杭の頂点の標高は0.7～1.0mである。横板は杭の頂点より10cmほど下位に設置される。一枚の横板の設置には3～4本の杭が用いられている。SA12～14とも転用材と思われる角材、板材が用いられており、使用された用材に規格性はみられない。

SA12の約50m東に同時期の杭列である3区のSA15が位置するが、間をSD36、37に遮られるためか、杭列の方向は一致していない。また、SA12～14の周辺には方向性を持たない杭が多数点在するが、これらと杭列との関係は不明である。SA12～14は沓蓋堆積土中から検出されており、この堆積層は多量の木製品と土器を包含するが、杭列に伴う遺物を判別できなかった。

SD36、37 (第153、154図・図版39)

SD36は3区B25～26グリッドにかけて位置する、木器溜りを伴う溝状遺構である。調査区の西側五分の一ほどの範囲を占めるが、北東から南西方向に直線的に延びる遺構の上端によって溝の方向が推定されるが、全体の規模は不明である。検出した範囲内での長さは約9m、幅4.3m、深さは15cm前後である。溝の底面には流水によって削られた痕跡と思われる不整形なくぼみが数箇所認められ、南側の大きなくぼみは浅く緩やかに南へ向かって傾斜していく。

SD37は、SD36の東側を切って平行に延びる溝状遺構である。検出した範囲内での規模は、長さ8m、幅70cm、深さは8cm前後である。SD36、37の検出面の標高は0.5m前後である。

SD36の埋土は細砂・炭化物を含む暗灰色系の粘質土であり、SD37の埋土は黒褐色系の粘質土である。溝の形態や木器の集積状況などから、いずれも非常に緩やかな水の流れ、あるいは澱みが想定される。

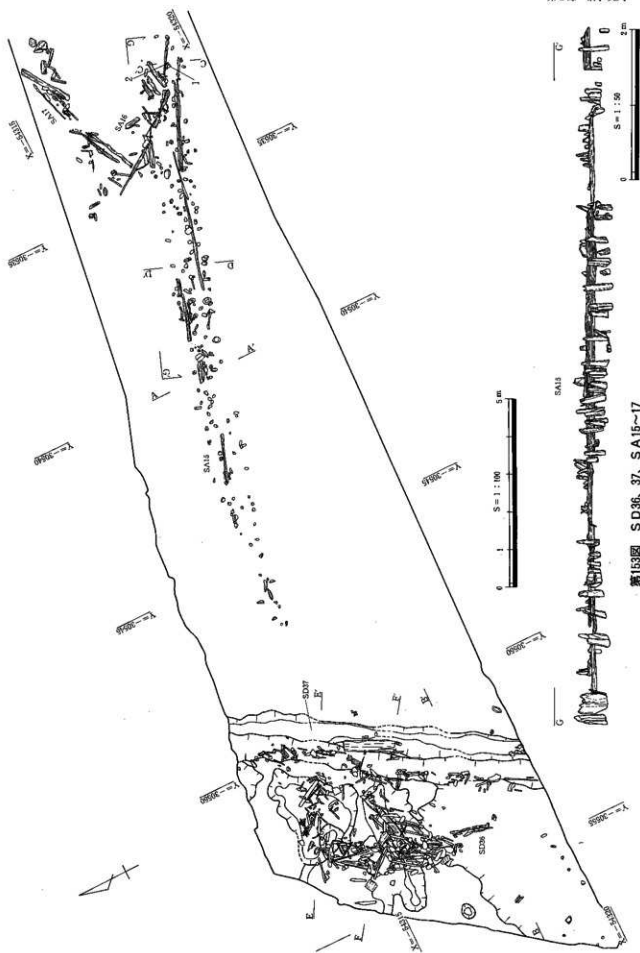
木器溜りは溝の北側部分に集中し、南北4.5m、東西3mほどの範囲に広がっている。底面の窪んだ箇所になりあう木器は大半が板材、角材、破材で、その遺存状況は当遺跡出土の他の木器に比べ著しく腐食の進んだものである。

土器は埋土中から大量に出土している。土器片はローリングを受けた痕跡がなく、遺存状態は良好である。これらはSD36内の水の流れが非常に弱まった段階、あるいは流れがなくなり、澱みながら埋没していく過程の中で混入したものと考えられる。

SA15～17 (第153、154図・図版40～42)

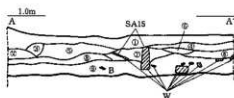
3区B26～28グリッドに位置する杭列である。SA15は調査区の中央から東側にかけて縦断し、北西から南東方向に16m延びる。SA15の北側にはSA16、17が位置する。SA16は北西から南東方向に向かって4.1m延び、SA15とは30°の角度で交差する。SA17はSA16の北東側に直交するかたちで接し、北東から南西方向に4m延びる。横板の重なり具合からSA16はSA15よりも古い段階のものと判断でき、杭列はSA17、16、15という順に構築されたと考えられる。SA15の検出面の標高は0.3m前後、杭の頂点の標高は0.7m前後、SA16、17の検出面の標高は0.2～0.3m、杭の頂点の標高は0.5m前後である。横板は杭の頂点より10～20cm程下位に設置されている。

基本的にSA15～17は、平行する2列の杭列に横板が付随する形態のものと考えられる。遺存している横板の

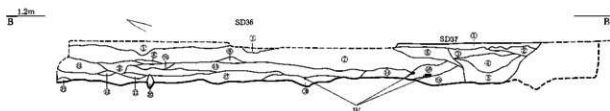


第153圖 S D36、37、SA15~17

第4章 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構

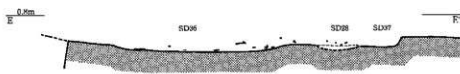
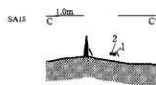


- ①灰赤褐色砂礫入り粘質土(灰化物小片、明礬系粘質土層小ブロック多量混じり)
- ②灰赤褐色砂礫入り粘質土(灰化物小片、明礬系粘質土層小ブロック少量混じり)
- ③灰赤褐色砂礫入り粘質土(①+黄灰色砂多量混じり)
- ④灰赤褐色砂礫入り粘質土(①+黄灰色砂多量混じり)
- ⑤暗灰色粘質土(灰化物混じり)
- ⑥暗灰色粘質土(灰化物混じり)
- ⑦暗灰色粘質土(黄灰色砂混じり)
- ⑧灰赤褐色砂礫入り粘質土(灰化物少量混じり、粘土)
- ⑨灰赤褐色砂礫入り粘質土(灰化物微量混じり、粘土)

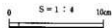
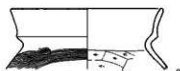
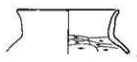
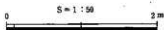


- ①暗褐色粘質土(明礬系粘質土ブロック混じり)
- ②赤褐色粘質土(細砂混じり、SD37層七)
- ③暗褐色粘質土(細砂混じり、②層より粘土)
- ④暗褐色粘質土(SD37層七)
- ⑤赤褐色粘質土(灰化物混じり、SD37層七)
- ⑥赤褐色粘質土(細砂混じり、SD37層七)
- ⑦暗灰色粘質土(細砂、灰化物混じり)
- ⑧暗灰色粘質土(細砂混じり、灰化物混じり)
- ⑨暗灰色粘質土(細砂、灰化物混じり)
- ⑩暗灰色粘質土(細砂、灰化物混じり、⑨層より粘土混じり)

- ①暗褐色粘質土(細砂、灰化物混じり)
- ②暗褐色粘質土(細砂混じり、①層より褐色粘土混じり)
- ③暗褐色粘質土(細砂混じり、灰化物、灰混じり多量)
- ④暗褐色粘質土(暗灰色粘質土混じり)
- ⑤暗灰色粘質土(暗灰色粘質土、黄灰色細砂、灰化物混じり、SD28層七)
- ⑥暗灰色粘質土(暗灰色粘質土、明礬系粘質土ブロック混じり、SD28層七)
- ⑦暗灰色粘質土(細砂混じり、⑥層より粘土)
- ⑧暗灰色粘質土(細砂混じり多量)
- ⑨暗灰色粘質土(細砂混じり)
- ⑩暗灰色粘質土(細砂混じり)



断面黒塗りには本製品、斜線付欄



第154図 SD36、37、SA15～17断面図、土層図及び出土遺物

規模は長さ1.5m前後、幅15cm程度、厚さ1～2cm程度である。使用される杭に規格性は見られず、角材や板材の転用材が用いられている。杭列の内側は砂の濃密に混じる灰色粘質土が堆積し、杭の外側には、内側に比べ砂分がやや少ない灰茶褐色粘質土がみられる。

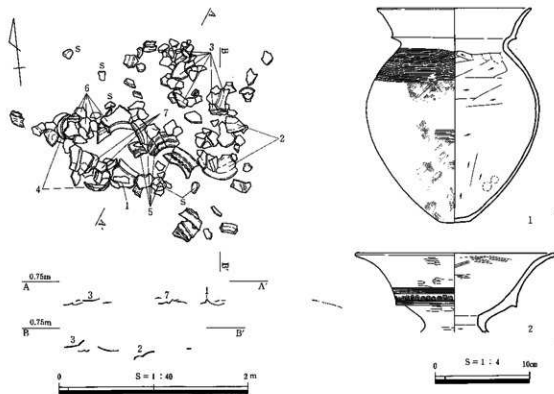
SA15の東端の杭の根元付近からは壺(1)、(2)が出土している。遺物はSA15の2条の杭列と横板で区切られた内側から出土しており、遺物の時期はSA16、17のやや上層に位置する土坑SK282、288と同一である。SA15の内側は本来流路であった可能性が考えられ、このことは土層断面とも齟齬をきたさない。SA15の西側には横板が見られず、また土層断面においても流路の立ち上がりを確認していないが、杭の方向からSA15の一部と判断した。土層断面による確認は出来なかったが、SA16、17もSA15と同様の形態を呈することから、小さな流路の護岸施設であったものとする。杭列の内側では角材、破材などが木器溜りを形成していたが、これらの木器の一部はSA15の杭、横板を内側から支える用材であった可能性もある。

(1)は外反気味に直立単純口縁の壺である。外面及び頸部内面はナデ調整、肩部内面にはヘラケズリがみられる。(2)は肩部にハケ状工具による波状文が施された甕である。口縁端部はまるくおさめ、口縁下部端部は水平方向にわずかに突出し、鈍い稜をなす。口縁部の内外面及び頸部外面はナデ調整、肩部内面にはヘラケズリが施される。

第3節 土器溜

土器溜7 (第155、157図・図版43)

3区B26グリッドNW区に位置する。大量に砂を含む黒色粘質土中で検出された。5m西に同時期の土器溜8が位置し、SD36の上端ラインからは東へ1mほど離れている。1.3m四方の範囲に甕、器台など7個体分の土器



第155図 土器溜7及び出土遺物

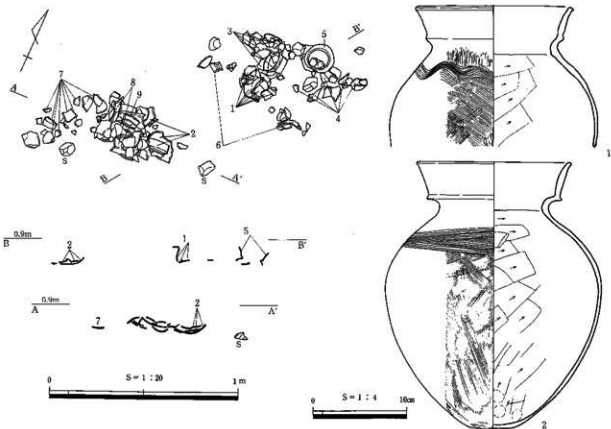
片が集積している。土器の接地面の標高は0.6m前後である。甕、器台は潰れ、地面に貼りついたような状態で出土した。土坑である可能性を考え、土器溜り周辺の精査を行なったが、掘り込みは確認できなかった。

(1) は肩部にハケ状工具による平行沈線文を施した甕である。口縁は外反し、上端部はまるくおさめ、下端部は水平方向にわずかに突出する。器形は倒卵形を呈し、非常に小さな底部を有する。内面は頸部と底部付近に指頭圧痕が認められる。(2) は器台である。口縁部は大きく外反し、口縁外面下方は2段の平行沈線文とその間を連続する円形スタンプ文で装飾される。外面にはヘラミガキがみられ、口縁部内面はハケメを施したのちナデ、頸部内面はヘラケズリが認められる。

土器溜 8 (第156、157図・図版43)

3区B25グリッドNE区、調査区の北西隅に位置する。黒色砂混じり粘質土中で検出された。SD36の上層に位置し、溝が埋没したのちに営まれたものである。南北2m、東西50cmの範囲内に、土器の集積が2ヶ所に認められる。北側で5個体、南側で4個体の甕を検出した。土器の周囲でこぶし大の自然礫も数点検出している。土器の接地面の標高は0.75mである。南西側の土器群は破砕の程度が甚だしく、口縁、胴部片とも潰れて折重なり、地面に貼りついた状態で出土しているのに対し、北側の土器群は遺存状態も比較的良好で、口縁部のほぼ全周する甕が3個体、口を上に向けた状態で検出されている。土坑である可能性を考え、土器溜り周辺の精査を行なったが、掘り込みは確認できなかった。

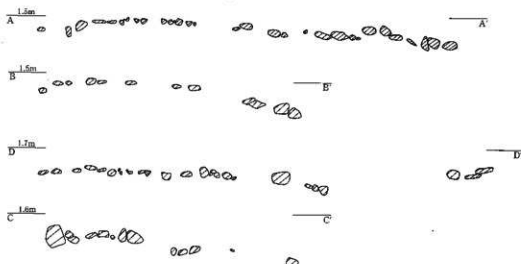
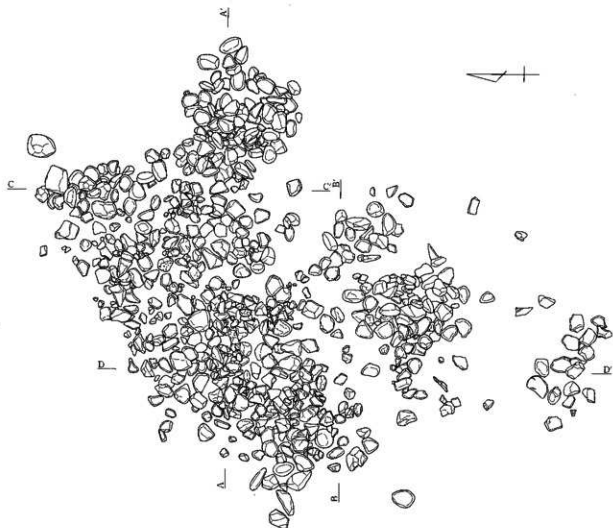
(1) は肩部にハケ状工具による波状文を施した甕である。外反する口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施され、端部には平坦面をもつ。肩部から胴部の外面はハケメ、内面はヘラケズリがなされる。甕(2)は倒卵形を呈し、非常に小さな底部をもつ。口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施され、口縁端部はやや丸くおさめ、口縁下端部は水平方向へつまみ出される。頸部から底部まで外面にはハケメが施され、肩部にはハケ状工具による沈線文が巡る。内面の頸部以下はヘラケズリが施され、底部内面には指頭圧痕が残る。



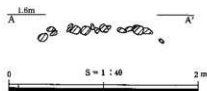
第156図 土器溜 8 及び出土遺物



第157圖 集石2及び出土遺物



第158図 集石3



第159図 集石4

第4節 集石

集石2 (第157図・図版43)

国道3区B25～26グリッドにかけて位置する集石である。SD36東岸の上層に、人頭大からこぶし大の大きさの礫が帯状に並ぶ。集石は、北東から南西方向に長さ約7.5m、幅1.2mで延びる。礫の接地面の標高は、南西側で0.5m前後、北東側で0.65m前後である。集石は、円礫や板状安山岩などの角礫を主体に構成されているが、一部敵石、砥石、凹石などの石製品も含まれる。

集石はSD36埋没前後に設営されたものと思われるが、SD36の護岸として機能しない在り方である。集石2とSD36の方向の一致や、同時期の土器溜7、8の形成など、集石の周辺では他の場所では見られない様相を呈しており、SD36を意識した遺構形成が窺える。

集石2に伴う遺物としては壘(1)がある。口縁端部は平坦面をなし、口縁下端部は水平からやや下方に向かって鋭くつまみ出される。肩部には波状文が施されている。

集石3 (第158図・図版44)

国道1区B15グリッドNW区からC15グリッドSW区にかけて位置する。長軸2.73m、短軸1.8mの範囲に、拳大から人頭大の礫を集積するものである。長軸方向は北東-南西方向を指し、平面形態は長方形を呈する。検出レベルは標高1.38～1.60mの間にあたる。中央部が高く、縁辺が低くなる、断面弧状を呈する形状である。遺物包含層中からの検出のため、遺構に伴う遺物は判別できなかった。

集石4 (第159図・図版44)

国道1区B14グリッドSW区に位置する。長径65cm、短径51cmの範囲に、拳大の礫を集積するものである。平面形態は楕円形状を呈する。検出レベルは標高1.5～1.55mの間にあたる。中央部が高く、縁辺が低くなる、断面弧状を呈する形状である。遺物は出土していない。

第5章 古墳時代以降の遺構

第1節 土 坑

SK307 (第163図・図版45)

国道2区B18グリッドNW区に位置する。遺構南東部をSK310に切られている。長径1.60m、短径1.05m、深さ13.5cmを測る楕円形状の土坑である。底面はほぼ平坦で、断面逆台形状を呈する。埋土は2層に分層され、炭化物を含む黒色砂混じり粘質土が主体である。遺物は、壺(1)、勾玉形土製品4点(2~5)、土玉(6)が出土している。勾玉形土製品4点のうち3点は、土坑の北(4)、西(2)、南(3)の各壁面裾部で出土しており、東側では出土を確認できなかった。埋土中出土遺物の中から(5)を捕捉したが、本来四方に置かれたものであると推察する。土玉(6)は(3)に近接して出土しており、土坑東側で炭化材が検出されていることとも合わせ、何らかの祭祀行為に関連する作為的な遺物配置が窺われる。

(1)は、埋土中から検出された甕で、外反する口縁部を有する。端面上端は平坦面をなし、下端は横方向に突出する。口縁部内外面はヨコナデ調整し、肩部内面はケズリ調整している。(2)~(5)は、長さ2.3~3.9cm、幅1~2cmを測る。(5)がもっとも小型軽量で重さ2.4gを量り、(4)が最も大型で重さ9.5gを量る。手捏ね成形で粗雑な作りだが、いずれも穿孔させて勾玉形の形態をとっている。遺構の時期は、古墳時代前期である。

SK308 (第164図・図版46)

国道2区C19グリッドSE区に位置する。長軸1.12m、短軸96cmを測る隅丸方形形状を呈する上坑である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは11.2cmを測る。埋土は黒茶褐色粘質土の単層である。径3~22cmの平石が、多数埋土中から検出されたが、いずれも底面より浮いた状態にある。(1)は、埋土上層から検出した脚台部である。体部内面をケズリ後ナデしており、脚部内面はケズリ後ミガキ調整を加えている。(2)は骨角製の漁撈用刺突具と思われる、北東部の底面付近で出土した。遺構の時期は、古墳時代前期である。

SK309 (第165図・図版46)

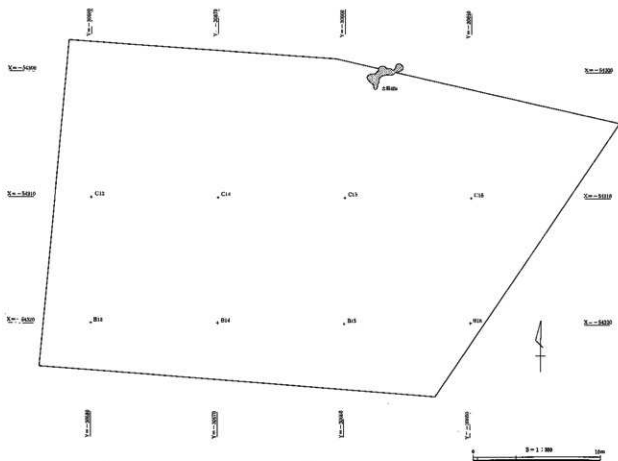
国道2区B20グリッドNE区に位置する。長径71cm、短径57cmを測る楕円形状を呈する土坑である。底面は、北西側から南東側に向かって緩やかに傾斜しており、検出面からの深さは、南東側で11cmを測る。埋土は2層からなり、暗灰褐色細砂混じり粘質土を基本とする。(1)は埋土上層から検出された甕で、複合口縁が形骸化して単純口縁的形態を呈する。肩部外面ハケ調整、内面ケズリ調整である。遺構の時期は古墳時代中期である。

SK310 (第166図・図版46)

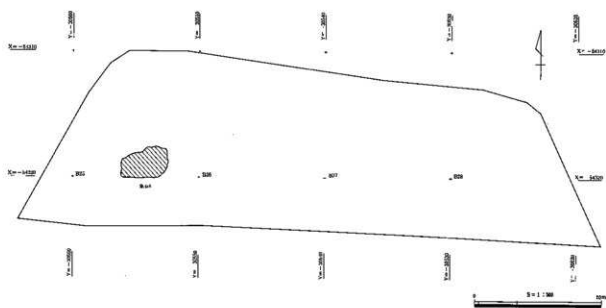
国道2区B18グリッドNW区に位置している不整形な土坑である。遺構の北西側はSK307を切っている。また東端はビット状の落ち込みで切られている。長軸1.3m、短軸81cm、検出面からの深さは7.5cmを測る。底面は平坦で、断面形状を呈する。埋土は微量な混入物の差によって暗灰褐色粘質土が2層に分層される。②層には炭化物が少量混じる。遺物は、底面から浮いた状態で出土しており、(1)は土師器の壺(1)で単純口縁をなす。胴部外面ハケ調整で内面粗いケズリ調整を施す。土玉(2)、石甌丁(3)、ガラス小玉(4)も埋土中から出土しているが、これらは前代のものが混入したものと考えられる。遺構の時期は、古墳時代後期である。

SK311 (第167図)

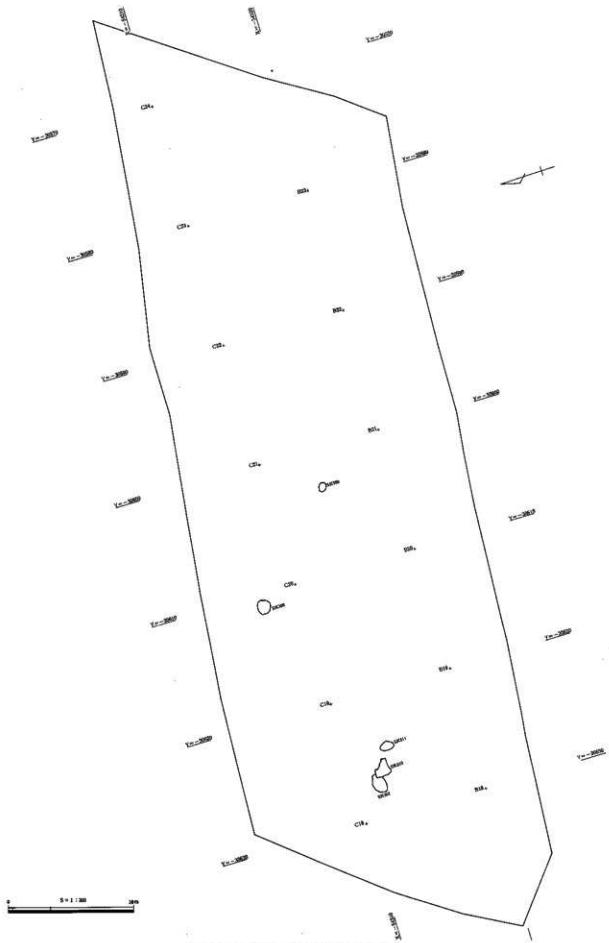
国道2区B18グリッドNE区に位置する。長径1.1cm、短径70cmを測り、検出面は楕円形状、底面は不整な円形状を呈する土坑である。検出面からの深さは47cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土が2層に細分される。埋土中より、須臾器の坏蓋(1)が出土している。体部を欠き、天井部のみである。外面はヘラ切り後ナデ調整し、内面は同心円タキが残る。7世紀代に比定される。



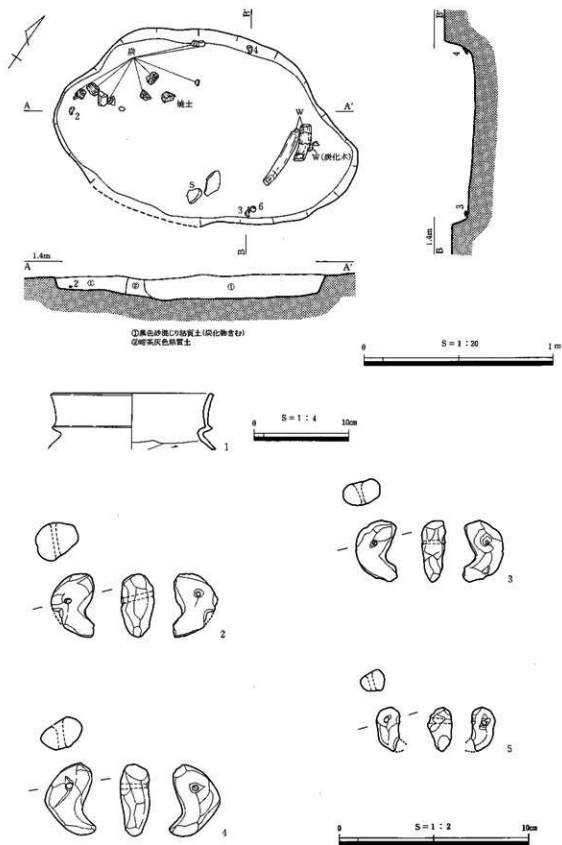
第160図 古墳時代以降1区遺構配置図



第161図 古墳時代以降3区遺構配置図



第162圖 古墳時代以降2区遺構配置圖

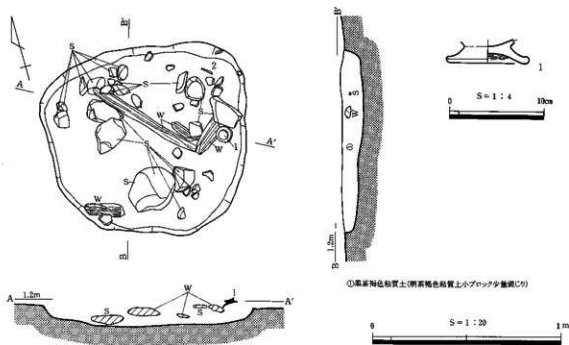


第163図 S K307及び出土遺物

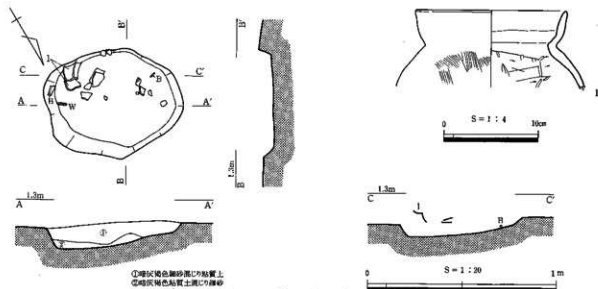
第2節 土器溜

土器溜 9 (第168図・図版47)

国道1区C15グリッドNW区からD15グリッドSW区にかけて位置する。調査区の北側壁中央部にあたる。北側にさらに広がる可能性もある。I層中で検出されたが、土坑は確認されなかった。土器は、標高1.18m～1.42mの24cmの間で検出されているが、完形のもが含まれており、設置面の標高が、1.18m～1.20mにあたる



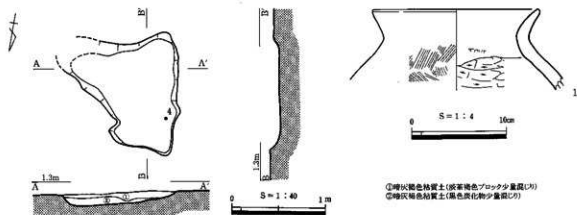
第164図 SK 308及び出土遺物



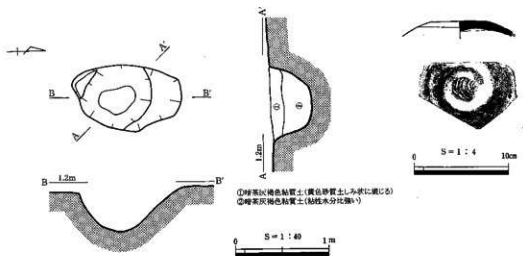
第165図 SK 309及び出土遺物

ものが多い。東西2.78m、南北1.94mの範囲に13点の土器が検出された。特に明確なまとまりを示すわけではなく、散在した状態にある。甕(1、2、9、10)、小型の甕(4、12、13)、壺(5~8)、小型の壺(3、11)からなる。甕と小型の甕は破砕した状態にあるのに対し、壺と小型の壺は多少の破損はあるものの、概ね完形に近い状態で検出された。

(1)は、外反する口縁部で、端面上端を摘み出し気味にし、下端は横方向に突出させる。内外面をヨコナデする。胴部は肩が張り、倒卵形を呈する。外面ハケ調整で、肩部にヘラ状工具による刺突文が巡り、内面はケズリ調整を施す。(2)は、外傾する単純口縁で、端部を面取りする。内外面をヨコナデする。胴部は肩が張らず、球形に近い形状を呈する。外面ハケ調整で、内面ケズリ調整を施し、底部に指押さえがみられる。(3)は、胴部に比して長く外傾して伸びる口頸部で、内外面ナデ調整を施す。胴部は寸の詰まった球形で、外面細かいハケ調整、内面ケズリ調整、底部に指押さえがみられる。(4)は、やや内傾気味に立ち上がる口縁部で、下端は斜め下方に突出する。内外面ヨコナデ調整である。胴部は球形を呈し、外面ハケ調整後、肩部にヘラ状工具による波状文と平行沈線が巡り、その下部にヘラ状工具による連続刺突が巡る。内面はケズリ調整で、頸部下と底部に指押さえがみられる。遺構の時期は、古墳時代前期に相当する。



第166図 S K 310及び出土遺物

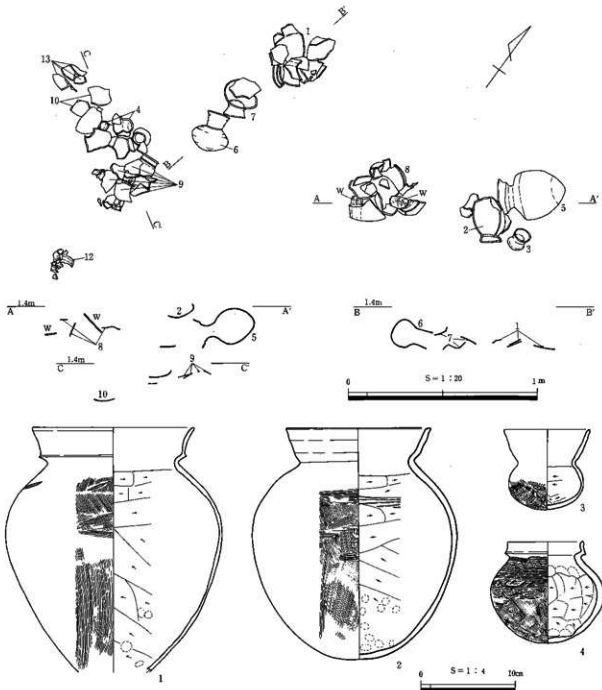


第167図 S K 311及び出土遺物

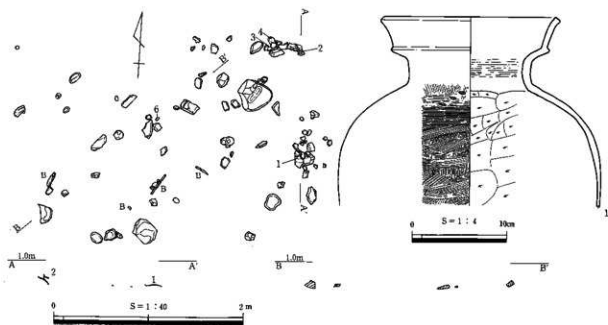
第3節 集石

集石5 (第168図・図版47)

3区B25グリッドのSE~SW区に位置する。南北2.5m、東西3.5mほどの範囲に人頭大~拳大の角礫、円礫が点在する。礫の接地面での標高は0.7~0.75mである。集石2南西端の延長線上に位置するが、レベル的には10cmほど高い上層にあたる。集石を構成する礫は大半が自然礫であるが、磁石3点、蔽石1点、凹石1点が含まれる。また集石の中央付近からは骨玉1点が出土している。SD36の埋没後、作為的に配置されたものと考えられるが、その性格は不明である。集石5に伴う遺物としては壺(1)が挙げられる。口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施され、平坦面を有する口縁端部はわずかに内側へつまみ上げられている。口縁下端部は水平方向につまみ出され、鈍い稜をなす。肩部にはヘラ状工具による刺突が数々所みられる。遺構の時期は、古墳時代前期である。



第168図 土器溝9及び出土遺物



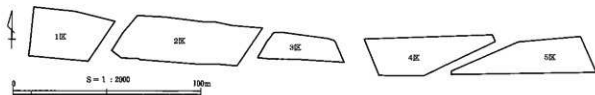
第168図 築石5及び出土遺物

第6章 関連諸分野の成果

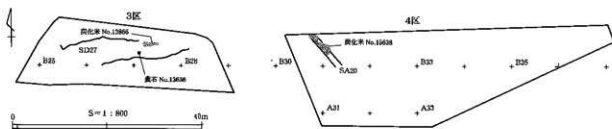
第1節 はじめに

当章では、国道調査区3～5区で採取された資料をもとに行われた、4件の自然科学的分析、及び研究の成果を報告する。本報告書は1区から3区までを対象としたものだが、資料の採取地点が次年度報告の国道調査区4区、5区にも及ぶため、採取地点について若干の説明を行っておきたい。国道調査区全体の配置については、「一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 青谷上寺地遺跡1」の第1章で触れているが、下図の第170図にも配置図を掲載した。3区の概要については本報告書2～5章を参照していただくとして、4区、5区の概略について述べておきたい。4区では、海成層の上層に弥生時代前期の遺物を包含する湿地堆積層が形成され、弥生時代中期にいたって一部に集石などの遺構が築かれるようになる。弥生時代後期後葉段階に、片側にのみ矢板列を設けるSD11類似の大規模な溝SD38が築かれる。この溝が次第に堆積し、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭頃には埋没し、上層に土器溜が形成されるようになる。この時期、SD38の東側に15m程度の距離をおいてほぼ平行するSD39が築かれ、これ以东5区にいたるまで、遺構の数、遺物の出土量は激減する。第3節で報告するが、5区から採取された土壌資料からイネのプラント・オパールが検出され、よってSD39以东が弥生時代中期～後期の段階に水田化されたことが確認された。5区では、海成層の上層に弥生時代前期の遺物を包含する砂層が堆積し、その上層から湿地の堆積が始まる。4区同様中期～後期の段階に水田が形成される。

「第2節 青谷上寺地遺跡の炭化米特性と稲作起源」に係る資料は2点で、No.13866の炭化米資料は、国道調査区3区のB27グリッドSW区、SD27の埋土中で、北岸とSA11の間から検出されたものである（第27図、第171図）。検出層は弥生時代中期後葉に相当する。No.15638の炭化米資料は、国道調査区4区のB30グリッドNE区～B31グリッドSW区、SA20の杭列、横板の間に堆積していたもので、弥生時代後期後葉に相当する（第171図）。第3節～第5節に係る資料は、いずれも国道調査区5区から採取されたものであるが、それぞれ節末に「補遺」を設け、検出層位等について記述した。なお、国道調査区3区B27グリッドSW区、SD27の弥生時代中期後葉に相当する埋土中から糞石（No.13636）が出土し（第171図）、これを分析した結果、人間由来の鞭虫卵が多量に検出された。分析結果については、「一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 青谷上寺地遺跡1」の「第9章 関連諸分野の成果 第3節 青谷上寺地遺跡出土糞石の微遺体分析」に掲載している。



第170図 国道調査区1～5区配置図



第171図 3、4区資料検出地点